

研究報告第七冊

駿河小塚

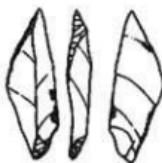
—静岡県における先土器文化の研究—

芝川町教育委員会
沼津考古学研究所

駿 河 小 塚

—静岡県における先土器文化の研究—

小野真一・唐紙一修
秋本真澄・佐野文孝



1 9 7 2

芝川町教育委員会
加藤学園考古学研究所

再版に当つて

「駿河小塚」で芝川町の遺跡の概要を紹介し、特に小塚遺跡については発掘の経緯と収集分析整理の詳細を収録いたし、調査報告書として「駿河小塚」を広く頒布いたしましたところ、ことのほか文化財に対するみなさんの意欲と関心が高まり、数句を経ずして報告書が品薄となり、その後多くのみなさんから再版の要望がありましたので、このたび再び印刷に付することといたしました。

芝川町としては、この埋蔵文化財を大切に保存し後世に伝承すべく去る八月下旬小塚遺跡碑を現地に建立いたしました。

今後この調査報告書が広く世人に親しまれ先土器文化の学術的研究の資料として役立つならば誠に幸甚であります。

昭和四十九年十月

芝川町教育長 望月三男

序

私たちの住む芝川町は富士山西麓にあって静岡・山梨の県境に位置し、富士の雪解水が四季を通じて豊かに流れる芝川が縱貫し、甲斐より南流する富士川と合流するところで、生活条件に恵まれた自然環境にある為、歴史上、学術上価値の高い文化財が残されています。

特に町内全域に散在する遺跡は三十ヶ所を数え、古くから人々が生活していたことが明らかで、これら遺跡は自然保護の立場から、過去一度も発掘調査はしませんでしたが、たまたま一昨年より農免道路建設の工事が施行されるに至り、町内で最も広大な小塚遺跡地を縦断する為、急きよ教育委員会の手により発掘調査を実施する運びとなり、調査団長に齊藤静夫氏を依頼し、調査主任に小野真一氏をお願いし、以下強力なスタッフにより八月の炎天下に発掘作業をしました。

清水土地改良事務所、県教委の全面的なご協力により順調な発掘作業がなされ、特に地元のかたがたを始め、町民各位や町内中学生、高校生の積極的な労働奉仕は誠に有難く、このように芝川町一体となっての発掘は貴重な経験であり、小塚から出土された数々の遺物をとおして先人の足跡を知ることができ意義深いものです。

私たちは郷土を愛し文化財の保護を推し進めることが必要であり、ささやかな本書を通じて文化財の価値を再認識し、芝川町の文化財の一端をご理解願えれば幸いです。

昭和四十七年一月

芝川町教育長　野　村　登　喜　男

序

芝川町小塚遺跡の調査は、昨夏富士宮市大石原千居の配石遺構の発掘調査の後半、併行して調査が実施され、小野真一氏がその総指揮にあたり、慶應義塾大学文学部史学科の学生諸君も数名応援協力した。小塚の台地上に新しい農道新設工事が行われるに当たり、同町教育委員会より事前調査が要請され、小野氏の出馬となり、調査の結果縄文文化早期の押捺文土器片、縄文文化以前の黒曜石製のナイフ形石器などが発見され、わが国後期旧石器文化（先土器文化）の遺跡調査としては予想以上の成果を得て、今後富士山麓においては休場遺跡と共に、この地方の縄文文化以前の代表的遺跡として、本報告の資料は今後諸種の考古学書に引用されることになると確信する。

本町付近の遺跡は古く佐野武男、足立鉄太郎氏などの踏査があり、静岡県史第一巻（一九三〇年）には楠金から縄文文化中期の土器・石錐・打製石器・磨製石斧・石匙などの出土が報告され、他に旧村時代の小学校付近から石錐の発見と、大久保から石棒の発見が記されている。

この富士川流域に縄文文化早、前期の資料が知られるようになったのは当時県立静岡中学校に在学の加藤明秀、芹沢長介両氏が大沢和夫先生の手ほどきで、考古学に興味を持ち一九三六年、富士川町木島遺跡出土の土器と伴出器について、雑誌「考古学」第七巻第九号に論考を発表したのに端を発している。

前記佐野武男氏による岳南考古学会などが設立され、富士南麓の考古学研究の歴史は過去半世紀以上の永きにわたっており、この岳麓地帯の考古学研究を基礎にして中央学界にデビューした人々も一、二にとまらない。

岳麓地域にはまだまだ日本考古学研究史上に、大きな転期を与えるような貴重な遺跡が多数知られずに地下に眠っているものと推察され、この方面的研究に今後大きな期待がかけられると共に、本遺跡の発見調査もこの「ステップ」として重要な意義をもつものと考える。

著者の小野真一氏とは登呂遺跡調査に参加以来の旧知の間柄で、昨夏も大石原千居遺跡の調査、本遺跡の調査にも立合つた縁もあり、請はれるまま駄文を草した次第である。

昭和四十七年二月

慶應義塾大学教授

江

坂

輝

弥

本書刊行に当つて

芝川町には、繩文期を中心とした遺跡が、各地に散在し、古代の人々の生活文化の跡が残されている。道路造り、宅地造成、河川の改修、氾濫、田地の耕作等によつて表面に当時使用したと思われる遺産の数々が発見される。我々の未調査の土地も數多くあると思うが、繩文期の土器の現れる地点だけでも、既に三十三ヶ所が数えられている。最近ではこれらのものに対する人々の関心も強く、発掘遺物を捨て去ることもなく、学校等に運び、保存を求めるようになって来た。人々の口にも古代の我々の祖先と思われる人々の生活の場が、此處にあつたのかと、深い興味を覚えるようになって来た。

芝川町では西山部落から稗久保部落を通り富士宮市安居山部落へ通する新しい農免道路の工事を行うことになった。此の道路の一部に小塚遺跡がある。此の遺跡は先土器時代から繩文前期に至るものと云われている。従来も此の附近一帯から黒曜石のヤシリ等が耕作者によつて発見されていた。町の人々はこれを「矢の根石」と呼んでいる。芝川町教育委員会では此の地の発掘調査を行ふことになった。此の発掘は、「土木工事その他の他埋蔵文化財の調査以外の目的で、貝塚、古墳、その他埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されている土地を発掘しようとする場合は……」の条項によつて、発掘調査を行つたものである。即ち、文化財保護法に基いての発掘調査によつたものである。

この作業は芝川町としては始めての仕事であり、しかも短期間のものでもあり、早急に行わなければならなかつた。

芝川町教育委員会は、先づ加藤学園沼津考古学研究所の小野先生に調査を依頼することにきめ、清水土地改良事務所との打ち合せ、土地の所有者の了解、発掘調査団の結成、資材の購入、協力者の決定及び発掘日程等について細かな計画を立てた。発掘の対象となる土地は農免道路となる部分の巾七米、長さ二〇〇メートルの地域である。

数回の打合せの結果、四六年八月一日より同月末に至る期間と云うことになった。

以来此の予定に従つて作業は連日行われていた。八月一六日近隣の高校生、柚野、芝川の中学生、小野先生の助手の大学生三名、総勢四〇余名の力によつて第一日の発掘が行われた。三米四方位の発掘が各所に行われていった。連日の炎天下の作業によつて、次々にローム層の中から石器、それも黒曜石や頁岩より作られた石刃核、ナイフ形石器、尖頭器、スクリバー等旧石器の類が発見された。県下に於て先土器時代遺跡の発掘調査例は数少いが、その中で小塙遺跡は相当高く評価されると云う。

此の度の調査に当つて考えさせられたことは人々の協力と云うことである。地元の方々のこころよい協力、特に或る老人の如きは、発掘に少しでも助けになるようと、毎日我々と一緒に現地で、被いかぶさつてゐる草刈にはげんでくれたこと煙に顔を出してくれた里人が色々と古いことを話してくれたこと、炎天下に欠くことの出来ない飲料水をこころよく与えてくれた麓の家、何くれとなく便宜をはかつてくれた役場の方々、各中学校、高等学校、更に文化財専門委員、御土史研究会こうした方々の心温まる協力の中に無事二八日作業を終了することが出来た。物事をやり遂げるに人の心の協力が大切であるということが此の作業を通してわかつた。今ここに報告書が完成するに当つて心からお礼を申し上げたい。なおこの報告書が芝川町誌の第一頁をかざることの出来るのをうれしく思う。

さて文化財と云われて保存に力を入れなければならないものは多い。何万何千年前の古いものだけでなく、有史以来の建造物、絵画、工芸、城跡、旧民家等今の人びと、未来の人たちの為に当時の文化をとどめておきたいものは多い。國は文化財保護法を作つてその保護に当つてはいる。お互に文化財を護り、数々の文化を國民の文化向上に資すると共に、新しい眼でこれらをみつめてゆきたいものである。

駿河小塚

(小塚遺跡発掘調査報告書)

目 次

序 芝川町教育長 野村登喜男
序 慶応義塾大学教授 江坂輝弥

本書刊行に当つて 小塚遺跡調査団長 斎藤静夫

例 言

第一章 序 説 (一)

第二章 地理的環境 (セ)

第三章 調査の経過 (二)

第四章 遺跡の概要 (八)

第五章 出土遺物 (三四)

第一節 先土器時代の遺物	(三四)
第二節 繩文時代の遺物	(三三)
第六章 周辺の遺跡	(四一)
第七章 駿豆地方における先土器時代遺物	(五〇)
第八章 考 察	(一一)
第一節 静岡県の先土器文化	(二二)
第二節 石器についての考察	(二九)
第九章 結 語	(一〇〇)
調査関係者氏名一覧	(一〇三)

図版目次

- 第一 遺跡の遠望
富士山と芝川流域平野に挟まれた台地
山里に囲まれた遺跡（東方丘陵上から）
- 第二 遺跡の近景
平垣な台地面に立地する遺跡
(西方より)
農面道路内の発掘風景
- 第三 小塚遺跡の地層
地層断面の様相
- 第四 旧石器の出土状態(1)
ナイフ形石器の出土状態
- 第五 刀器の出土状態
刀器の出土状態
- 第六 旧石器の出土状態(3)
標器の出土状態
- 第七 旧石器の出土状態(4)
刃器の出土状態
剝片の出土状態
- 第八 旧石器の出土状態(5)
剥片の出土状態
石核の出土状態
- 第九 旧石器の出土状態(6)
頁岩製石核の出土状態 A
- 第十 小塚出土旧石器(1)
ナイフ形石器 表面
- 第十一 小塚出土旧石器(2)
裏面
- B
- 第十三 小塚出土旧石器(4)
剝片 表面
裏面
- 第十四 小塚出土旧石器(5)と石皿
石 核 石 皿
- 第十五 小塚出土縄文時代石器
石 皿
- 石錐と有舌尖頭器
- 第十六 小塚出土縄文土器
早期縄文土器片
前期縄文土器片
- 第十七 小塚出土旧石器
表面
- 第十八 小塚出土旧石器
裏面
- 第十九 小塚出土旧石器
表面
- 第二十 小塚出土旧石器
裏面
- 第二十一 小塚出土旧石器
表面
- 第二十二 小塚出土旧石器
裏面
- 第二十三 尖頭器の出土状態 A
標器・刀器・剝片 表面
- 第二十四 尖頭器の出土状態 A
標器・刀器・剝片 表面
- 第二十五 尖頭器の出土状態 B
標器・刀器・剝片 表面

挿 図 目 次

第1図 静岡県内先土器時代遺跡分布図(四)	第19図 小塚出土縄文土器拓影(2)	第36図 駿豆地方の旧石器実測図(4)
第2図 小塚遺跡の住居と芝川町の遺跡分布(八)	第20図 小塚出土縄文時代石器実測図(1)	第37図 駿豆地方の旧石器実測図(5)
第3図 遺跡付近の景観(一)	第21図 小塚出土縄文時代石器実測図(2)	第38図 駿豆地方の旧石器実測図(6)
第4図 発掘風景(一)	第22図 芝川町出土の遺物写真(一)	第39図 駿豆地方の旧石器実測図(7)
第5図 婦人会幹部の見学(一)	第23図 森林出土磨製石斧(一)	第40図 駿豆地方の旧石器実測図(8)
第6図 小塚遺跡調査地域図(一)	第24図 芝川町出土土器拓影(1)	第41図 駿豆地方の旧石器実測図(9)
第7図 A・B1-3グリッド遺物分布図(三)	第25図 芝川町出土土器拓影(2)	第42図 駿豆地方の旧石器実測図(10)
第8図 A・B4-6遺物分布図(三)	第26図 芝川町出土土器拓影(3)	第43図 駿豆地方の旧石器実測図(11)
第9図 A・B7-9グリッド遺物分布図(三)	第27図 芝川町出土土器拓影(4)	第44図 駿豆地方の旧石器実測図(12)
第10図 A・B10-12グリッド遺物分布図(三)	第28図 芝川町出土土器拓影(5)	第45図 駿豆地方の旧石器実測図(13)
第11図 A・B13-15グリッド遺物分布図(三)	第29図 芝川町出土土器拓影(6)	第46図 駿豆地方の旧石器実測図(14)
第12図 A・B16-17グリッド遺物分布図(三)	第30図 芝川町及び富士宮市出土土器拓影(一)	第47図 駿豆地方の旧石器実測図(15)
第13図 小塚出土旧石器実測図(1)	第31図 静岡県東部における	第48図 駿豆地方の旧石器実測図(16)
第14図 小塚出土旧石器実測図(2)	先土器時代遺跡の分布(1)	第49図 駿豆地方の旧石器実測図(17)
第15図 小塚出土旧石器実測図(3)	(二)	第50図 駿豆地方の旧石器実測図(18)
第16図 小塚出土旧石器実測図(4)	第33図 駿豆地方の旧石器実測図(1)	第51図 駿豆地方の旧石器実測図(19)
第17図 小塚出土旧石器実測図(5)	第34図 駿豆地方の旧石器実測図(2)	第52図 駿豆地方の旧石器実測図(20)
第18図 小塚出土縄文土器拓影(1)	(三)	(三)
第19図 小塚出土縄文土器拓影(2)	(三)	(三)
第20図 小塚出土縄文時代石器実測図(1)	(三)	(三)
第21図 小塚出土縄文時代石器実測図(2)	(三)	(三)
第22図 芝川町出土の遺物写真(一)	(三)	(三)
第23図 森林出土磨製石斧(一)	(三)	(三)
第24図 芝川町出土土器拓影(1)	(三)	(三)
第25図 芝川町出土土器拓影(2)	(三)	(三)
第26図 芝川町出土土器拓影(3)	(三)	(三)
第27図 芝川町出土土器拓影(4)	(三)	(三)
第28図 芝川町出土土器拓影(5)	(三)	(三)
第29図 芝川町出土土器拓影(6)	(三)	(三)
第30図 芝川町及び富士宮市出土土器拓影(一)	(三)	(三)
第31図 静岡県東部における		
先土器時代遺跡の分布(1)		
(二)		
第32図 静岡県東部における		
先土器時代遺跡の分布(2)		
(三)		
第33図 駿豆地方の旧石器実測図(1)	(三)	(三)
第34図 駿豆地方の旧石器実測図(2)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(1)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(2)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(3)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(4)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(5)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(6)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(7)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(8)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(9)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(10)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(11)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(12)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(13)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(14)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(15)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(16)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(17)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(18)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(19)	(三)	(三)
駿豆地方の旧石器実測図(20)	(三)	(三)

例　　言

一、本書は昭和四十六年八月九日から八月二十八日まで、二十日間にわたる静岡県富士郡芝川町西山字小塚地内における遺跡の発掘調査報告書である。

二、本書の執筆は、第一章、第九章及び第八章第一節を小野、第二章を佐野、第三章を唐紙、第六章を唐紙・佐野、第四章、第五章、第七章及び第八章第二節を秋本が、それぞれ担当した。

三、遺物の実測並びに各測図の整理・トレース・写真撮影などは主として秋本が行ない、小野・唐紙・佐野がこれを補った。また拓本は第五章の分を秋本、第六章の分を小野・唐紙・佐野及び望月清、望月康敬両名が作製した。なお写真的引伸に当つては尾形礼正氏の協力を受けた。

四、文体の統一及び総括的編集は小野が行ない、校正には村岡将江・大嶽久江・鈴木宏子など、沼津考古学研究所の所員一同及び唐紙・佐野、さらに山田繁治・野村昭光等駿豆考古学会のメンバーが協力して当つた。

五、おわりに、本遺跡の発掘調査並びに本書作製に当つて、ここに列挙した方々は勿論、それ以外の多数の方々からも厚い御指導と御援助を得たことに対し、深く感謝の意を表する次第である。

駿

河

小

塚

第一章 序 説

昭和二十四年、相沢忠洋氏により群馬県岩宿遺跡が発見されて以来、先土器時代の遺跡は年と共に増加していった。そして昭和三十八年には、静岡県内だけでも四七個所が報告されるに至ったのである。今日では県東部だけでも百余個所を数える筈である。

ところで今日の発見数の増加の蔭には、多くの研究者や学生たちの労苦の跡が偲ばれるが、その先駆をなしたものに富士山麓に住む一学徒があった。現在御殿場市文化財専門委員になつてゐる鈴木恒治氏がそれである。彼は昭和二十三年、県立沼津商業高校三年在学中で、郷土研究部のリーダーであったが、同部の創立者にふさわしく、きわめて熱心な学生であった。親友の大島淑嗣氏と共に、その足跡は箱根山地から富士山麓、愛鷹山地とかなり広い地域に及んでいた。発見した遺跡、採集した遺物は無数であったが、彼は何一つ私物化せず、せつせと母校の狭い郷土室に集積していく。そんな彼がある日、ふと三島市萩ヶ窪のナーゴ山で拾つた石器の中に、石鏽でもなく、石槍でもなく、それでいて未製品でもない黒耀石の加工品が幾つかあつた。二十三年十月の事である。戦後間もない不況の時であり、また考古学研究の再開されて間もない時期だけに、これという文献もなく、また田舎の一学生にとって指導を仰ぐべき適切な人物も付近には見当らなかつた。せいぜい二才年上の筆者（小野）がコーチという事で沼津商業高校に毎週木曜日の午後出かけていく程度で（これを木曜会といつた）そのコーチも亦浅学非才でどうにもならなかつた。しかし彼はその僅かな石器のもつ真相を追つて、あらゆる努力を続けた。そしてたまたま外国の考古資料を紹介する本を見つけ、その中にあつた旧石器のあるグループに近似することを知つたのである。そして卒業間もない昭和二十四年の春、郷土研究部で発刊した「郷のあゆみ」の創刊号に、「三島市萩ヶ窪ナーゴ山

遺跡中間報告」と題して、この石器類を紹介したのである。せっかくの実測図も孔版印刷であつたため、印刷屋がフリーハンドで書き、不正確なものになってしまった。しかし彼はこれらの石器が繩文時代のものではなく、それ以前の旧石器らしい事を指摘しているのである。筆者も昭和三十二年「静岡県東部古代文化総覧」を書いた際、鈴木氏発見の石器を紹介し、それらがブレイドらしきもの二点、エンドスクレーバーらしきもの二点であることを記述しておいた。

こうしてわが静岡県下においては、相沢忠洋氏よりももと早く、日本の旧石器に着目していた一学徒を生み出していたのである。それが世に知れずして終ったのは彼が若く、また専門家の目に入らなかつたため、マスコミの波に乗らなかつたためである。彼の家は富士山麓の御殿場市で、著名な商店を経営し、経済的には大変恵まれていたが、長男として家業に専念するよう祖父に云われ、止むを得ず実業界に入つだが、今なお駿豆考古学会委員として活動されている。

昭和三十年以降は、筆者らも県東部各地で先土器資料を目撃するようになり、中野国雄・笹津海祥氏らも多くの資料を集められた。また高校生や中学生による探索は、きわめて積極的で、「赤土を探せ」ということが相言葉となり、特に沼津市北辺の愛鷹山地が集中的に攻撃された。沼津商業高校による尾尻、沼津第二中学校による葛原沢、吉原第三中学校による休場、沼津女子高校による上松沢平などがそれである。また箱根山地では芦山高校と沼津東高校が、中伊豆地方では大仁高校が活動し、三十年代の県東部はさながら高校・中学各郷土研究部による「ブレ繩文」探しのオリンピックであった。沼津女子高校の女生徒達約十名が、筆者や白石竹雄氏（当時同校教諭）を誘い、日曜一日をかけて旧石器十個以上採集の目標を立て、箱根山地の函南町内で十一個採集の実績を挙げ、喜び勇んで帰つたのも三十五年頃であった。女子でさえこのようであつたから、男子の活動はめざましかつた。その中から秋本真澄（葦山高出身）、須摩満（沼津商業高校出身）、漆畠稔（大仁高校出身）各氏ら若い研究者が育つたのである。

昭和二十五年には、筆者と沼津海祥氏により、沼津市柳沢の大廓遺跡が発掘された。ここは從来繩文中期と弥生後期の複

合遺跡と考えられ、この時の目標も弥生後期の住居址を調査することにあつた。しかし実際には土師初頭の住居址二軒を発見し、多くの出土遺物を得たが、その副産物として黒曜石製のナイフブレイド（ナイフ形石器）を得、この付近の赤土の中には旧石器の存在することを知つたのである。その後付近から表面採集でかなりのナイフ形石器が得られた。

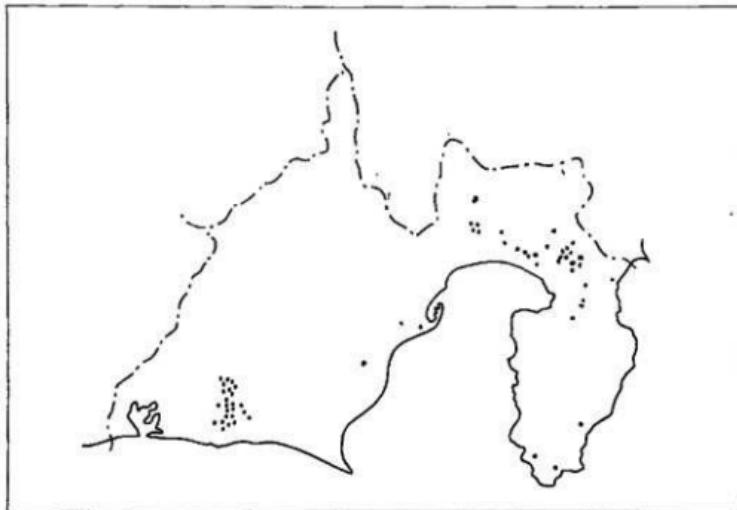
昭和三十六年と三十七年には筆者並びに篠津海祥氏により、沼津市休場遺跡の小発掘が実施され、その結果マイクロブレイド（細石刃）やマイクロコア（細石核）など細石器類が多く得られ、当地方の旧石器文化後葉の最も有望な遺跡として、近い将来に徹底的調査を期することになった。一方沼津には、沼津商業高校——明治大学のコースを歩み、先土器文化を追究した瀬川裕市郎氏が家業のかたわら活動され、同氏や中野国雄氏の協力で明大考古学研究室の戸沢充則氏が、三十八年六月、沼津市柳沢のイラウネ遺跡を発掘された。そしてナイフ形石器を主とし、これに小型で片面加工の特殊な尖頭器や、スクレーパー（搔器）などを伴う有力な遺跡であることを確認している（注1）。

この三十八年には静岡県教育委員会より、「静岡県の古代文化」なる概説書が発行され、その中で静岡大学の市原寿文氏が無土器文化の項を執筆されている。静岡県の先土器文化について一応まとめて解説されたのはこれが始めてである。また同書の末尾には前年に県教育委員会から刊行された「静岡県遺跡地名表の補遺が載つており、これによるところの年までに知見に上った静岡県下の先土器時代遺跡は四七ヶ所に達している。次いで翌三十九年には筆者の「駿河湾地方の先史文化」（伊豆考古第2号及び静岡県警本部機関誌「芙蓉」）なる小稿が発表され、当地方の先土器文化について実測図と共に概説した。また沼津女子高校による第二回考古学講座でも、筆者は「郷土の先史文化」と題して、先土器文化を中心講演した。この頃は専ら芹沢長介氏（現東北大教授）の分類に従い、礫器・石刀・尖頭器・細石器の四段階に準據して解説を試みた次第である。

そして、この年の九月下旬から、十月上旬にかけて、十二日間、明治大学の杉原莊介教授と、筆者らによる休場遺跡の共

同発掘が行われ、大塚初重・篠津海祥・白石竹雄の諸氏らも参加した。その結果は四十年春の協会総会において報告され、また「考古学集刊」第三卷第二号に公表された。細石器を主体に、若干のナイフ形石器や尖頭器を含み、石材や石屑などを含めると四千点以上の遺物が愛鷹ロームの中より出土し、劃期的な成果であった。また石突いの炉址を二つ発見し、その中から得られた木炭によるC14測定では、一四三〇〇プラスマイナス七〇〇という年代数値が得られ、今から凡そ一万四千年前の遺跡ということになった。これによつて細石器の段階でも休場の場合最も古いあたりに位置づけされることが分かり、日本の旧石器文化編年上の一つの基準として、重要な地位を占めるに至つた。

四十一年には磐田市大蘇池端前の報告が、麻生優・小田静夫両氏により人類学雑誌になされ、四十二年には篠津海祥・佐藤民雄両氏と筆者により裾野市金沢の上川遺跡が発掘されたが、その際握斧（ハンドアックス）に似た石器を始め、ブレイド・ポイント・フレークなどを赤土の中から発見した。また熱海市誌上巻に同市内の先土器資料を紹介



第1図 静岡県内先土器時代遺跡分布図

した。そして、四十三年、沼津市日黒身遺跡発掘の際にも、水田に近い低台地末端部のローム層より、ナイフ形石器一ヶを出土した。(注2)

この間地元の各高校郷土研究部による踏査や報告も相次ぎ、県東部高校郷土研究連盟の機関誌「東静郷土研究」だけをみても、四十年に沼津商業高校が「沼津地方における旧石器文化」、四十一年に同校が「箱根山地における五輪C遺跡」、四十二年に韮山高校が「韮山における先土器遺跡の調査」、さらに四十三年には沼津商業高校が「丹那に於ける先土器」と毎号掲載されている。これらはいずれも先土器時代の新資料を実測図付きで紹介しており、高校生の発表とはいえ、なかなか貴重な文献である。

こうした先土器アームの中で育った秋本真澄氏が四十三年、立正大学在学中に個人出版した「伊豆後期旧石器文化図録」は、伊豆半島における先土器時代石器出土地四十七ヶ所、集成石器二九六点という割期的なもので、当地方の先土器文化研究の基礎的資料の一つとなっている。同じ年浜松市の向坂鋼二氏は「浜松市史」において、同市の吉野町遺跡他、周辺遺跡の出土石器を紹介された。また四十四年には中野国雄氏が「富士市史」上巻の中で、当地方の先土器文化についてかなりのスペースをとり、その中にイラウネ遺跡出土石器の写真を紹介された他、富士・愛鷹周辺の幾つかの新遺跡を紹介されている。さらに四十五年には藤枝市天ヶ谷より磯部武男君により数点の石器が採集され、すでに知られていた日本平と共に、静岡県中部にも旧石器文化の存在することが確認された。そして四十六年の夏、富士宮市上条の千居遺跡において、ローム中よりナイフ形石器が発見され、さらに近隣の富士郡芝川町において、本書に紹介する小塙遺跡が発掘されて、富士山西麓における旧石器文化の一端が解明されるに至ったわけである。

この小塙遺跡は、芝川町西山の兵駿上にあり、昭和三十三年筆者が地元の研究家岡田芳龍師の御案内を導て、この地を訪れた際、縄文早・前期の土器片と共に、先土器時代のものとみられるスクレーパーやフレイクを発見したことから注目し、

間もなく佐藤民雄氏や中野国雄氏と共に再踏査した。その後地元の若い研究者で筆者の門を叩いた唐紙一修氏と、さらに続いで加わった佐野文孝氏らとここを訪れたこともあり、また両名を中心にしてこの遺跡の資料も積極的に集められた。その内容は両氏により既に「駿豆考古」第九号に報告された通りである。

今回本遺跡の一部を農免道路が貫通することになり、その路線内の応急調査が実施されたわけであるが、当初の予想に反して大きな成果を収め得たことは誠に喜ばしい。すなわち路線が決まってみると、従来遺物が多く採集された地域を外れており、殆んど表面採集できないところを通っているため、出土品に対する期待はきわめて非観的であった。ところがいざ発掘してみると、縄文早・前期の資料も得られたが、それにも増して旧石器が多く発見され、齊藤團長以下調査団は暑さも、苦しさも忘れて夢中に発掘を続けたのであった。

小塚から出土した旧石器は、ナイフ形石器を主体にして各種のものが比較的多く発見されており、県下における休場・イラウネ・池端前などの諸遺跡と共に貴重な資料を提供した。科学的な年代測定こそしなかつたが、他遺跡との対比から、少くとも今から一万五千年以上前のものであることは推察される。

今ここに多忙の中を辛うじて本書をまとめたのであるが、これが静岡県における「あけぼの期」の資料として役立つと共に、日本の考古学界に少しでも益するところがあれば望外の幸いである。（小野真一）

（注）

1 戸沢充則「静岡県沼津市伊良字根遺跡」日本考古学年報⑩、昭和43年。

2 摂野市の上川遺跡に関しては篠津海祥・小野真一・佐藤民雄「駿東郡裾野町上川遺跡発掘調査概報」東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書（昭和43年刊）がある。また沼津市日黒身遺跡については小野真一「日黒身」（昭和45年）を参照されたい。

第二章 地理的環境

この遺跡は、静岡県富士郡芝川町西山字小塚にあり、小塚とは発掘調査した付近に古くから小さい塚があつたためで、古くは古塚と記していた。身延線芝川（しばかわ）駅を下車し芝宮橋を渡つて東に芝川をながめ、県道、芝川一上井出線を北方へ凡そ一・五キロメートル入つた後、東に〇・五キロメートル登つた標高二〇〇メートル前後の台地で、羽鶴兵陵地のほぼ中央部に位置している。周囲は野菜畠と雜木林に覆われ、北方には前方後円墳に似た森山が美しい姿で小高くそびえている。羽鶴丘陵は三つの川に囲まれその強い影響を受けている。東は安居山断層崖として潤井川の谷および星山丘陵に向かつて約三〇度の急傾斜になつていて、反対に西側へは一〇度内外の緩傾斜をもつて芝川の谷、西山河岸段丘へ下つていて。南へは富士川を越して松野方面へ延びているが、富士川の強い作用によつて切斷されている。一方北は細長く伸びて、富士宮市上野の上条付近で新富士の溶岩流の下で埋没してしまい、それ以北は、島状となつて点々と表われている。

羽鶴丘陵は広がりとしては決して大きなものではないが、地形や地質の構成はかなり複雑である。南部は洪積前期の富士火山系の岩石（火山群噴出物）からなる岩渕集塊岩層で北部にいくにしたがい基盤は別所砾層となり、その上に古富士集塊質泥流がのつたため、泥岩や砂岩などもみられる。古富士集塊質泥流が噴出後、断層運動がおこり、安居山断層と羽鶴丘陵東縁を切断し、新層崖を生み安居山谷をさらに深いものにした。

本遺跡は、羽鶴丘陵の頂上より西側に面し、芝川に向つてゆるやかな傾斜をみせている。その傾斜にそつて大沢と水口沢という二つの沢が流れ遺跡を二分している。そのため遺跡もAとBに分けていた。前述したように小塚は海拔二〇〇メートル前後であるが、若干B遺跡の方が高い。しかし表面採集等の遺物からするとほとんど時期的な相違はないようである。



第2図 小塚遺跡の位置と芝川町の遺跡分布

(14が小塚遺跡、他は第6章参照)

小塚遺跡の広さは凡そ、東西五〇メートル、南北に二〇〇メートル位で、面積にすると一萬平方メートルにも及ぶ。しかし、今回の調査は、農免道路建設の路線内だけに限られ小塚A地区中央部のほんの一部分を発掘したにすぎない。

ではかかる場所に先住民がなぜ住みついたであろうか。まず丘陵地で近くに大きな川があつたことも大きな理由の一つであろう。芝川は古くは芝瀬川と呼ばれていたように流れのゆるやかな川であった。そのため今より上部を流れ、富士川との交わりは浅瀬で魚の好適な棲息地であつたと想像される。また芝川は雪どけ水で冷水、富士川は川の流域が長く暖水でありその合体は今なお魚が群をなす豊漁地となつてゐる。また遺跡をとりまくように山並があり、その代表的な羽鶴山系は昔から水系にめぐまれていて、山頂には沼が数多くあつた。しかし、今は瀬が谷になり、沢が峡谷をなすとともに、沼の水はなくなり原野と変化した。川・沼・地下水・山等にめぐまれた当所は、古くから山の幸・川の幸が豊富で自然環境の上から歴史時代住民の生活には適していた。また北東には、火の元といわれ、恐れられた富士山をながめることができ、神としてあがめるのにも立地条件がよかつた。

遺跡の東に稗久保峠があり、そこが一つの展望台となる。東は眼下に、富士川と富士宮、富士と続く広大な平野が見おろされ、遠く愛鷹、箱根連山と駿河湾、伊豆の山並がかすみ、西には芝川をはさみ、河岸段丘が広がり、西山、大久保盆地を望むことができる。

この地方は今、芝川町の農業の中心地で、町の米倉といわれてゐる。またその西には、長貫山を中心に大久保山、寺山などが連山をなしている。河岸段丘といわれているところには、原・踊り場・久保・下条・向ヶ谷戸・大明神・若宮・坊ヶ谷戸・坂本・平野・南原・砂原等の縄文時代の遺跡が点在してて、この地が縄文時代人の盛んな活動の場であつたことを推測することができる。時代の進展とともに、人々の住居はよりよい条件の地へ移つていった。つまり今日の芝川流域の平地へ住みつくようになったのである。山に囲まれた自然の利用、活用がこの地方の集落を生み、また後に清氏・大内氏などの

豪族を生み、西山城、西山本門寺などの史跡を残したのである。

このような自然的条件のなかで小塚遺跡は発生し、わが芝川町の歴史の上に大きな足跡を残してくれた。

潤井川は昔古家川といわれ、富士山西南山麓に位置し、大沢を始めとして多くの放射谷から成っている。平常は水が少ないが、多量の降雨の際は一度に土砂を運搬・堆積して両岸に沖積地を作っている。

芝川は昔芝瀬川又は真柴川といわれ猪之頭の湧水と上井出白糸滝の二流を源として富士山麓でも一・二位の豊富な水量を誇り、きれいな水であり、かつては「芝川のり」と呼ばれる川のりも産出したが、ひとたび降雨が激しくなると度々洪水となつて下流を荒らし、川底には有名なボット・ホールをたくさん作っている。

富士川は日本三急流の一つとして知られ、源は駒ヶ岳・白根山・甲武信ヶ岳などで、釜無川・早川・笛吹川を合流せている。降雨量が激しいと川ははんらんし、船は昇れず難破して人々には難川であった。

(佐野文孝)



第3図 遺跡付近の景観

第三章 調査の経過

発掘調査の行なわれた本遺跡は、昭和三十三年に地元の岡田芳龍氏の案内によつて、本調査の主任調査員に当つた小野真一氏によつて確認されたのが最初である。その翌年には、前記の小野氏の他、佐藤民雄・中野国雄の各氏が踏査し、やがて静岡県埋蔵文化財台帳に先土器及び繩文早・前期各時期にまたがる遺跡として、登録されたのである。

その後、この遺跡については、駿豆考古学会の機関誌に発表された（注1）が、その発表と前後して、昭和四十五年五月二十九日に芝川町西山から富士宮市安居山に通する「農免道路西山・碑久保線」が町議会の全員一致をもつて決定された。この道路計画線上に西山小塚A遺跡の一部が含まれていたのである。

このことを知つた筆者（唐紙）は、静岡県文化財調査員をしていたので、すぐ県へ報告すると共に、町の文化財専門委員として、町教育委員会と話合いを行なつた。そこで同委員会が開催され、地域開発のため、農免道路の建設はやむをえないが、建設に掛る前に、小塚遺跡の発掘調査を実施すべきであるとの、教育委員会としての要望を出し、県農地部及び町建設課に申入れた。

しかし同年十一月二十四日には、いよいよ芝川町西山の下条地先より、小塚遺跡地点までを第一期工事として道路の建設が着工された。その頃より県教育委員会も調査の話合いに入つたが、結局結論を得ぬまま年を越してしまつた。四十六年四月頃に至り、再び遺跡部分を含めた第二期工事の着工を目前にしてようやく積極的な検討に入り、各関係機関が集つて數度の会合を重ねた結果、事前発掘を行うことに決定を見た。

そこで町教育委員会では、この結論のもとに、早速発掘に必要な書類の提出をすると共に、発掘調査の実行機関として小

塚遺跡発掘調査團を編成した。そしてその調査團の都合により八月九日より、発掘に取り掛ることになったのである。

以下発掘日誌によつて、その経過をたどつてみよう。

八月九日（快晴）

この日は、発掘調査に先だち、調査全区域の設定を、教委の篠原・深沢、調査團の唐紙・西島ら七人が参加して行つた。幸い初日より快晴に恵まれ、調査の成功を祝うかのようだつた。

八月十一日（快晴）

一日おいてこの日から本格的な調査に入り、小野調査主任の指導で、大学生の岡島・杉山・松尾らが測量を行い、調査区域のグリッドを設定した。グリッド記号は、北側をA列とし、南側をB列として、西側から東へ向つて1・2・3……の記号を付した。西側の斜面は、かなり急で遺物の出土が期待出来ないが一応確認のため二つのトレンチを入れ、唐紙と佐野文孝らの担当で芝川中学生・袖野中学生ら発掘を進めた。しかし結局一片の出土もなかつた。なお上部平坦面のグリッドは大学生らにより、一部の表土を剥いだ。この日町会議員村野文男氏らの見学があつた。

八月十二日（晴）

前日に続き中・高生で各グリッドの表土剥ぎを行つ。平坦面での表土は薄く、また西側の斜面は遺物の期待が前日同様出来ないようだ。しかし唐紙と佐野らは前日に統いて西側の斜面を追求した。結局遺物の出土がなかつた。

八月十三日（晴のち曇）

前日に統いてグリッド部の表土剥ぎを進めた。台地状をなしている頂部平坦面ではロームまでの厚さが一五~二〇センチと薄く、そのため耕作による攪乱がいたる所で見られ、ローム層中に深く鍬の入つた所が三ヶ所あつた。しかしこの攪乱層の一つを掘り進めた所、ナイフ形石器やマイクロブレードなど、旧石器の出土をみた。またその他に多數のフレイクが出土

した。その反面、縄文時代の遺物は少量だった。

この日、佐野町長・望月助役・佐野収入役・野村教育長等町幹部や岡本内房小学校教頭らの見学があった。

八月十六日（晴のち曇）

この日は、前日のグリッド区域の表土剥ぎを続行すると共に、念のため西側にトレーンチを伸ばしてみた。しかしこの部分からもなにも出土しなかった。頂部のグリッド区域はこの日で東側の一部を残して表土剥ぎを終った。そこで全般的な層位を検討してみると、結局ローム層は中央が高く東西両側へ行くにしたがつて斜面が急になるが、特に西側の落ち込みが大きいことが分かつた。又表土層が予想以上に浅く、そのためいたる所でローム層の擾乱が見られた。遺物の出土状況は、土器片が意外に少なく、そのすべてが小さな破片であった。

この日、大石原千居遺跡の調査に来ていた慶應大学教授の江坂輝弥氏の見学があった。

八月十七日（曇）

未発掘の東側のB-16・B-17のグリッドに、地元の中・高校生が入り、ローム層まで掘り下げる続行する。この辺りはローム層が深くなり、13区辺りから層位も六層に区分出来た。前日手をつけられなかつたA-3区のピットも搅乱されていた。他のグリッドでは、土器片フレイクなどを出土したものもある。A-4区の七



第4図 発掘風景

八月十八日（曇）

B-3区のピットを掘り下がったが、結局木の根による攪乱と判明した。午後より秋本氏が加わり、A-9区でローム層を掘り下がた所、ナイフブレードの出土があった。他のグリッドは早くもローム層上まで大方達したので一部でグリッド壁の清掃などを始めた。

八月十九日（曇時々雨）

発掘中にこの調査で始めての小雨が時折降った。浅い表土と、真夏にしては比較的涼しい日が続いたため、作業は予想以上に進行した。

この日は、中・高校生により東側のB-15・B-16・B-17区を中心に発掘を進め、また昨日ナイフブレードの出土があつたA-9区のローム層を掘りさげた。その結果後者の東側半分では何ら遺物の出土がなく、西半分から頁岩製のナイフブレードが一点出土した。

本日は御殿場市文化財審議委員会の一行八名と小林柚野中学校長・勝亦北山中学校長などの見学があつた。

八月二十日（曇時々晴）

朝から雨がぱらついたが、晴間を見て作業を続行した。この日は発掘部分の中心と見られるA-8・A-9・B-8各区のローム層の発掘に取りかかった。しかし多量のチッピングツール以外、これという出土品は見られなかつた。午後から晴間を見てレベルを入れた。また東側の火山灰層下より、多量の小さな土器片が出土したが、時期が逆になつたものがあり、頂部からの流れ込みと見られた。

望月助役、佐野建設課長らの見学があつた。

八月二十一日（晴）

A-8・B-8・B-9各区のローム層中を精査した。遺物は引続きチップが多い。また東側の端のグリッドは深くまだロー

ム層までの到達が見られなく、この日も掘り下げを続けた。

八月二十二日（晴）

この日も前日の作業の続きを行う。午後B-8区東側で、黒曜石製のスクレイバーが一点出土した。

八月二十三日（曇）

A-17・A-18・B-7・B-18各区でローム層直上までの掘り下げが行われた。A・B共、8・9・10をローム層中一二〇センチまで掘り下げる。B-9区ではローム層上部で黒曜石製の破片・剝片が多くたが、下部では頁岩製のものが出土した。

B-10区では、頁岩製の尖頭器の欠けたものと、石刃が出土した。また西側地区のローム層の掘り下げ、及び中心部のセクションの実測を行った。

駿豆考古学会の尾形礼正・杉山満兩氏の見学があつた。

八月二十四日（曇時々雨）

昨日に引き続き、A・B共B-16・17・18各区のセクションをとるため清掃をした。

またA・B共8-10各区を精査した。またB-9・B-10両区は遺物の分布が南側へ伸びていると思われたため、約五十センチ程拡張し発掘した。さらにA-10・B-10の両区は、セクションを採った後、境界の土手をはずした。この日の遺物は、頁岩製の石核・同ナイフ形石器の他、多数の石片が出土した。

この発掘は、町として始めてのため町の内外で反響を呼び、この日は芝川町婦人会の有志三十八名、大石原千居遺跡発掘調査団の十名など多くの見学があつた。

八月二十五日（晴）



第5図 婦人会幹部の見学

本日で一応調査を終了する予定のため、Bグリッドの東壁及び北壁の清掃と、Aグリッドの東壁の清掃及びセクションの実測をする。B-9・B-10両区を精査した。またこの日は全域の測量も行った。出土遺物は頁岩製の石刃（ブレイド）・石核（？）等であった。

八月二十六日（晴）

前日で一応調査を終了する予定であったが、不充分な点や、若干の拡張調査を必要としたため、調査員を縮少して継続発掘を行うこととした。まず前日実測の未だたった区域のセクションをとった。さらにB-9・B-10両区の東側はまだ旧石器の包蔵地域と推定されたため、地主の好意により、この区域を二メートル程拡張した。また前日出土した石皿の写真を撮つた。

この日は、静岡新聞の島田記者・芝富小学校の教員四名・町農業委員二名等の見学があつた。

八月二十七日（晴）

この日は、セクション未了部を完了し、拡張した部分の精査を行い、A-9区とB-9区との間のベルトを取りはずした。

出土品は拡張区で頁岩製の石核・石片が多く、ベルトの部分では、黒耀石製のスクレイバー・ナイフ形石器がみられた。測量は本日を以て全部終了し、全景写真の撮影も行われた。こうして現地作業は器材の撤収を残してすべて終了した。

この日は、静岡新聞に大々的に紹介された為、作業終了の日にもかかわらず多くの見学者があつた。

八月二十八日（晴）

この日は秋本氏と大学生が宿舎で出土遺物の整理に当り、水洗・固包して沼津考古学研究所へ運ぶための荷造りを行つた。

八月二十九日（晴）

教育委員会で、使用器材の撤収を行つた。今回の発掘調査では天候のため作業の中止ということがなく、全く恵まれた調

査であった。また発掘遺物は、一時的に大石寺に運び、そこで千居遺跡の出土品と一緒にして沼津考古学研究所へ運ばれることになった。

九月一日（晩）

芝川町で始めての発掘であり、埋蔵文化財の保護のためにもと、この日午後より発掘報告会を町役場議場で行なった。出席者は、関係者側から県農地部清水土地改良事務所・町側から町長・助役・議長・収入役・文教委員・建設課長など、教委側から教育長・事務局長・教育委員・社会教育委員・文化財専門委員・町内小中学校長・社会科主任などと袖野中郷土研究部生徒ら希望者を含めて五十四名だった。事務局と調査員三名（小野・唐紙・秋本）で、遺跡の概要から経過・成果まで説明し、出席者より活発な質問が出て意義ある会を開いた。

（唐紙一修）

（注）

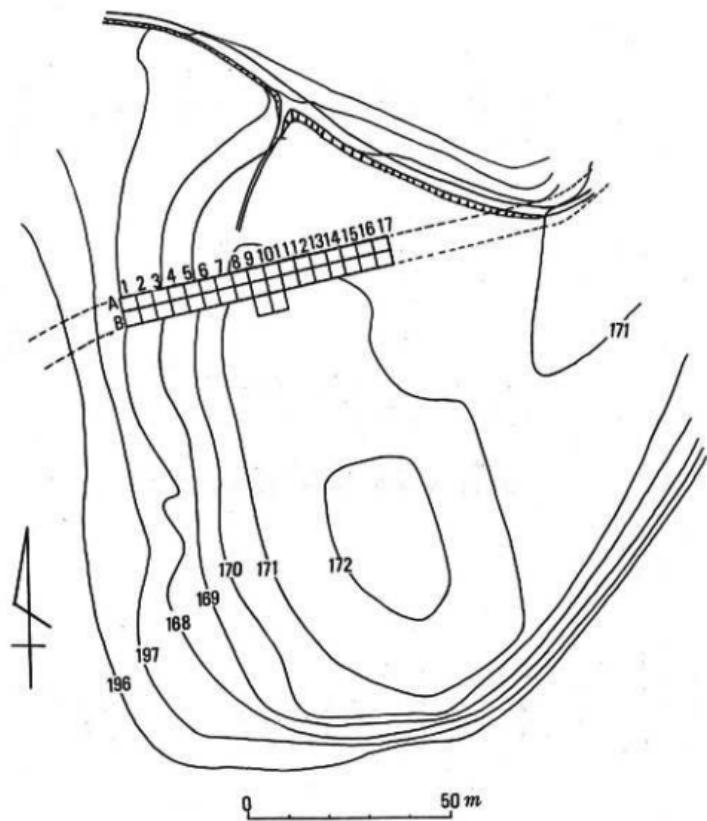
1. 唐紙一修・佐野文季「富士郡芝川町の遺跡」駿豆考古第九号。昭和45年。

第四章 遺跡の内容

本遺跡は第二章に記述してあるように、羽鮈丘陵上に位置し、その起伏によつて、A～Dの四ヶ所に区分されていた。今回調査されたのは、その最も西側のA地点である。

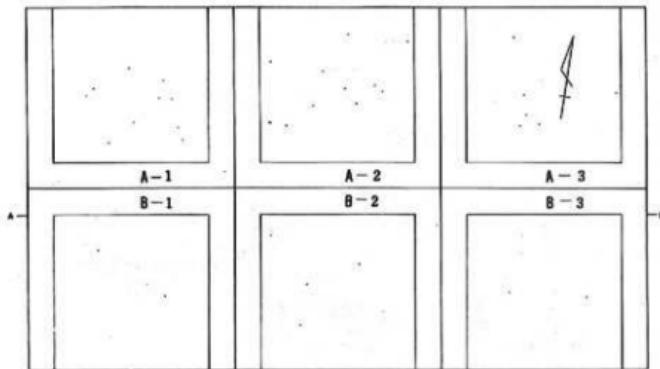
西へ緩傾斜する丘陵の中段の平坦部分、つまり小塚A遺跡を、ほぼ東西に幅七メートルの農免道路が建設されることになつたため、平坦部分とその西斜面の路線敷に第6図のように四メートル×三・五メートルの小グリットを南北に二列(北よりA・B)、東西に一七列(西より1・2～17)設定した。現地表はA・B列の8～10グリットが最も高く、東へ向つてゆるやかに傾斜をし、西側へは比較的傾斜が強かつた。調査地域で最も地形の凹んだ部分と思われた東端のA-17及びB-17グリットにおいて、土層は六層に分けられた。第一層はスコリアを比較的多量に含む黒褐色耕作土層で、第二層は少量のスコリアを含む黒色土層であり、第三層は褐色火山灰砂層で、乾燥すると白味を帯びて薄茶色に変色をする。第四層は少量のスコリアを含み、比較的粘質のある黒色土層。第五層は暗褐色土層で、第一層に比較すると若干黄色味を帯び、第四層よりも粘質が強い土層である。また第六層は黄褐色ローム層であった。

これら六層に分けられた各土層を各グリットごとにみていくと、第一層の黒色耕作土層は各グリットに認められ、中央付近のグリットでは浅く、東西へゆくほど次第に厚く堆積している。第二層～第四層は中央付近及び西斜面には認められず、第二層の黒色土層は14グリットより、第三層の褐色火山灰砂層は14グリットの中程より、第四層の黒色土層は13グリットより認められ、東進するほど次第に厚く堆積している。第五層の暗褐色土層は西斜面の1・2グリットと、13～17グリットで認められ、東西両端にゆくほど次第に厚く堆積している。第六層のローム層上面は中央付近のグリットが最も高く東西に急

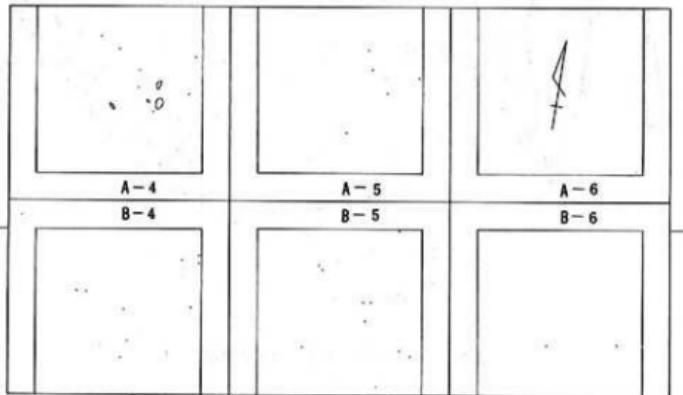


第6図 小塙遺跡付近の地形と調査地域

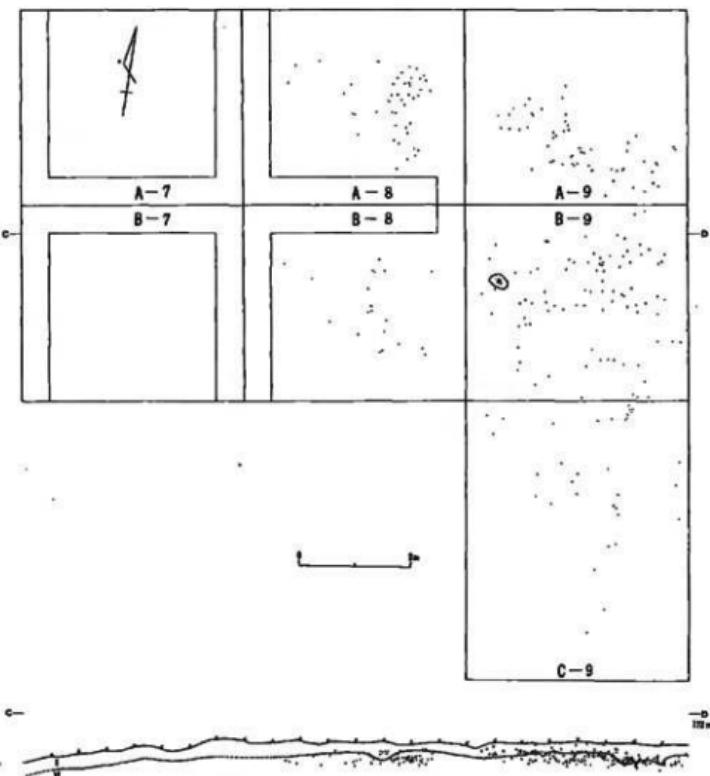
傾斜をなしている。遺物包含層は、第四層、第五層が繩文時代の早・前期の遺物包含層で、中央付近から西斜面にかけて比較的繩文早期の土器片を多く出土し、東側は繩文前期の土器片を多く出土した。第六層は先土器時代の遺物包含層で、8~10グリットにおいて、石器や石片等の遺物を多く出土した。遺構としては何



第7図 A・B 1～3 グリッド遺物分布図

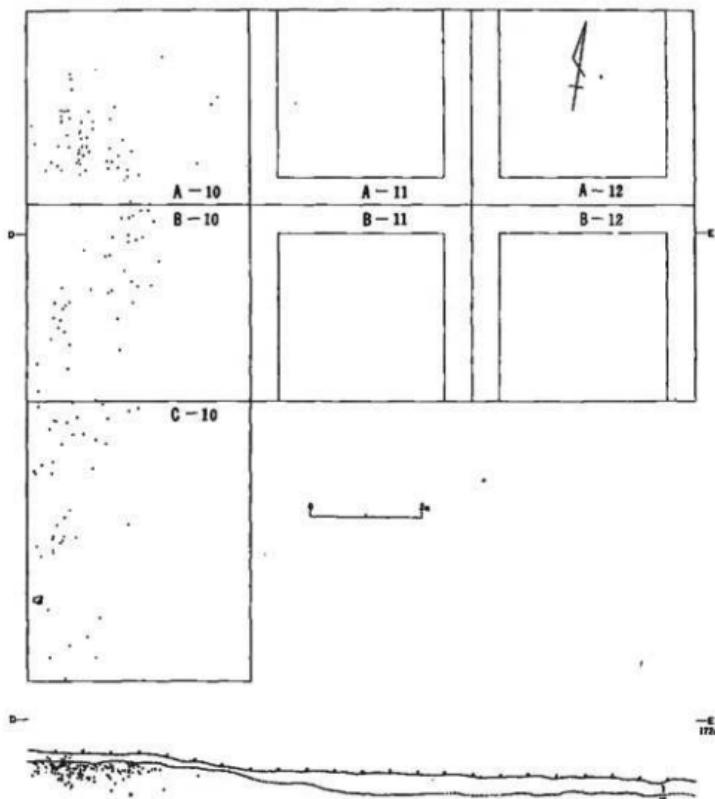


第8図 A・B 4～6 遺物分布図



第9図 A・B 7～9 グリッド遺物分布図

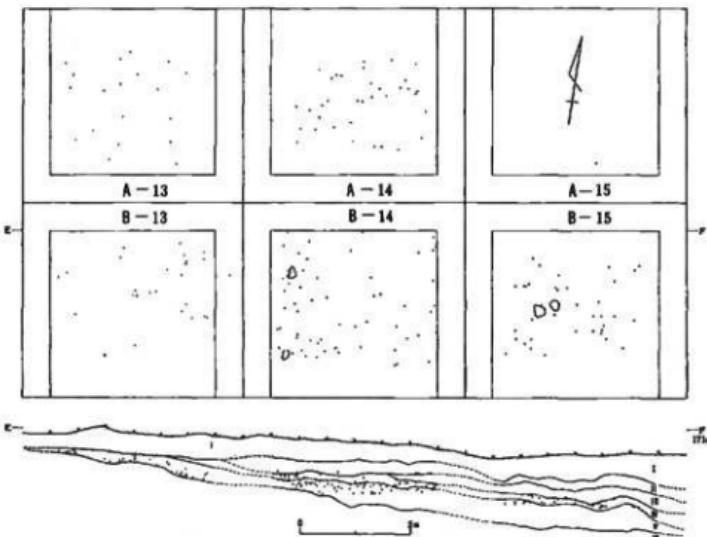
も認められず、縄文時代のものは耕作などにより破壊されたか、あるいは過去に流出してしまったものと思われる。また両側の小高い平担部に主体があり、その主体からはずれているために再堆積した遺物が出土したに過ぎないとも思われ、今後おける南部の調査が一応期待される。因みにこの南側の小高い平担部は、現在柿の木のある付近を中心にはかなり広範な地域にわたって遺物を散布し、従来多くの研究者や地元民により多数の遺物が採集されている。それらは殆んど縄文早期並びに前期の土器片で、主要なものは駿豆考古第九号に紹介されている。



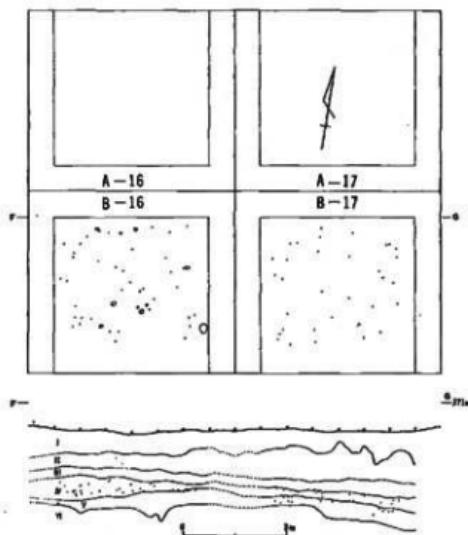
第10図 A・B 10~12グリッド遺物分布図

すなわち早期の楕円押型土器や鶴ヶ島台式、諸磯A式、諸磯B式などで、今回発掘されたものと内容がほぼ一致している。したがつておそらくこの地域に各時期の住居址が存在するのであろう。

また從来旧石器の剥片らしきものもこの地域で発見され、それがこの地域の旧石器文化存在を推定する鍵ともなつたので、先土器時代の遺物もおそらく包蔵されているであろう。しかし今回の発掘地域においても先土器時代の礫群などの痕跡は認められず、この時代の遺構の発見は難かしい。（秋本真選）



第11図 A・B13~15グリッド遺物分布図



第12図 A・B16・17グリッド遺物分布図

第五章 出土遺物

第一節 先土器時代の遺物

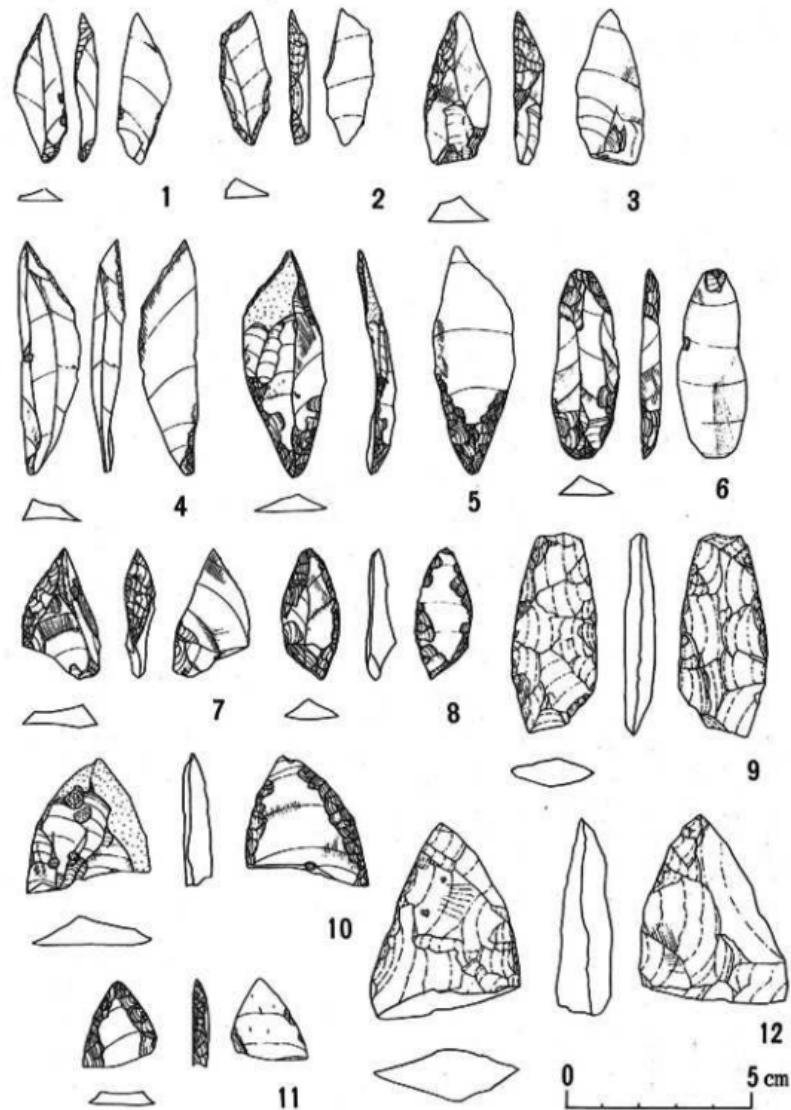
石器及び石片・碎片などの总数は三八八点で、その内訳はナイフ形石器六点・尖頭器七点・搔器二点・石刀二点・石片四二点・石核一五点・碎片三二三点であった。

A ナイフ形石器（第13図1～5・7）

1は表面に一条の稜線のある剝片の基部方向を、ナイフ形石器の基部とし、剝片の先端部付近を左斜めに刃溝し剝離によって切断して背面となし、右側の鋭利な縁辺を刃部とし、基部を尖る様に細部加工が施されている。全長四・一センチメートル、最大幅一・三センチメートル、硅質頁岩製。

2は先端部及び刃部を欠損している。表面に一条の稜線があり、打面及び打瘤は基部を尖らせるために細部加工によって除去されている。左側縁全体に刃溝し剝離による細部加工が施されている。現長三・六センチメートル、最大幅一・三センチメートル、硅質頁岩製。

3は剝片の基部方向をナイフ形石器の基部として打面・打瘤を残し、剝片の左先端部のみを斜めに刃溝し剝離による細部加工を施して背部とし、右側の鋭利な縁辺をそのまま刃部としている。全長四・一センチメートル、最大幅一・七センチメートル、硅質頁岩製。



第13図 小塚出土旧石器実測図（1）

一トル、黒耀石製。

4は二条の稜線のある剝片の基部方向を石器の基部とし、裏面（打瘤のある面）に左側縁部より細部加工を施して、打瘤・打面を除去して尖らせてある。先端部は右側縁部に細かい刃漬し剝離の細部加工を施してある。全長六・三センチメートル、最大幅一・五センチメートル、黒耀石製。

5は主要稜線一条を有する剝片の基部方向を石器の基部とし、基部を表面及び裏面に、両側縁より細部加工を施して打面・打瘤を除去して尖らせてあり、剝離の先端部にも裏面より両側縁部に細部加工を施して尖らせてある。全長六・二センチメートル、最大幅二・二センチメートル、黒耀石製。

7は横剥ぎされた剝片の打面側に刃漬し剝離による細部加工を施して背部となし、剝片の先端部は第一次加工による鋭い側縁を刃部としている。基部の一部を欠損しており、現長三・六センチメートル、最大幅二・一センチメートル、黒耀石製。

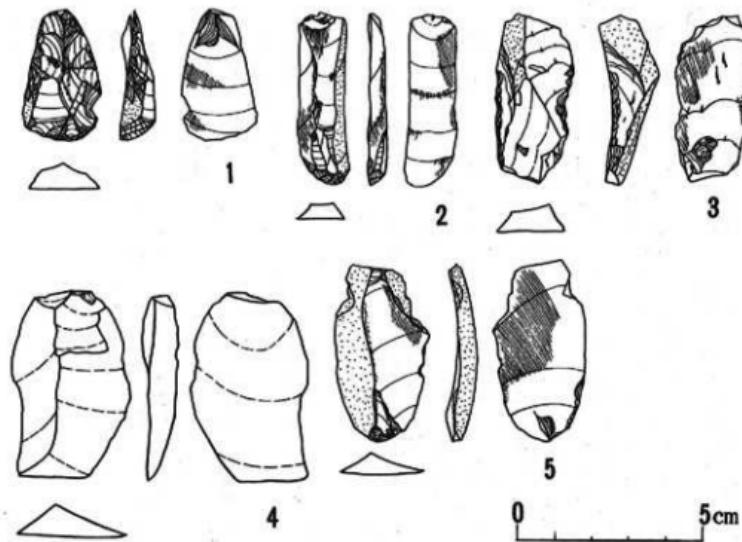
四 尖頭器（第13図6・8・12）

6は表面に二条の稜線のある剝片の基部方向を石器の先端部とし、打面・打瘤は細部加工により除去されている。石器の基部は裏面より細部加工が施されて丸味をもち、先端部も裏面より細部加工が施されて尖っているが、若干欠損している。現長五・一センチメートル、最大幅一・八センチメートル、黒耀石製。

8は表面に一条の稜線のある剝片の基部方向を石器の基部として、ほとんど両側縁部全体に、両面より浅い細部加工が施されているが、若干先端部と基部を欠損している。現長三・五センチメートル、最大幅一・六センチメートル、黒耀石製。

9は粗い比較的幅の広い剝離で両面より加工されている尖頭器で、先端部と基部を欠損している。基部近くの片側に若干抉入りが施されている。現長五・四センチメートル、最大幅二・三センチメートル、安山岩製。

10は半分ほど欠損している尖頭器で、表面の一部に自然面を残す剝片の両側縁部に、表面側より裏面へ浅い片面の細部加



第14図 小塚出土旧石器実測図（2）

工が施されている。現長三・六センチメートル、最大幅三・三センチメートル、黒耀石製。

11は下半分を欠損した木葉形の片面加工の尖頭器で、剥片の先端方向を石器の先端部とし、両側縁部に裏面より表面へ浅い剥離を施している。現長二・三センチメートル、最大幅一・九センチメートル、玉髓系の石材製。ロは両面加工の尖頭器で、木葉形をしているが半分ほど欠損している。粗い剥離が両面より施され、断面形は凸レンズ状をなす。現長五・二センチメートル、最大幅四・〇センチメートル、安山岩製。

C 搤器（第14図1・2）

1は内側する剥片の先端部に入念に細部加工が施され、周囲にもほとんど加工が施されて拇指形を呈する。全長三・五センチメートル、最大幅二・〇センチメートル、黒耀石製。
2は両側縁部が並行する綫長の剥片の先端部のみに細部加工が施された撤器で、刃部は比較的薄い。全長四・六センチメートル、最大幅一・三センチメートル、黒耀

石製。

D 刀器（第14図3・5、第15図1）

剥片に第二次加工が施されているものを刀器とした。

3は剥片の表面に一と二条の稜線があり、並行する両側縁部に細部加工が施されている。全長四・五センチメートル、粗質の黒耀石製。

5は剥片に一条の稜線があり、基部に細部加工が施されて丸味を帯びて、木葉形を呈する剥片で全長四・七センチメートル、粗質の黒耀石製。

第15図1は綫長の剥片で一と二条の稜線を有し、両側縁部は鋭く、並行しており、基部と右側縁部に細部加工が施されている。全長六・二センチメートル、硅質頁岩製。

E 剥片（第14図4、第15図2・3・6、第16図1・4）

剥片四二点のうち比較的形の整った剥片八点を図示した。

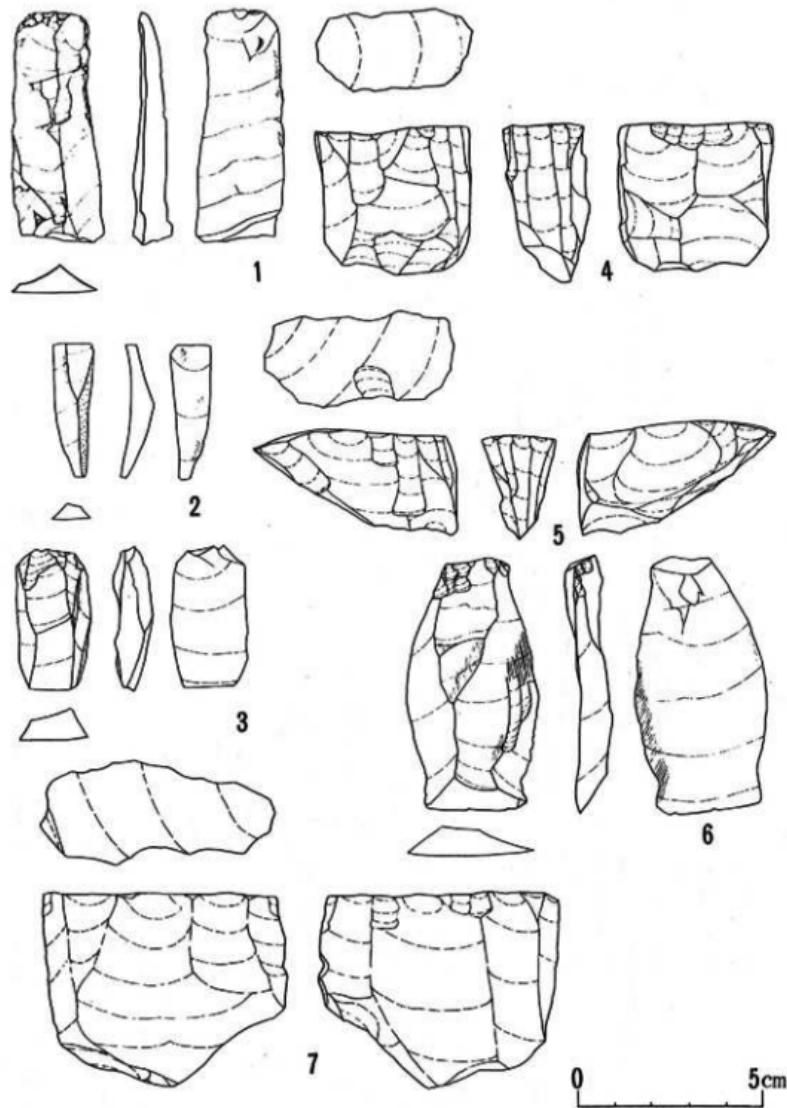
第14図4は一条の稜線のある剥片で全長五・〇センチメートル、頁岩製。

第15図2は基部を欠損しているが、先端部は尖り、鋭い側縁部を有する。表面には一と二条の稜線があり、一部には自然面を残す幅の狭い剥片である。現長三・六センチメートル、黒耀石製。

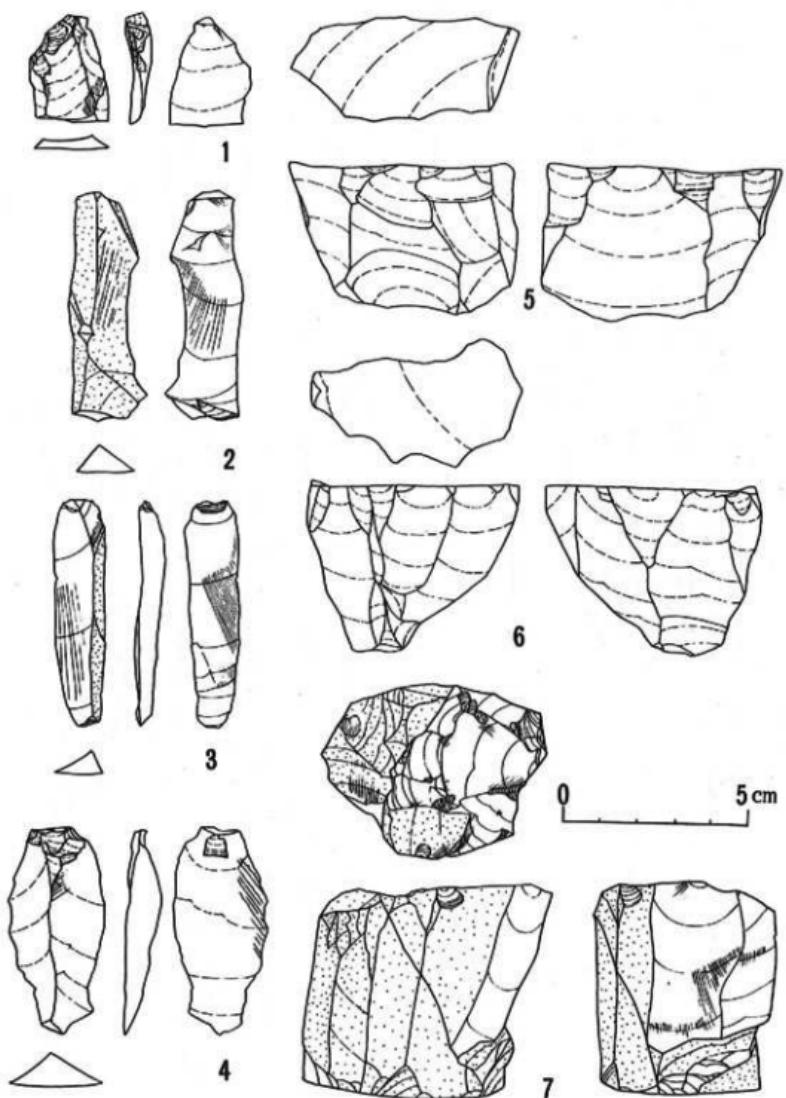
3は表面に数条の稜線があり、両側縁部が並行する剥片で、全長三・八センチメートル、硅質頁岩製。

6は鋭利な両側縁部の中央がややふくらみのある剥片で一と三条の稜線を有する。全長六・八センチメートル、硅質頁岩製。

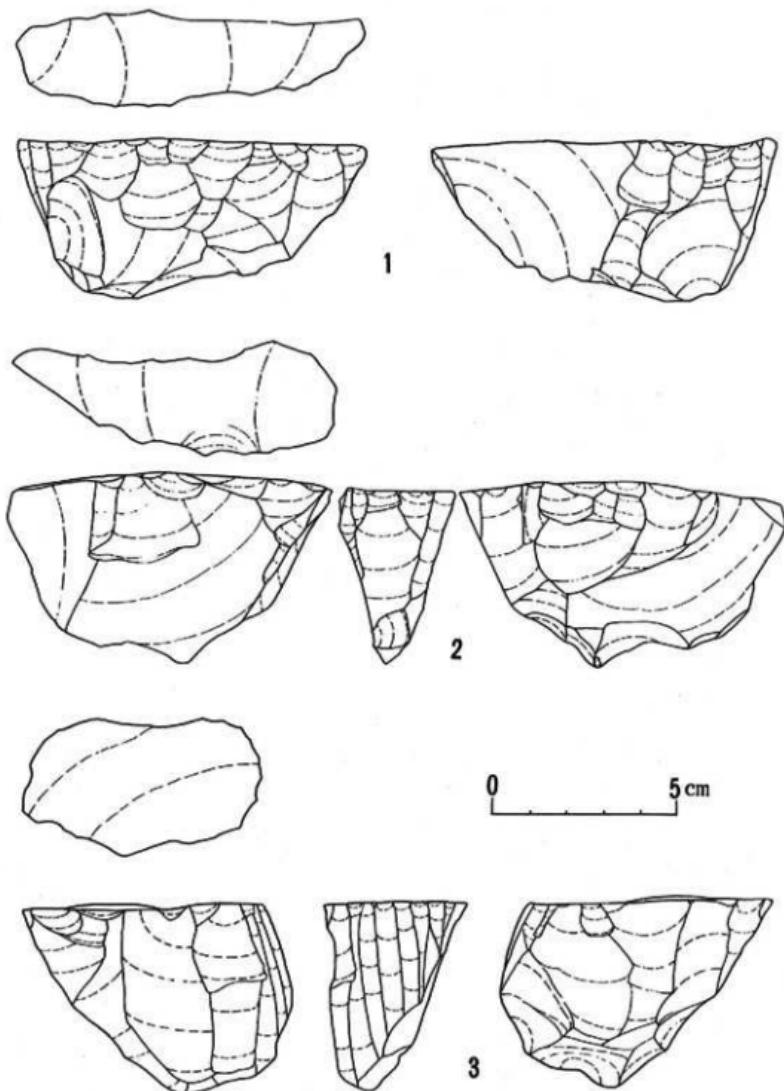
第16図1は薄くて比較的幅の広い剥片で、鋭利な両側縁部が並行し、打面・打瘤を残す。先端部は欠損しており、現長



第15図 小塚出土古石器実測図（3）



第16図 小塚出土旧石器実測図(4)



第17圖 小塚出土旧石器実測図（5）

二・八センチメートル、硅質頁岩製。

2は表面全体に自然面を残し、鋭い両側縁部がほぼ並行している。全長六・二センチメートル、黒耀石製。

3は表面の一部に自然面を残し、一と二条の稜線があり、両側縁部にはほぼ並行に鋭い縁を残し、先端は次第に尖るが、先端部と基部とを欠損している。現長六・一センチメートル、黒耀石製。

4は木葉形の剥片で一条の稜線を有し、両側縁部に鋭い縁を有する。全長五・五センチメートル、硅質頁岩製。

F、石核〔第15図4・5・7・第16図5・7、第17図1・3〕

石核は一五点出土したが、そのうち良好なものを一〇点図示した。

第15図4は、やや扁平な円筒形石核で、打面は平坦で調整されておらず、一〇条の剥離痕が認められるが特に一端には細長い三条の剥離痕が認められる。長さ四・〇センチメートル、幅四・二センチメートル、厚さ一・二センチメートル、頁岩製。

5は舟底形の石核で、打面は平坦で調整されておらず、一端に五条の細長い豎縞剥離痕が認められる。長さ二・六センチメートル、幅五・五センチメートル、厚さ一・四センチメートル、頁岩製。

第16図5は扁平な円筒形の石核で、打面は平坦で調整がされていない、比較的幅の広い剥片を剥離し、九条の剥離痕が認められる。長さ五・二センチメートル、幅六・二センチメートル、厚さ一・八センチメートル、頁岩製。

6は扁平な円錐形の石核で、打面は平坦で調整されておらず、八条の剥離痕が認められる。長さ四・四センチメートル、幅五・五センチメートル、厚さ三・九センチメートル、頁岩製。

7は二つの石核の破片が接合したもので、打面は調整されており、円筒形の石核で二条の剥離痕を有する。石材中に多くの亀裂が生じており、そのために放棄されたものと思われる。良質の黒耀石製で、長さ五・六センチメートル、幅六・二セ

ンチメートル、厚さ四・六センチメートル。

第17図1は扁平の舟底状の石核で、打面は平坦で調整されておらず、一端に細長い豊穣剥離が四条認められる。長さ四・三センチメートル、幅九・四センチメートル、厚さ二・六センチメートル、頁岩製。

2は扁平の舟底状を呈する石核で、打面は平坦で調整されておらず、あまり剥離がされなく六条ほどの剥離痕を認めることができる。長さ五・一センチメートル、幅八・八センチメートル、厚さ三・〇センチメートル、頁岩製。

3は舟底形の石核で、打面は平坦で調整されてなく、一端に八条の豊穣剥離が認められる。長さ五・〇センチメートル、幅七・四センチメートル、厚さ三・六センチメートル、頁岩製。

第二節 繩文時代の遺物

A 土器

早期 (第18図1-21)

1-8は楕円押型文の土器片で、1は口縁部、2-8は胴部の破片である。1は口縁近くまで施文され、2-4は羽状に施文されている。3-7-8は比較的大粒の楕円押型文で、富士宮市星山の奥山地(注1)出土のものほど大きくなっている。3は胎土中に多量の雲母を含み、1-2-5-6は多量に、4-7は少量の長石粒を胎土中に含む。また1-3-5-6は多量の纖維も含んでいる。色調は1-4-5は橙褐色、2-6-8は褐色、3は黄褐色、7は灰褐色をそれぞれ呈する。

9は沈線による格子目状のかなり大柄の文様が施文されている。類例は裾野市茶畠の日向遺跡(注3)・長野県上伊那郡宮

田村の中越遺跡出土土器(注4)にみられるが、これらはいずれも茅山式併行期のものであり、また沈線がやや鋭い点相異なる。おそらくそれらに先行し、押型文に伴出する田戸式系土器であろう。橙褐色を呈し、長石粒と纖維を多量に含む。

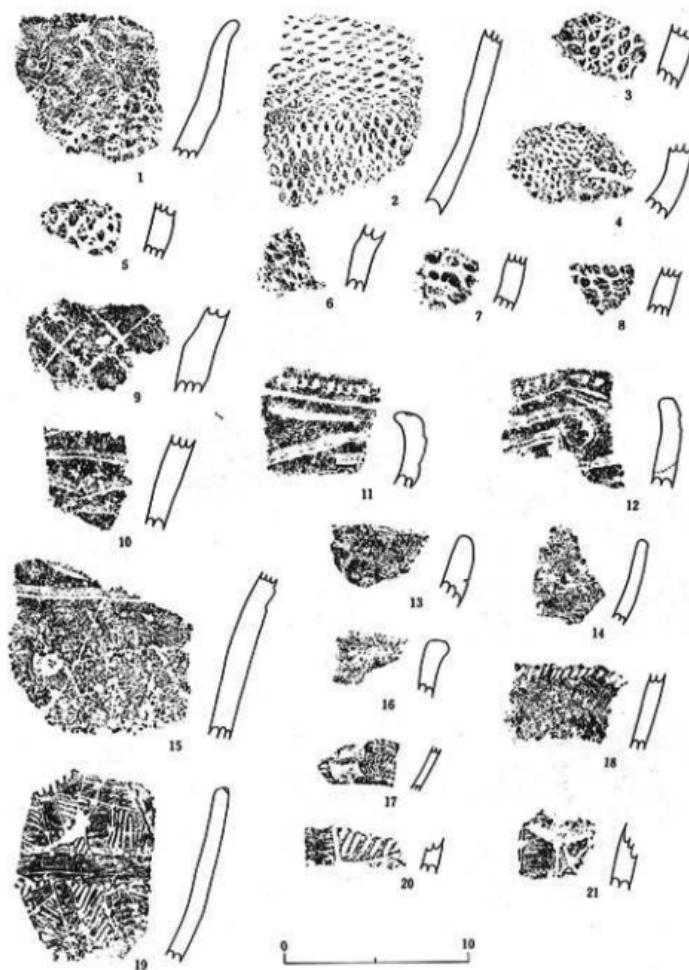
10・12・15は浅く幅の広い沈線のある土器片で、熱海市中野の藪ノ内遺跡から類例が出土しており(注5)、この場合は諸磯A式に伴出しているので前期のものである。しかし、小塙遺跡の場合は焼成・胎土等の様相が早期的であり、前期にまで下げる得るか否か問題である。ここでは一応早期の中に含めておく。胎土中には長石粒を多量と纖維を若干含み、褐色を呈する。13・14・16は無文の土器片の口縁部で13・14は黒褐色、16は褐色を呈し、13・14は長石粒を少量と纖維を含み、15は雲母を多量に含む。17・18は瓜形文の土器片で、17には三条、18には一条の爪形文がみられる。17は薄手で少量の長石粒と若干の纖維を含み灰黒色を呈する。18は少量の長石粒と多量の纖維を含み薄茶色を呈する。

19・21は早期後葉の鶴ヶ島台式の土器片で、19は一部に刻目口縁がみられ波状をなすと思われる。この類例は熱海市の七尾遺跡(注6)・御殿場市の山ノ神遺跡(注7)など、県東部各地でみられる。19は胎土中に雲母と長石粒及び纖維を多量に含み20・21は少量の長石粒と纖維を含む。色調は19は褐色を、20・21は灰褐色をそれぞれ呈する。

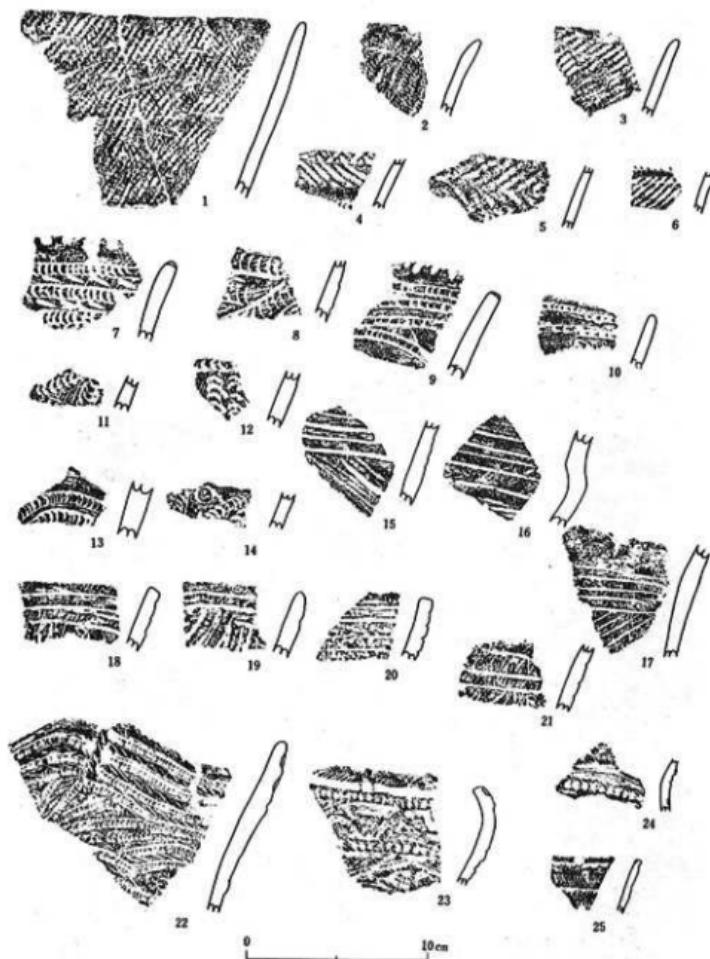
前期 (第19図1-25)

1・6は繩文を施文したもので、特に4・5は羽状に施文している。1・3は口縁部、4・6は胸部の破片で1・2・3に多量の雲母を胎土中に含み、1・5は黒褐色、2・3は褐色、4・6は灰褐色をそれぞれ呈する。

7・14は爪形文系土器で、7・10・13・14は半截竹管半截面を器面にあて押引き状に施文したため、両脇に沈線がみられ、11・12は半截竹管による爪形文を個々に並列させている。また、14には竹管による円形の押印がみられ、8には地文に繩文がみられる。なお7・9・10は口縁部の破片で、7・9には刻目を有する。7・11・12には多量の雲母を含み、9には少量の雲母を胎土中に含む。色調は、7・9・12は黒褐色、8・11は褐色、10・13・14は橙褐色をそれぞれ呈する。



第18圖 小塚出土繩文土器拓影（1）



第19図 小塚出土繩文土器拓影（2）

15・21は平行沈線のある土器片で、18・20のように纏文がみられるものもある。17は胎土中に長石粒を多量に含む。色調は15が褐色、16・19・20が黒褐色、17・18・21は橙褐色を呈する。

22・23は口辺部の破片であるが、縦縄帶の細隆起線を伴ない、諸磯B式への移行を考え得る資料である。24も同様である。

22は黒褐色、23は黄褐色、24は褐色を呈する。

25は薄手で細かい爪形文を有し、北白川下層式に似た要素をもつてゐる。いずれにしても前期のものである。全体的にみて諸磯A式の時期に比定される土器である。

B 石器

出土した石器及び採集された石器は石鎌が最も多く、石匙がこれに次ぎ、この他に凹石、石皿などがある。

石鎌 (第20図1~15)

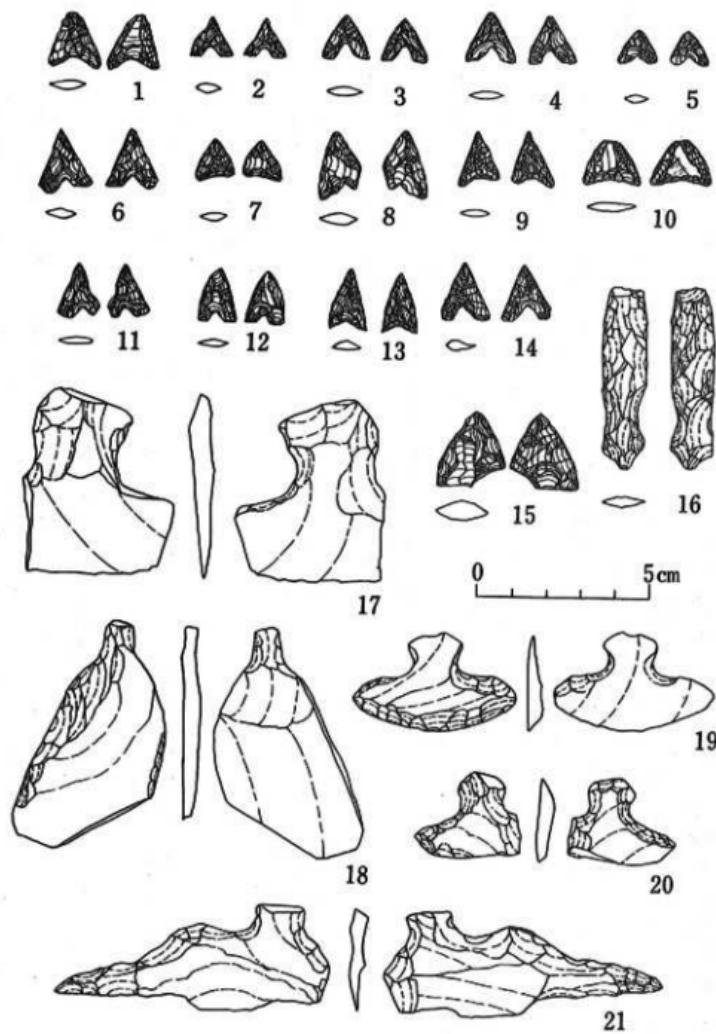
全て無柄で、15は三角形の石鎌で一部欠損している。7・10は三角形の底辺がゆるやかに内彎した石鎌で、7は完形の小形のもの。10は先端部を欠損している。1・8・9・13はさらに内彎したもので、1は先端部を、8は脚部を欠損している。2・6・11・12・13は三角形の底辺の中央部のみに抉入りが施されたような石鎌で4は両面共に磨滅されて丸味を帯びている。全て黒耀石製である。

有舌尖頭器 (第20図16)

先端部を欠損したもので、基部が舌状に尖っている。現長五・二センチメートル、珪質頁岩製である。

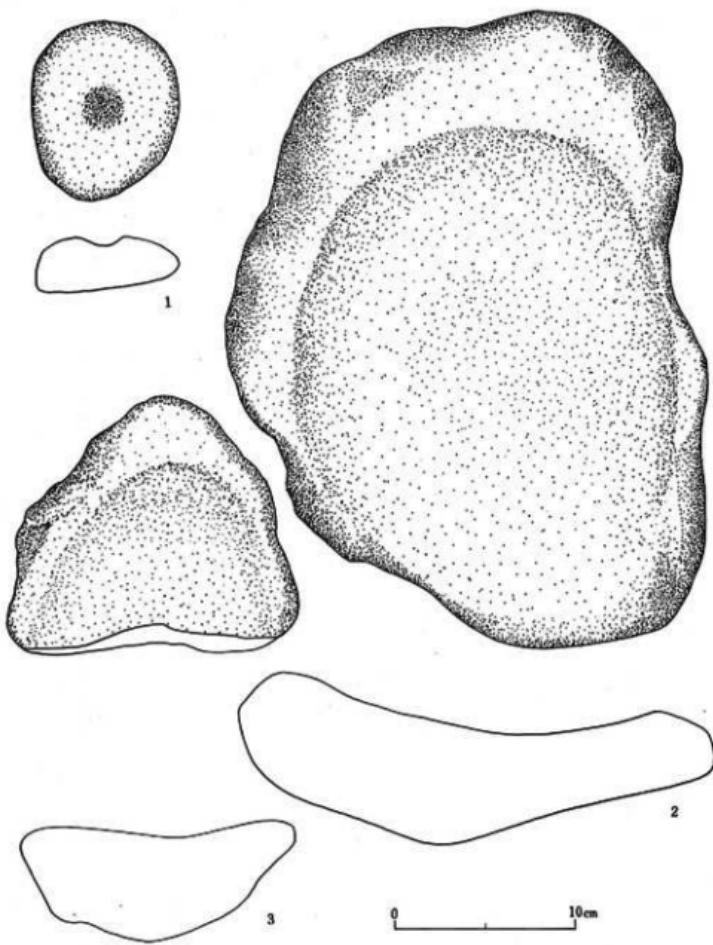
石匙 (第20図17~21)

21を除いて他は全て採集品であり、18は縱形のもので、他是横形の石匙である。21は石匙の一端を尖らせて石錐に使用したと考えられるが石匙と石錐を兼ねていたのか否かはわからない。石材は17が安山岩製で、19が珪質頁岩、18・20・21は頁岩



第20図 小塚出土縄文時代石器実測図(1)

1~15—石頭, 16—有舌尖頭器, 17~21—石匙



第21図 小塚出土縄文時代石器実測図（2）

1—磨 石， 2・3—石 盤

製である。

凹石 (第21図1)

橢円形状をしたもので片面は比較的平らで両面に凹みを一つ有する、安山岩製。

石皿 (第21図2・3)

2は完形で、片側に縁がないものである。3は小型の石皿の半分ほど欠損したもので、共に安山岩を用いている。

(秋本真澄)

(注)

1：稻垣甲子男氏の採集品中に良好な資料があり、また最近この地が創価学会の所有地となり、植樹工事の際に同様の資料を出土している。

2：島田高校郷土研究部「上長尾遺跡調査報告」大井川流域の文化 昭和31年。

3：昭和34年11月、駿豆考古学会にて裾野市公文名寺山遺跡を発掘調査した際、同時に小発掘される。資料は現在の沼津考古学研究所に保管中。

4：藤沢宗平・他「長野県上伊奈郡宮田村中越遺跡」昭和44年。

5：「熱海市史」上巻。(小野真一「戦ノ内遺跡」)。昭和42年。

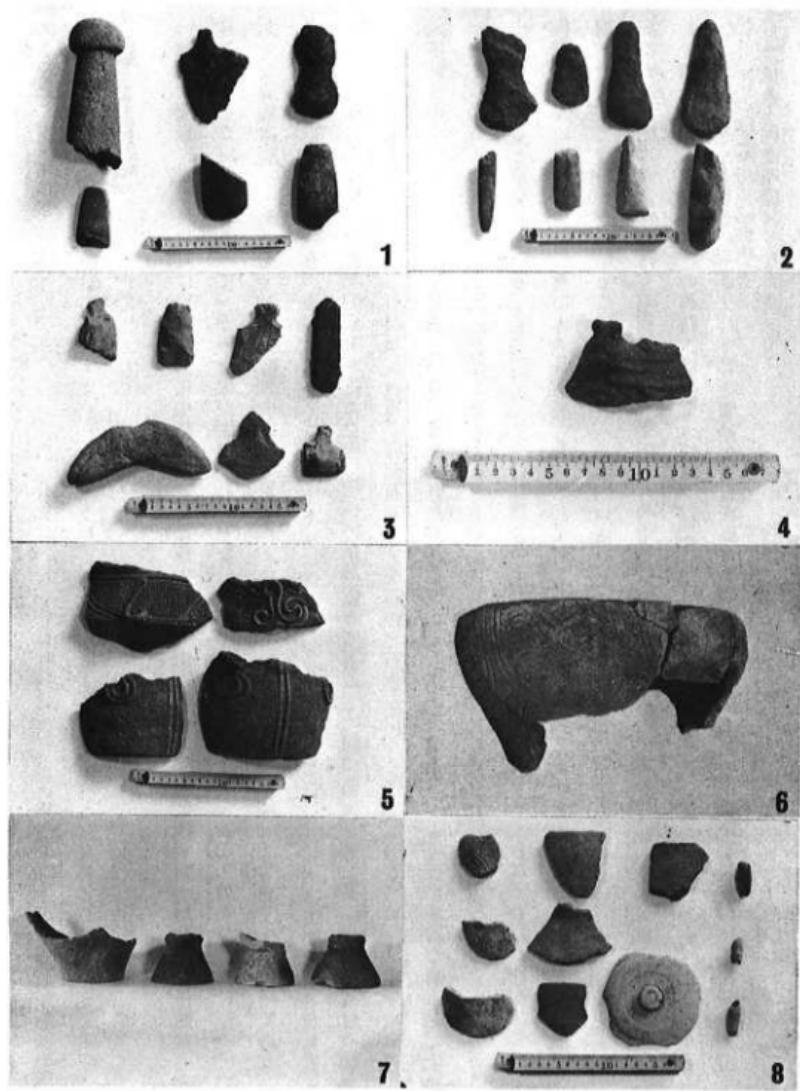
6：「熱海市史」上巻。昭和42年。

7：鈴木恒治「御殿場の古代文化」御殿場市文化財のしおり第一編。昭和34年。

第六章 周辺の遺跡

富士川流域に沿う芝川町は、比較的先史時代の遺跡に恵まれた所である。地理的には、富士川が町を横断し、それに流れ込む小さな支流が四本あって、その支流が作ったわずかな低地を除き、残りのはほとんどが山地及び台地になつてゐるため、大きな遺跡はなく、その大半が縄文時代のものである。また標高で見ると、高い方は三二〇メートル前後であり、低い方は芝川の流れに沿つて、現在の集落より低く五〇メートルに達しないような極めて低い所にあるものと見うけられる。

ところでこの地域の考古学的研究が進んだのはつい近年のことである。「静岡県史」第一巻には、芝富村の楠金で、鉢形土器のほか完全なものをして石器類は石鋸・打製石斧・磨製石斧・石匙が出たことを記録しており、小学校附近では石鋸、大字大久保では石棒が出たと見えている。また袖野村では猫沢から石棒の残欠及び厚手の壺形土器が出土し、上袖野のカミヤ沢から磨製石斧、カラ沢から精製石棒（長さ一五・五センチメートルで、粘板岩製、断面は円形で三・三センチメートル）が出土していると紹介している。また同村の辻からは縄文式土器及び黒耀石片、オマゴメからは、有頭石棒が出ている。さらに内房村については県史第二巻に赤池長重氏の報告として打製石槍の出土したことが見えている。以上芝富・袖野・内房の三村が合併して今日の芝川町となつたわけで、当町内に遺跡のあることは比較的早くから知られていたようであるが、その研究が体系的に進んだのは、昭和二七、八年頃からの中野国雄氏の踏査以後である。同氏は「吉原市史研究資料」第二号に於て富士地区（旧富士郡）の遺跡を記載し（注1）、簡潔に記述しておられる。芝川町の遺跡については、県史のものと大差なくオマゴメ・カミヤ沢・カラ沢などの地名が見られる。その地点が依然として不明確なのは惜しまれるが、出土遺物についてはある程度明確にされた。



第22図 芝川町出土の遺物写真

1—篠沢・上ヶ谷戸、2—上袖野・辻、3—長貫・南原、4—西山・小塚。5—出土地不明（芝川中学校藏）、6—上袖野・辻（以上縄文時代遺物）。7—上袖野・辻出土弥生式土器、8一同道路出土土師器・須恵器・土瓶

次いで三三年になつて、小野真一氏が西山及び大久保附近を踏査され、地元の岡田芳龍氏の案内を経て、大久保の向ヶ谷戸、西山の小塚などの遺跡を発見されている。また西山下條の農家で尖頭器様の石器を見付け、さらに岡田氏所蔵の遺物を実見されている。翌三四年にになると、佐藤民雄、中野国雄、小野真一の三氏によつて芝川流域一帯の踏査がなされ、この時上柚野の中才をはじめ下柚野の東原I、同IIの遺跡が発見された。またこれと前後して中野国雄氏により大久保の大明神・若宮・羽鶴の羽行平・坂本・上羽鶴長貢の砂原・南原・橋場・宮ヶ谷戸などの諸遺跡が次々に発見されていった。内房地域においても、稻垣甲子男氏によつて本城寺・大嵐などが発見された。

こうして四三年以後になると地元在住者による踏査が始り、翌年小野真一氏を二度にわたつて迎え、新遺跡を多く発見したので、筆者らが駿豆考古に発表した次第である（注2）。

その後「芝川町誌」の編集の仕事が始り、更に新発見の遺跡もあつたので、この機会に紹介しておこう。

（芝川流域の遺跡）

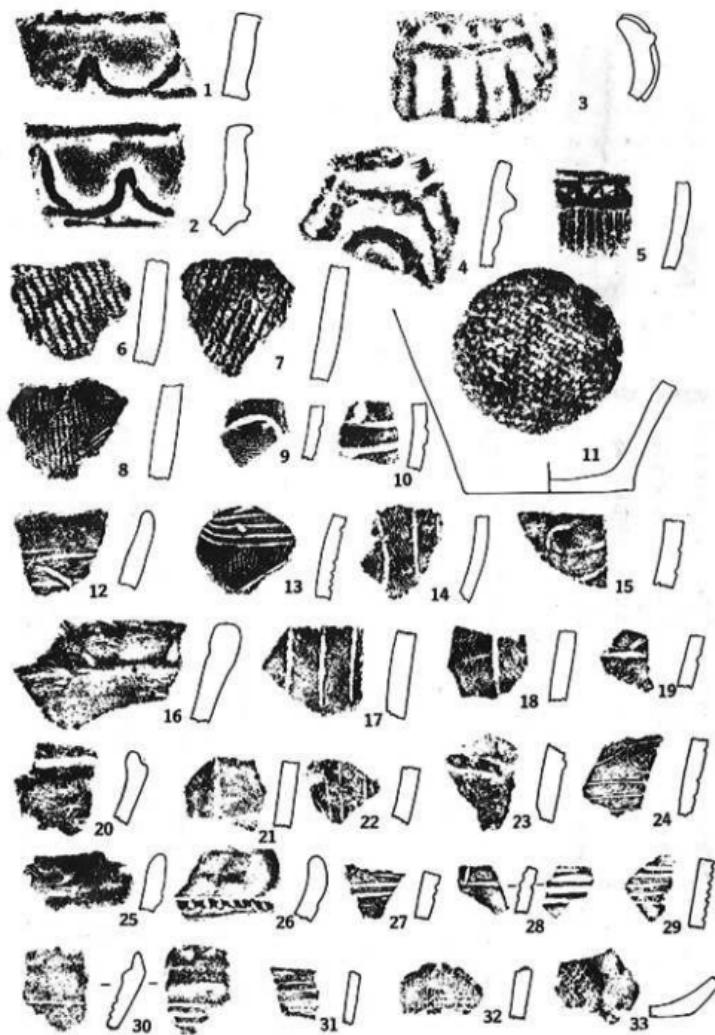
1 上柚野・和原（わはら）

芝川上流の右岸にあつて、縄文後期の土器片を出土した。壺ノ内式のものは一般に厚手で、褐色又は暗褐色であり、加曾利B式のものは同色又は黒褐色で、前者に比べ若干薄手になり、焼成も良く滑沢がある。又内面に文様が付いているものがある。又この近くで弥生の壺が出たという話があるが実見していない。（第24図参照）

2 上柚野・定林寺（じょうりんじ）

和原とは芝川を挟んで対岸にある。「静岡県史」にあるオマゴメというのはここのことである。後期の大洞式に併行すると思われるものが出ていて。

第23図 森林出土磨石器



第24図 芝川町出土土器拓影（その1）

1-15—下植野・辻、16-33—上植野・和原

3 上袖野・中才（なかつさい）

加曾利E式土器と打製石斧を出土している。また袖野中学校にここから出土した打製石斧一本が保管されている。静岡県史に見えるカラ沢はここのことと、中野・小野両氏によつて再確認された。

4 上袖野・森林（もりばやし）

中野氏により発見された。加曾利E式土器と打製石斧・石錐・石皿・磨石を出したというが、筆者らは確認していない。尚カミヤ沢という家号の稲葉太郎氏の家に、弥生時代のものと思われる大形磨製石斧が保管されている。（第23図参照）

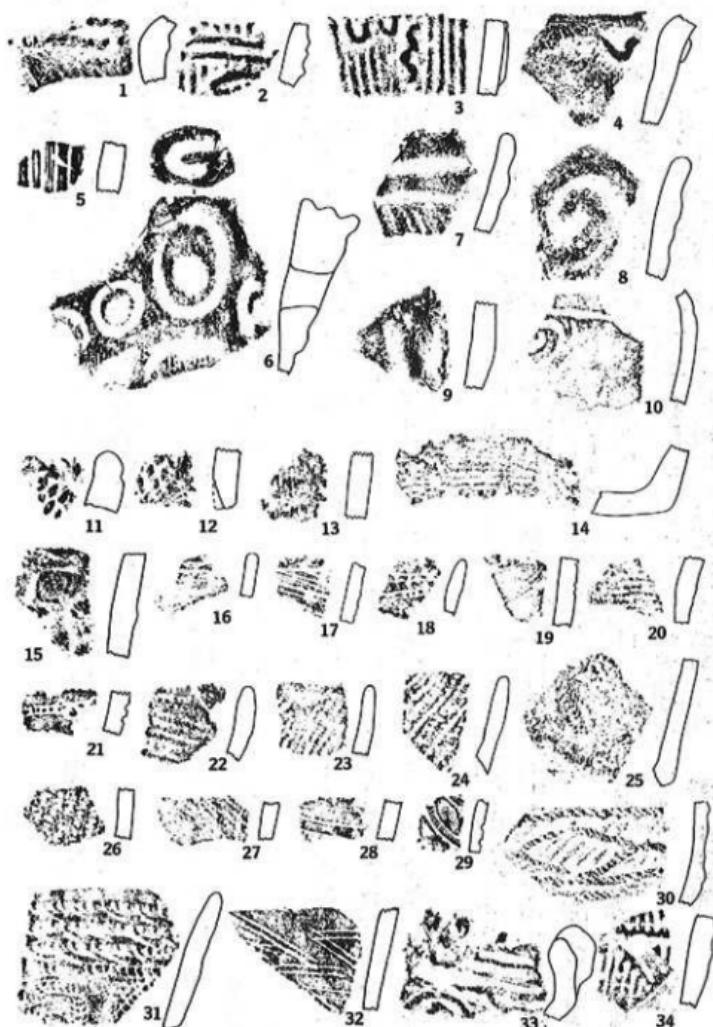
5 上袖野・辻（つじ）

県史すでに紹介されている古い遺跡であるが、三六年六月のガソリンスタンド建設工事のため、一部が破壊されてしまった。更に三八年五月にも再度の工事があり、この二度の工事によつて多量の遺物が出た。幸い遺物は工事主催者によつて袖野小・中学校に寄贈せられ、当時の袖野中学校長であった中村利夫氏は、小野真一氏を招いて、その記録保存に努められ今日も良好に保存されている。

遺物は、繩文・弥生・土師・須恵の土器片や石器など多岐にわたつてゐる。まず繩文は勝坂式・加曾利E-I式・同III式・堀之内式の土器片、及び加曾利E-III式の深鉢形土器破片、堀之内式の小型土器と打製石斧及び磨製石斧が出土している。弥生時代のものは、網代底を有する深鉢形または甕形土器があり、中期の有東式のものである。また同時期の壺形土器の破片もあり、他に後期終末の台付甕形土器の台部が出土している。古墳時代の土師器・須恵器は、土師器の中に大廓式（五領式併行）が見られるが、須恵器の中には蓋につまみのあるものがあり、七世紀代のものと思われる。

以上のように、本遺跡は繩文・弥生・古墳の各時代にまたがる複合遺跡である。（22・24図参照）

6 上袖野・天神（てんじん）



第25図 芝川町出土土器拓影（その2）

1~10—下柚野・天神, 11~34—西山・小塚

辻遺跡の東方で芝川の右岸にある。望月一雄氏宅の庭先から出土したものに、加曾利E-I式・同II式及び堀之内II式などの土器片があり、一般に焼成良く、胎土は軟弱で、磨滅がひどい。色は赤褐色または暗褐色である。(第25図参照)

7 下柚野・東原A(ひがしばらA)

佐藤民雄・中野国雄・小野真一の三氏が踏査した際、低い台地上で発見し、小野氏が棒円押型文土器を採集された。遺跡はごく小規模で遺物も少ない。

8 下柚野・東原B(ひがしばらB)

前記三者によつて発見された。A遺跡の南方にあり、中野氏が中期の土器片(加曾利E式)などを採集したというが、その後柚野中学校の生徒によつて褐色で焼成の良い勝坂式の土器片が採集された。

9 猫沢・上ヶ谷戸(うえがやと)

芝川へ流れる沢沿いにあり、富士宮市との境附近に存在する。繩文中期の加曾利E-I式・同II式・同III式、後期の堀之内式等の土器や打製石斧を採集したが、猫沢の佐野文三氏宅には、定角石斧三個を始め石匙・打製石斧・有頭石拂各一個と、堀之内式土器など、我々の採集品と若干時代差のあるものが保管されている。他に同家では、石鏃や壺形土器を柚野中学校へ寄附したという。(第22図1及び第26図参照)

10 西山・久保(にしやまくば)

西山の西端にあり、久保神社を中心にして狭い範囲から遺物が採取された。遺物もごく少量で、繩文後期の称名寺式併行かと思われる土器片が採集された。

11 西山・小森(こもり)

西山本門寺の坊の一つ、妙圓坊の庫裏建設中に出土した。尖頭器や有舌尖頭器・石鏃などで土器は伴なわなかつた。層位



第26図 芝川町出土土器拓影（その3）

1~27—猫沢・上ヶ谷戸

が確認されなかつたのは残念である。

12 西山・馬場A（おどりばA）

森山の東側にあり、広い平坦地であるが、遺物はその一部からまとめて出た。厚手の褐色または暗褐色の土器片である。

13 西山・馬場B（おどりばB）

前記A遺跡のやや西北の安居山用水沿いにあり、同様の遺物と黒耀石の石鏟が出た。

14 西山・小塚A（こづかA）

本調査の行なわれた遺跡で、森山の南側の丘陵地にある。遺物は、本調査以外は、縄文早期の橢円押型文土器や絡繩帶压痕文土器などで、なかに前期の半截竹管文などが出土している。石器は石鏟や石匙などがある。（第22・25図参照）

15 西山・小塚B（こづかB）

A遺跡の北側にあり、ほとんど同時期の縄文時代のものが採集されている。爪形文を有するものや刻み目のある細隆起線文などが見られ、その他鶴ヶ島台式の土器や、獸面把手のある諸磯B式土器が出た。本来AとBの兩遺跡は一つだったようで、両者の間は、近年まで沼になっていたということである。（第25図33・34及び第22図4参照）

16 西山・小塚C（こづかC）

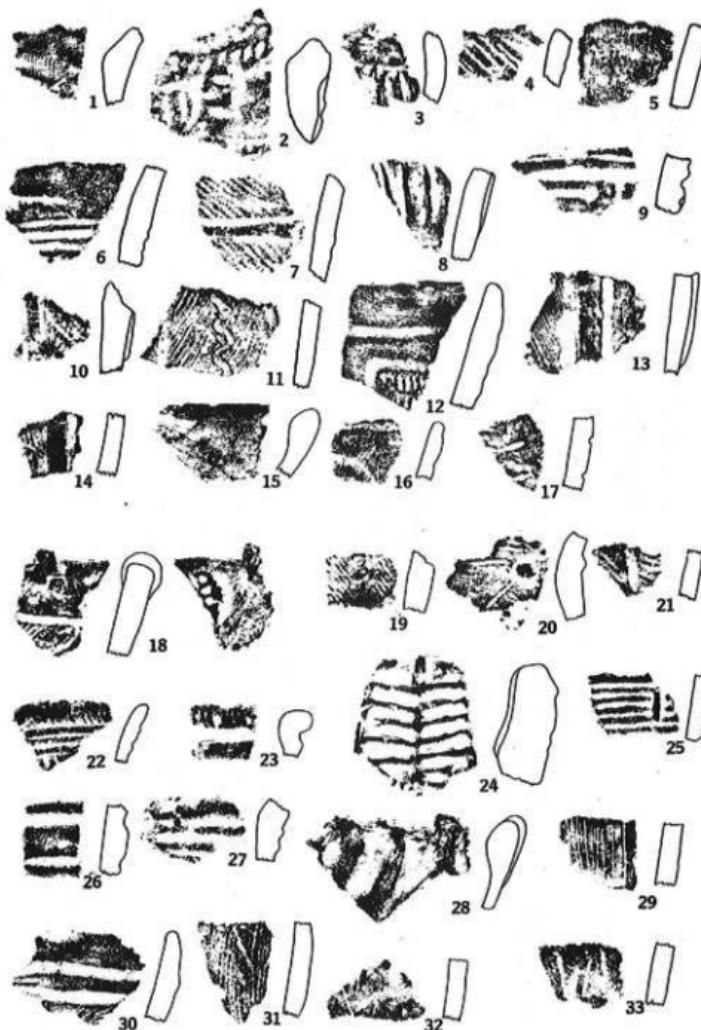
B遺跡の更に北方にある。土器片は少量で、時期も判明しないが、黒耀石製の石鏟は、前期の特徴をもつたものである。

17 西山・小塚D（こづかD）

A遺跡の東側にあり、面積は狭いが、大量の墨耀石製石鏟が採集された。

又遺跡の西端で現在山道となっている所に、焼土が二ヶ所露出している。

18 西山・下塙戸（しもがいと）



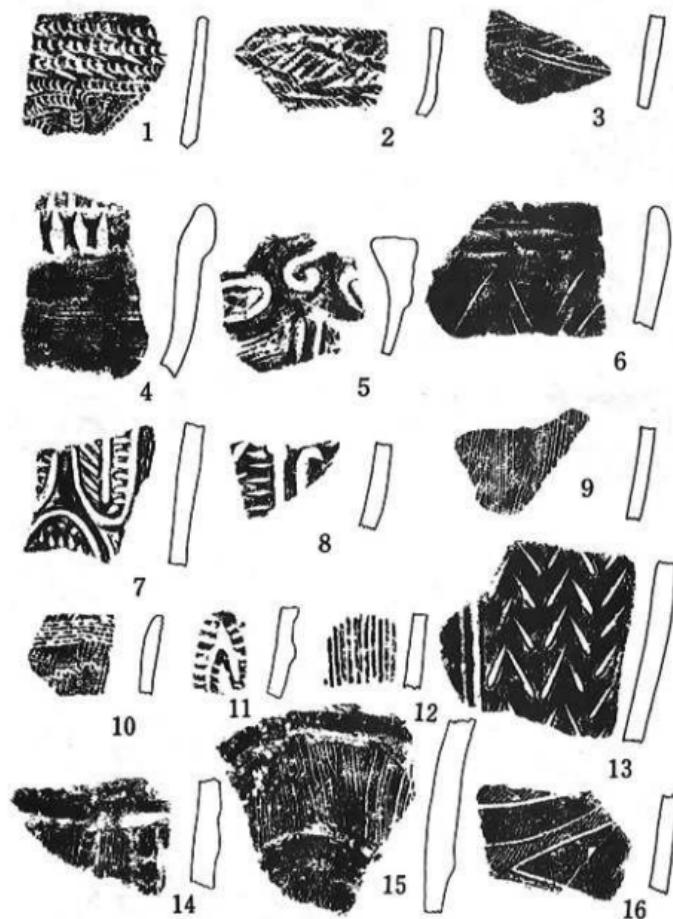
第27図 芝川町出土土器拓影（その4）

1~17一大久保・向ヶ谷戸, 18~20一大久保・大明神,
21一大久保・若宮, 22~23一羽瀬・坂本



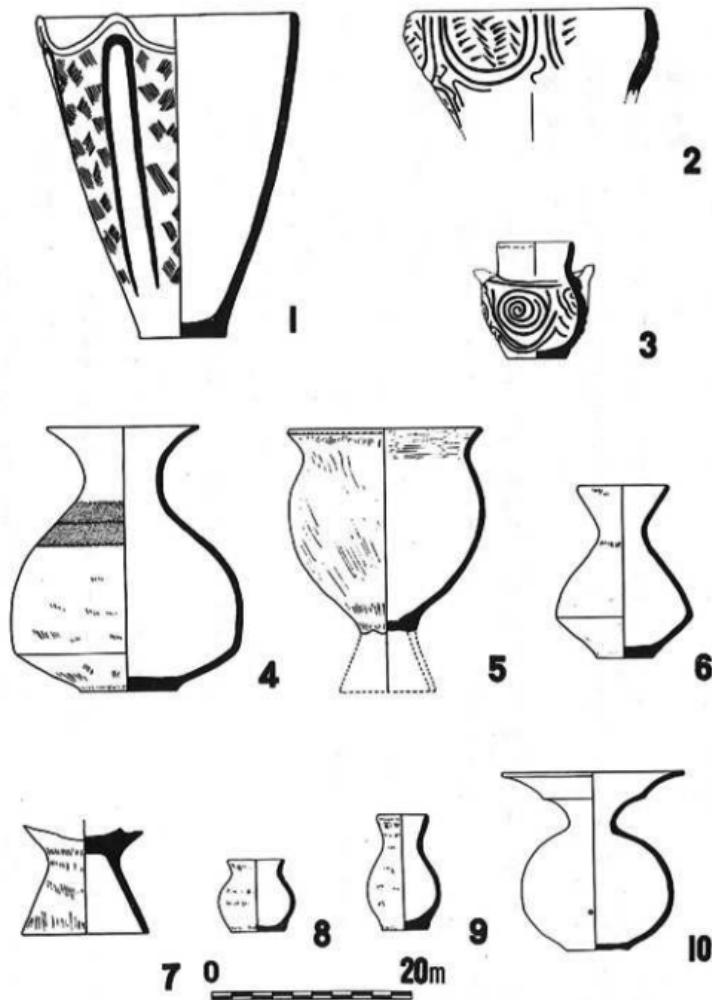
第28図 芝川町出土土器拓影（その5）

1~16—長貫・南原。17~20—内房・和平



第29図 芝川町内出土縄文土器拓影（その6）

1~3—西山・小塚、4~6—大久保・向ヶ谷戸、7~9—羽紙・坂本、10~16—長貫・南原



第30図 芝川町及び富士宮市出土土器実測図

1一大岩・九ヶ谷戸（縦文），2・3一下柚野・辻（縦文），4～6一羽衣町（弥生）
7～9野中・施戸（弥生），10一大岩九ヶ谷戸（土師），（2・3が芝川町内出土）

中野国雄氏により、県の遺跡台帳に登載され、茅山式土器を出土していることが見えている。筆者らはまだ確認していない。

19 大久保・向ヶ谷戸（むこうがやと）

芝川の右岸県道脇にあり、中期の勝坂・加曾利I・II・III式土器を出土している。また口辺近くに大きな爪形をつけた土器も出ている。石器は打製の石斧や石錐が発見されている。（第27図参照）

20 大久保・東久保（ひがしくば）

向ヶ谷戸遺跡と県道を挟んだ東側の芝川沿いにあり、小さな台地状の所にある。出土した土器片はごくわずかで、硬質の薄手のものがあり、後期のものと思われる。

21 大久保・大明神（だいみょうじん）

現在の大久保部落より低い所にある。周囲を水田に囲まれた段丘上で、明るい褐色または灰褐色をした器肉の硬織な後期の土器片が出土した。（第27図参照）

22 大久保・若宮（わかみや）

前記大明神の南方で、同様の小丘上にある。この小丘上に若宮さんと呼ばれる小祠があつたため、この名がある。筆者らは後期のものと思われる土器片を少量採集したが、中野氏は茅山式土器の出土地として県の遺跡地名表に載せている。

23 羽黒・坂本（さかもと）

坂本部落の神社と寺に挟まれた所の畠地を中心に拡がっている。土器は中期の柏縞式又は阿玉台式に似た手法をもつもの及び加曾利E-I・II・III式等が出土した。また石器類は、打製石斧・石錐などが主要なものである。（第27図参照）

24 羽黒・平野（ひらの）

県遺跡地名表に子母口式・茅山式・木島式・加曾利E式などの土器の出土が記載されているが、筆者らの調査では確認す

ることが出来なかつた。

25 長貫・砂原（すなはら）

芝川の下流の右岸にあり、加曾利E式の土器が出土しているらしい。県の遺跡地名表に記載されている。

（富士川・稻子川流域の遺跡）

26 上稻子・門野（かどの）

門野の大家の前の桑畠から、堀之内I式土器と石匙を採集した。町内の遺跡として一番標高の高い所にある。

27 長貫・宮ヶ谷戸（みやがやと）

上長貫部落の北端の小高い所にあって、加曾利EIII式土器及び打製石斧・石鎌・磨石・石皿の出土が記録されている。

28 長貫・南原（みなみはら）

楠金部落の南側で、富士川の初期段丘上にある。古くから大量の遺物を出土しており、「静岡県史」にも記載されている。

同所の佐野保彦氏宅には、石匙・打製石斧及び「く」の字形の異形石器や尖頭器等が保存されている。土器片は、柏窪式・加曾利E-I式の古いもので、小野真一氏の設定した入谷平I式に当るものや、同II式に当る加曾利I式及び同II式・同III式、

それに富士宮市の千居原遺跡から出土したような「ハ」の字形文様の土器片など、中期のものが出土している。

（第22図3及び第28・29図参照）

29 長貫・橋場（はしば）

橋場部落の北側にあり、打製石斧が採集された。

30 内房・本成寺（ほんじょうじ）

富士川の右岸で、同川の段丘上にある。この近くに日蓮宗の名刹長遠山本成寺という寺があるため遺跡名となつた。少量

の土器片を出土しているが、時期は不明。

(境川・稻瀬川流域の遺跡)

31 内房・上ノ山（うえのやま）

白鳥山の丘陵端で、相沼部落の氏神浅間神社の裏手にある。現在は畠地であるが、少量の土器片と打製の石斧が出土している。土器片は薄手硬質で縄文後期のものらしい。

32 内房・大和沢A（やまとざわA）

巡沢部落の西側で大和沢という沢に沿って存在する。竹林を挟んで南側にあり、無文の縄文式土器が出土した。

33 内房・大和沢B（やまとざわB）

A遺跡と同様の地形で、同じような縄文式の無文土器が出土した。

34 内房・和平（わだいら）

仲部落と大嵐部落の中間にあり、南向きの丘陵平坦地である。従来は大嵐遺跡と呼ばれていたが正式の地名を探り「駿豆考古」第九号上で、この名に改めた。遺物はかなり古くから知られ、早くから採集されていた。中期の加曾利E-I式土器や後期の堀之内式・弥名寺式併行土器などが出土し、石器は多くの石棒や磨製石斧が発見されている。(第28図参照)

35 内房・仲上（なかかみ）

前記和平の下方、仲部落近くにある。後期と思われる少量の土器片が出土した。(唐紙一修・佐野文孝)

(注)

1 中野国雄「吉原周辺の原始時代」(第一報)吉原市史研究資料2号。昭和29年。

2 唐紙一修・佐野文孝「駿豆郡芝川町の遺跡」駿豆考古第九号。昭和45年。

第七章 駿豆地方における先土器時代遺物

駿豆地方における先土器時代遺物、すなはち旧石器の発見は近年著しく増加している。その多くは表面採集であるが、学問上無視できない良好な資料がきわめて多い。そこでこの小塚遺跡の報告に際して、当地方の旧石器の中から主要なものを選び、実測図を中心に紹介して、対比の資料とし、また御参考に供したいと思う。一応遺跡別にごく簡単に解説を付すが、大急ぎでまとめたため、市町村別に必ずしも整然と記述できなかつたことはお許し願いたい。なお各遺跡の所在地については、地図のほか第七章の地名表を参照されたい。

馬平A遺跡（三島市、地図No.6）—第33図1～8・第34図1～8
幅広の剥片を主とする遺跡で、全て粗質の黒耀石が用いられている。

第34図1・2のごとく剥片の一部に刃溝・剥離による細部加工が施されたナイフ形石器がある。しかし定形化されたナイフ形石器は採集されていない。

觀音原遺跡（三島市、地図No.10）—第34図9

ナイフ形石器一点が採集されている。良質の黒耀石製で、刃部の一部を欠損している。全長四・〇センチメートル。

馬平B遺跡（三島市、地図No.7）—第34図10

基部を欠損したナイフ形石器が一点採集されている。現長一・三セントメートル、硅質頁岩製。

馬平C遺跡（三島市、地図No.8）—第34図11

安山岩製の揉錐器一点が採集されている。これは、剥片の周縁部に細部加工を施し、一部を突出させて錐部とし、錐部の断面形はD字状をなしている。全長四・四センチメートル。

觀音洞遺跡（三島市、地図No.9）—第34図12～14

ナイフ形石器三点が採集されている。すべて小形のナイフ形石器で、12は安山岩系石材製、13・14は粗質の黒耀石製である。12は全長一・八センチメートル、13は基部を若干欠損しており現長一・八センチメートル。14は全長一・二センチメートル。

コスゲA遺跡（三島市、地図No.1）—第35図1

安山岩製のナイフ形石器一点が採集されている。これは非調整打面と打痕を有し、先端部と基部に若干の刃済し剥離がなされている。全長四・九センチメートル。

コスゲB遺跡（三島市、地図No.2）—第35図2

ナイフ形石器一点、搔器一点、剥片三点が採集されている。全て安山岩が用いられており、2は基部を欠損したナイフ形石器で現長一・

七センチメートル、3は剥片の一端に細部加工の施された搔器で、全長五・一センチメートル。4・5は剥片である。

ナーゴ山遺跡（三島市、地図No.5）—第35図6～8

中林山遺跡・萩ヶ原遺跡とも呼ばれ、ナイフ形石器が三点採集されている。6・8は良質の黒曜石製で、7は安山岩製である。6は、剥片を斜めに刃済し剥離を施して脊部としており、全長二・七センチメートル、7は剥片の片縁辺を弧状に刃済し剥離を施し、先端部と基部を尖らせてある。全長四センチメートル。8は先端部を欠損しており、基部裏面には内彎した剥片が平らになる様に調整されている。現長二・八センチメートル。

三島辻遺跡（三島市、地図No.3）—第35図9

ナイフ形石器一点が採集されており、黒曜石の円盤より剥離された剥片から、ナイフ形石器を作成していることをものがたる自然面を一部に有する。全長三・七センチメートル。

錦ヶ沢遺跡（三島市、地図No.11）—第35図10～11

尖頭器が二点採集されている。10は片面加工の尖頭器で全長一・九センチメートル、黒曜石製。11は両面加工の柳葉形の尖頭器で安山岩製。全長九・七センチメートル。

山中A遺跡（仮称三島市、地図No.12）—第35図12

ナイフ形石器一点が採集されている。全長三・四センチメートルで良質の黒曜石製である。

順合寺遺跡（三島市、地図No.13）—第35図13・14

ナイフ形石器一点と尖頭器一点、細石核一点が採集されている。13は片面加工の尖頭器で全長二・六センチメートル。安山岩系石材製。14は黒曜石製の円錐形細石核で十数粒の剥離痕を有す。

山中D遺跡（仮称三島市、地図No.15）—第35図15

ナイフ形石器一点が採集されている。黒曜石製の切出形ナイフ形石器で、全長二・四センチメートル。

簗原D遺跡（仮称三島市、地図No.16）—第35図16

黒曜石製のナイフ形石器が一点採集されている。片縁辺のみに刃済し剥離が施されており、全長一・四センチメートル。黒曜石製。

山中C遺跡（仮称三島市、地図No.14）—第35図17～19

小形のナイフ形石器一点と尖頭器一点が採集されている。17は全長二・七センチメートルで安山岩製。18は全長一・九センチメートルで粗質の黒曜石製であり、19は両面加工の尖頭器で、全長五センチメートル。硅質頁岩製。

海老ノ木平遺跡（三島市、地図No.17）—第36図1～6

ナイフ形石器四点と尖頭器一点、細石核一点が採集されている。ナイフ形石器は4が先端部を欠損しているが、他は完形・石材は1・2・4が粗質の黒耀石製で、3が安山岩系石材製である。5は粗質の黒耀石製で、剥片の両縁辺を細部加工を施した半両面加工の尖頭器である。全長四・四センチメートル。6は半円錐形の細石核で、七条の剥離痕を有す。

御座松遺跡（三島市、地図No.18）—第36図7～12

ナイフ形石器二点と搔器二点・彫器一点・石核二点が採集されている。7・8・10はナイフ形石器で、いずれも基部が先端部を欠損しており、7・8は粗質の黒耀石製である。9は小形の指指状搔器で一端に細部加工が施されている。良質の黒耀石製で全長一・六センチメートル。11は彫器で一端が、極状剥離によつて彫刻面をなしている。全長五・三センチメートル。硅質岩石製。12は良質の黒耀石製の石核である。

トビノス遺跡（三島市、地図No.19）—第36図13～17・第37図1～8

ナイフ形石器八点と尖頭器五点が採集されている。第36図13～17・第37図1～3はナイフ形石器で、器長は五・八～三・三センチメートルとやや大きいが、形状は一定ではない。石材も粗質の黒耀石製が三點、安山岩製二点・良質の黒耀石製二点と統一性がない。第37図4～8は尖頭器で、4は片面加工、8は半両面加工で他は両面加工の尖頭器である。

馬場遺跡（三島市、地図No.20）—第37図9～22・第38図1

ナイフ形石器十点と尖頭器五点が採集されている。第37図9～18はものである。第37図19～22・第38図1は尖頭器で、第37図19・20は片面加工、21は半両面加工で、第37図22と第38図1は両面加工の尖頭器である。

庚申松遺跡（三島市、地図No.21）—第38図2～26・第39図1～19

第40図1～4
第38図2～26・第39図1～8はナイフ形石器で、二十三点採集されており、一般に小形のもので、器長は四・三～二・五センチメートルと形状もバラエティーに富んでいる。石材は良質の黒耀石が最も多く用いられ、粗質の黒耀石がこれに次ぎ、以下安山岩の順になつてゐる。第39図11～13は尖頭器で、粗い両面加工のもの一点と、剥片等の周縁に浅い加工を施したもの二点があり、いずれも安山岩製である。第39図9・10は細石刃で、いずれも表面に二条の後縫を有する。黒耀石製、第39図14～17は搔器で、いずれも内脇した剥片の一端に細かい細部加工を施して刃部とし、一部には抉入りが施されている。比較的小形の指指状搔器である。第39図18は彫器で、剥片の周縁に細部加工を施し、その一端より安山岩製、二条の極状剥離によつて彫刻面を成している。第39図19・第40図1・4は石核で、半円筒形石核であり、第39図19と第40図4は上下に調整打面を有する。第40図2・3は細石核で、2は半円錐形、3は円錐形を呈する。共に黒耀石製。

台崎A遺跡（三島市、地図No.22）—第40図5・6

5・6共にナイフ形石器で、6は三島市跡に記載されていたものを転写したものである。6は黒曜石製。5は珪質頁岩製。

台崎C遺跡（三島市、地図No.23）—第40図7

粗質の黒曜石製ナイフ形石器一点が採集されている。剥離に統一性のない剥片の一部に刃溝し剥離を施したものである。

赤松遺跡（三島市、地図No.24）—第40図8・9

尖頭器一点と小形のナイフ形石器が採集されている。尖頭器は粗い剥離で両面に加工されているもので、片側縁部がふくらみをもつものである。

カシラガシ遺跡（三島市、地図No.26）—第40図10・11

ナイフ形石器が二点採集されている。10は黒曜石製で基部と先端部に若干刃溝し剥離による細部加工が施されている。11は珪質頁岩製で剥片の片側縁部は粗い加工によって刃部としている。

奥山遺跡（三島市、地図No.25）—第40図12・15

12是比较的大きい切出形のナイフ形石器で13・14は小形のナイフ形石器である。すべて良質の黒曜石製である。

北原遺跡（三島市、地図No.27）—第41図1・24・第42図1

ナイフ形石器二点と尖頭器一点、抉入り削器一点・石核二点が採集されている。第41図1・17・19・21はナイフ形石器で、器長は四・二・一・八・二・三センチメートルで、四センチ以上の大形のナイフ形石器がある。

多く、比較的大きいナイフ形石器である。形状はバラエティーに富み、

良質の黒曜石製がほとんどである。第41図24は粗質の黒曜石製の尖頭器で、剥片の両側縁部より片方へ剥離を施した半両面加工の尖頭器で下半を欠損している。第41図22は剥片の一部に抉入りを施した抉入り削器でチャート製。第41図18・23、第42図1は半円筒形の石核で、調整打面を有し、五・十一条の剥離痕が認められる。第41図23は珪質頁岩製。18は安山岩製。第42図1は良質の黒曜石製である。

初音ヶ原A遺跡（三島市、地図No.28）—第42図2・18

ナイフ形石器十五点と搔器二点が採集されている。第42図2・16はナイフ形石器で器長、形状も変化に富む。器長は四・九・二・五センチメートルで、二・三・三センチメートルのものが多い。12・14・16は切出形のナイフ形石器である。17・18は搔器で、17は周縁に細部加工を施し、一端が尖出して搔錐器となっている。

初音ヶ原B遺跡（三島市、地図No.29）—第42図19・27・第43図1(6)

ナイフ形石器十三点と削器二点、石核二点が採集されている。第42

図19・27・第43図1・3・5はナイフ形石器で、器長は四・二・一・二・二センチメートルで、先端部もしくは基部を欠損したものが多いが、小形のナイフ形石器である。石材は良質の黒曜石が主である。第43図4は削器で剥片の周縁に粗い細部加工が施されている。第43図6は安山岩製の半円筒形石核で五条の剥離痕が見られる。

初音遺跡（仮称）（三島市、地図No.30）—第43図7・8

ナイフ形石器二点が採集されている。共に先端部を欠損しており、

良質の黒曜石製である。

三本松遺跡（函南町、地図No.31）—第43図9

ナイフ形石器一点が採集されている。良質の黒曜石製で器長は三・一センチメートル。

上原遺跡（函南町、地図No.32）—第43図10～14・第44図1～25・第

45図1～7

ナイフ形石器二九点と尖頭器三点・搔器三点・石核三点が採集されている。第43図10～14・第44図1～24はナイフ形石器ではなく良質の黒曜石製である。器長は七・二～二・一センチメートルで比較的大形のものと、小形のものとに分れる。形状も変化に富んでいる。第44

図25・第45図1・2は尖頭器で、第44図25は大形の木葉形を呈する両面加工の尖頭器で、両面に粗い剥離がなされている。第45図1・2は剥片の周縁部に浅い剥離が両面に施された尖頭器である。第45図5・6は石核で、5は打面も一定でなく縱横に剥片を剥離したもので、6は円筒形の調整打面を有する石核である。

下原遺跡（函南町、地図No.33）—第45図8～11

ナイフ形石器三點と石核一点が採集されている。ナイフ形石器はすべて良質の黒曜石製で、器長は三・五～二・五センチメートル。11は円筒形の石核で、調整打面を有し、十数条の剥離痕を認めることができる。

下人原遺跡（函南町、地図No.34）—第46図1～9

ナイフ形石器六点と彫器一点、細石刃一点、細石核一点、尖頭器二

点が採集されている。第46図1～6はナイフ形石器で器長は三・一～

二・七センチメートルと比較的小形のものである。7は彫器で、剥片の縁辺に細部加工を施し、その一端に二条の極状剥離によつて彫刻面をつくっている。チャート製。8は黒曜石製の細石刃で三条の稜線を有する。9は半円錐状の細石核で、数条の剥離痕を認めることができる。

北甚助遺跡（垂山町、地図No.40）—第46図10～12

ナイフ形石器が三點採集されている。器長は三・五～三・〇センチメートルで、10は粗質の黒曜石製、11はチャート製、12は良質の黒曜石製である。

高天ヶ原遺跡（垂山町、地図No.41）—第46図13～14

ナイフ形石器が二点採集されている。共に黒曜石製で、14は小形のナイフ形石器である。

日向山遺跡（修善寺町、地図No.42）—第46図15

小形のナイフ形石器が二点採集されている。先端部を若干欠損したもので、良質の黒曜石製である。

大越遺跡（熱海市、地図No.43）—第46図17～18

尖頭器が二点採集されており、共に質質頁岩製で、基部が丸味をもつ両面加工の尖頭器である。17は全長六・七センチメートル。18は四

・四センチメートルで小形である。

天神原遺跡（賀茂郡南伊豆町、地図No.45）—第49図1

安山岩製の尖頭器一点が採集されている。先端部を欠損し、粗い両面加工の尖頭器である。

猫山遺跡（沼津市平沼）—第46図19

ナイフ形石器一点が採集されている。

尾尻遺跡（駿東郡長泉町）—第46図20・21

黒曜石製の円錐石核が一点採集されている。

大廟遺跡（沼津市柳沢）—第47図1～23

ナイフ形石器が二十三点採集されており、器長は四・七～二・五セ

ンチメートルで、比較的小形のナイフ形石器である。形状も変化に富み良質の黒曜石製がほとんどである。

伊良字根遺跡（沼津市、地図No.48）—第48図1～24

ナイフ形石器二十二点と搔器一点、石核一点が採集されている。第48

図1～22はナイフ形石器で、器長は三・六～一・一センチメートルで小形のものである。形状も変化に富み、良質の黒曜石製がほとんどである。23は搔器で内側に細部加工を施してある。チャート製。24は頁岩製の石核で三条の剥離痕を有する。

久保上遺跡（沼津市東椎路）—第48図25・26

ナイフ形石器一点と尖頭器二点が採集されている。25は良質の黒曜石製のナイフ形石器で先端部は裏面より細部加工が施されている。26は粗い両面加工の尖頭器で基部を欠損している。安山岩製。

小森遺跡（富士郡芝川町）—第49図2～5

2は尖頭器様石器で、3は有舌尖頭器、4は尖頭器、5はナイフ形石器で全て良質の黒曜石製である。（有舌尖頭器は参考として記載した。）

千居遺跡（富士宮市）—第49図6

第二次発掘調査で出土したナイフ形石器で、器長は一・六センチメートルと小形であり、玉髓系石材を用いている。

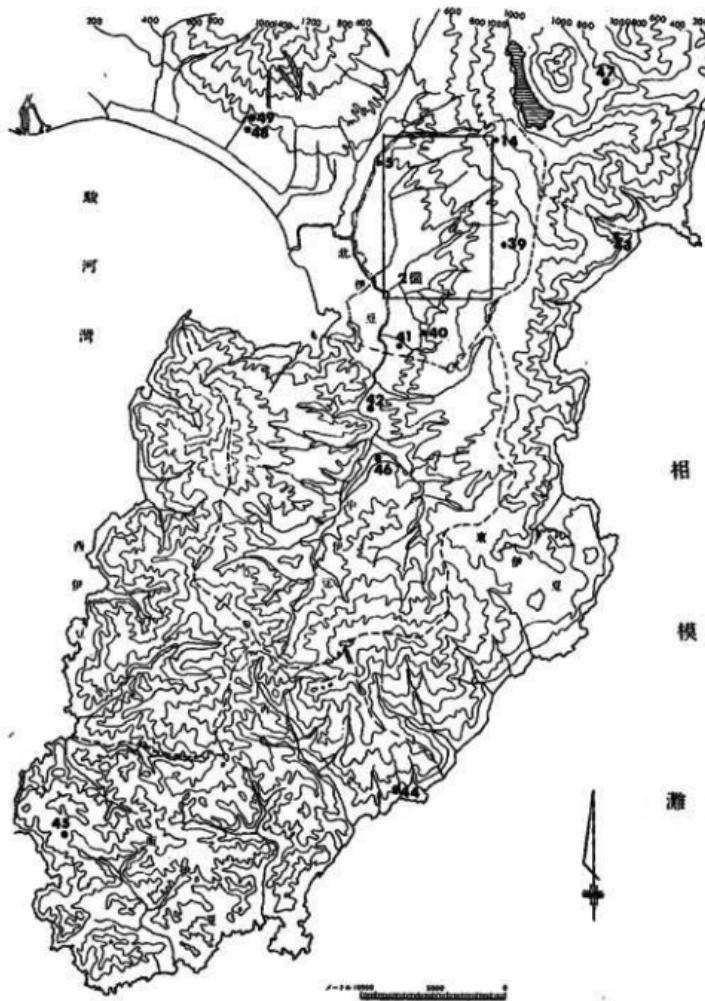
クズ屋沢遺跡（沼津市足高）—第49図7～11

ナイフ形石器・尖頭器・彫器・石核等が採集されている。7・8は

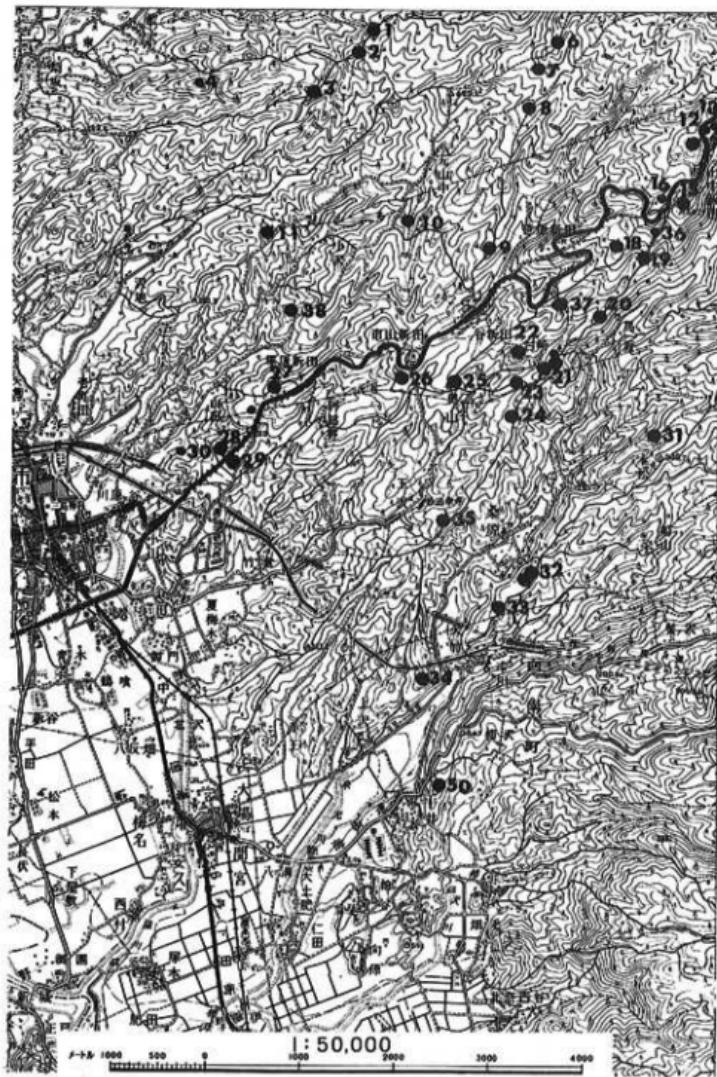
ナイフ形石器、9は彫器、10は剥片の周縁部に細部加工を施した尖頭器、11は石核である。

休場遺跡（沼津市足高）—第50図～第52図

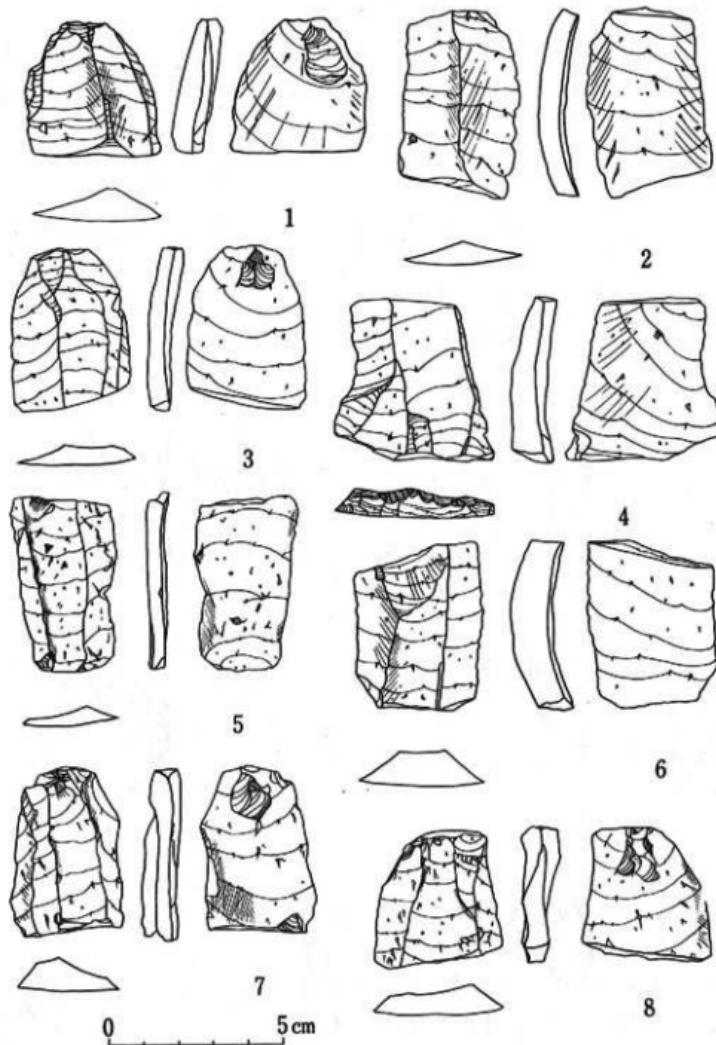
昭和三十九年、明治大学考古学研究室と沼津女子高校考古館共催にて発掘され、約四千点の石器及石屑を出土したが、その中の一部を、考古学集刊第三卷第二号より転載させて貰った。細石刀・細石核・ナイフ形石器・尖頭器・搔器・爪形石器などを出土している。



第31図 遺跡分布図(1)

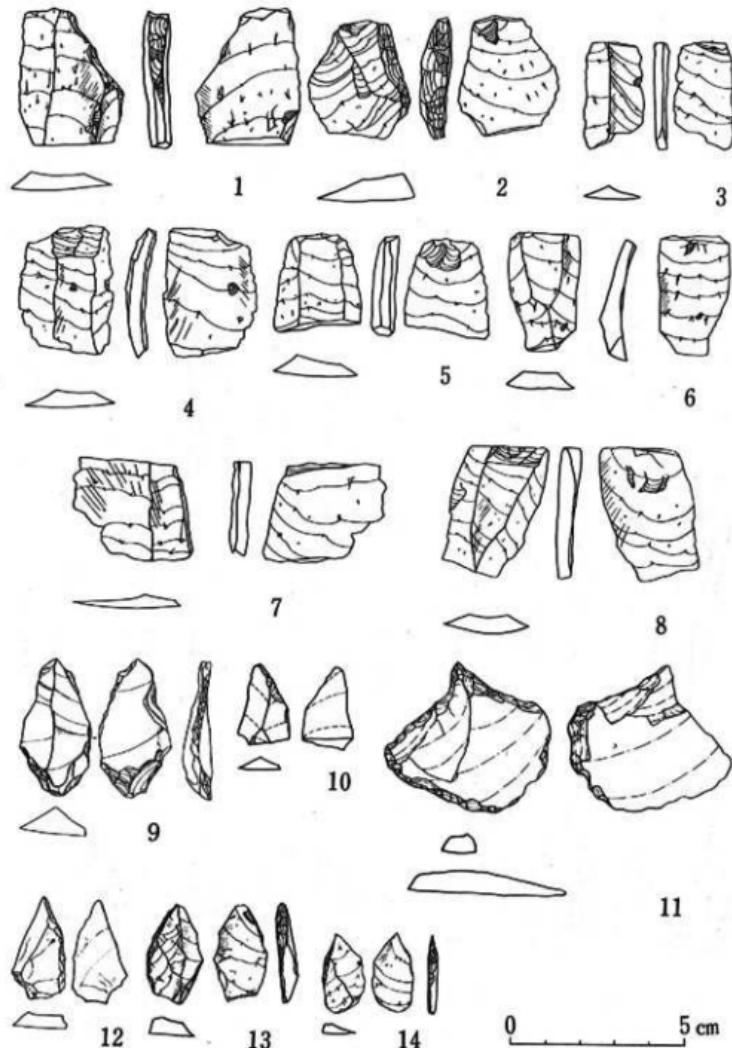


第32図 遺跡分布図（2）



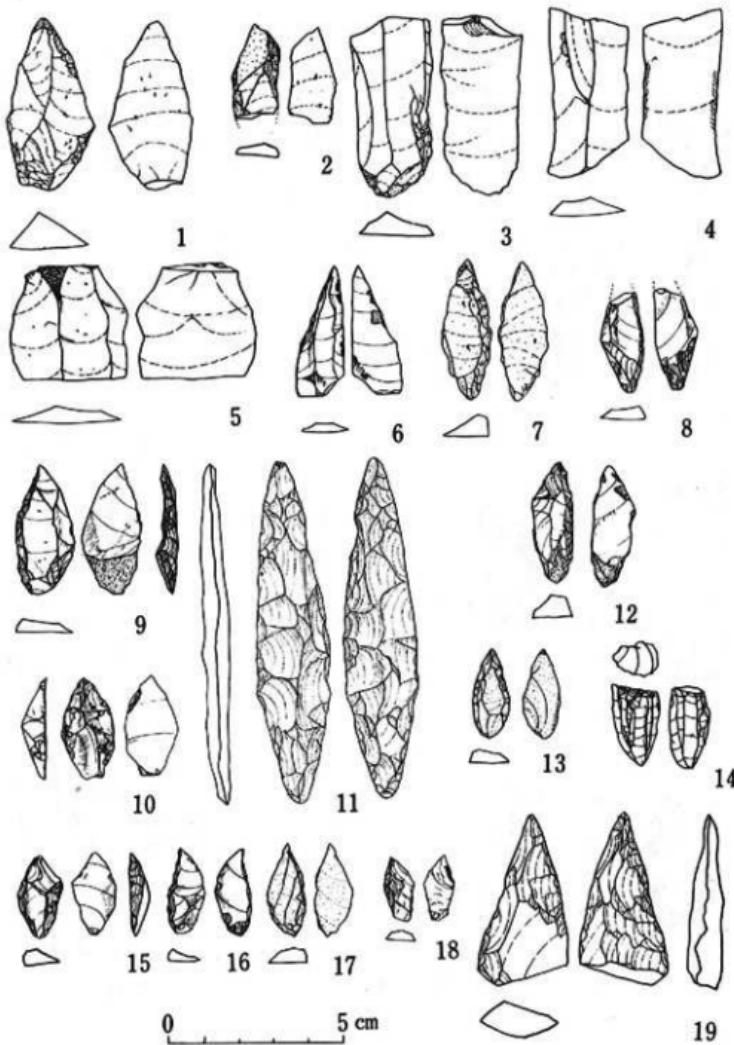
第33図 駿豆地方の旧石器実測図（1）

1~8—扇平A遺跡（1~8剥片）



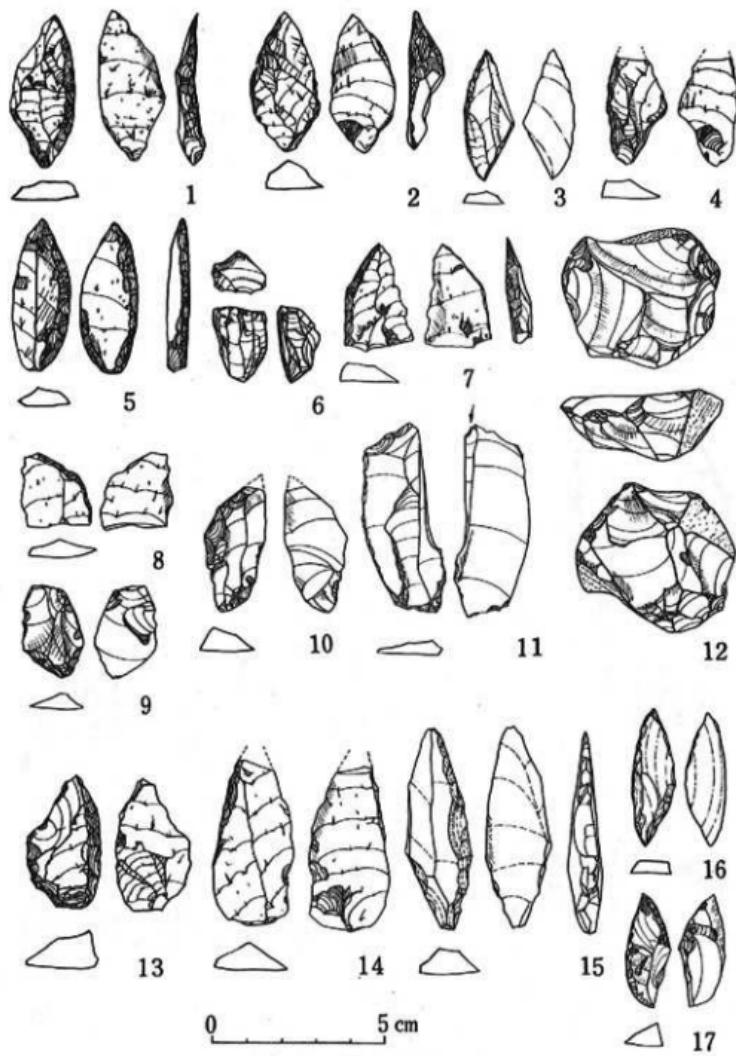
第34図 駿豆地方の旧石器実測図（2）

1~8—扇平A遺跡、9—観音原遺跡、10—扇平B遺跡、11—扇平C遺跡、12~14—観音洞遺跡（1・2・10・12~14—ナイフ形石器、11—抹錐器）



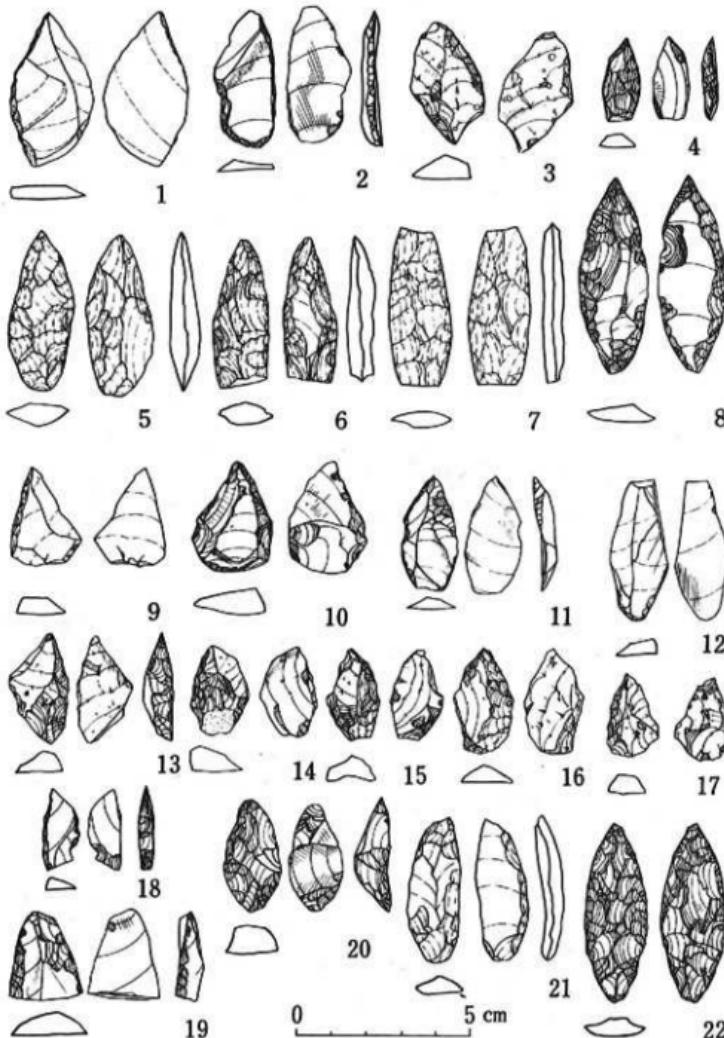
第35図 駿豆地方の旧石器実測図（3）

1—コスゲA遺跡、2～5—コスゲB遺跡、6～8—ナーゴ山遺跡、9—三島辻遺跡、10・11—継ヶ沢遺跡、12—山中A遺跡（仮称）13・14—腰合寺遺跡、15—山中D遺跡（仮称）17～19—山中C遺跡（仮称）（1・2・6～8・9・12・15～18—ナイフ形石器、3—擗器、4・5—剝片、10・11・13・19—尖頭器、14—細石核）



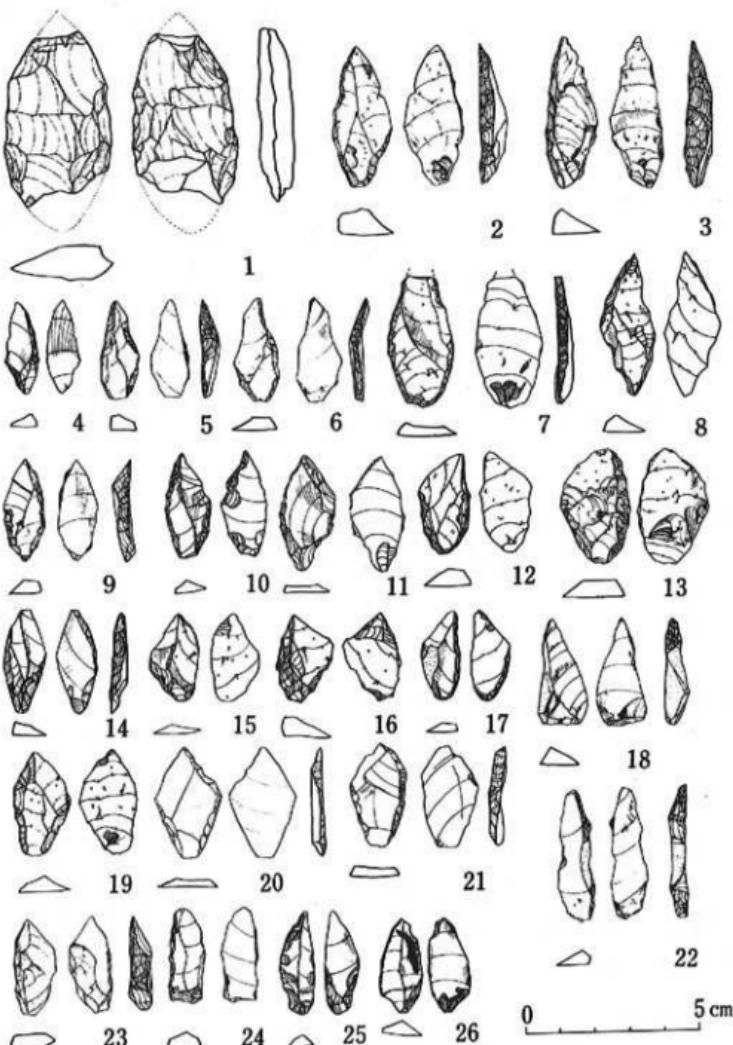
第36図 駿豆地方の旧石器実測図(4)

1~6—海老ノ木平遺跡、7~12—御座松遺跡、13~17—トビノス遺跡(1~4・7・8・10・13~17—ナイフ形石器、5—尖頭器、9—搔器、11—彫器、12—石核、6—細石核)



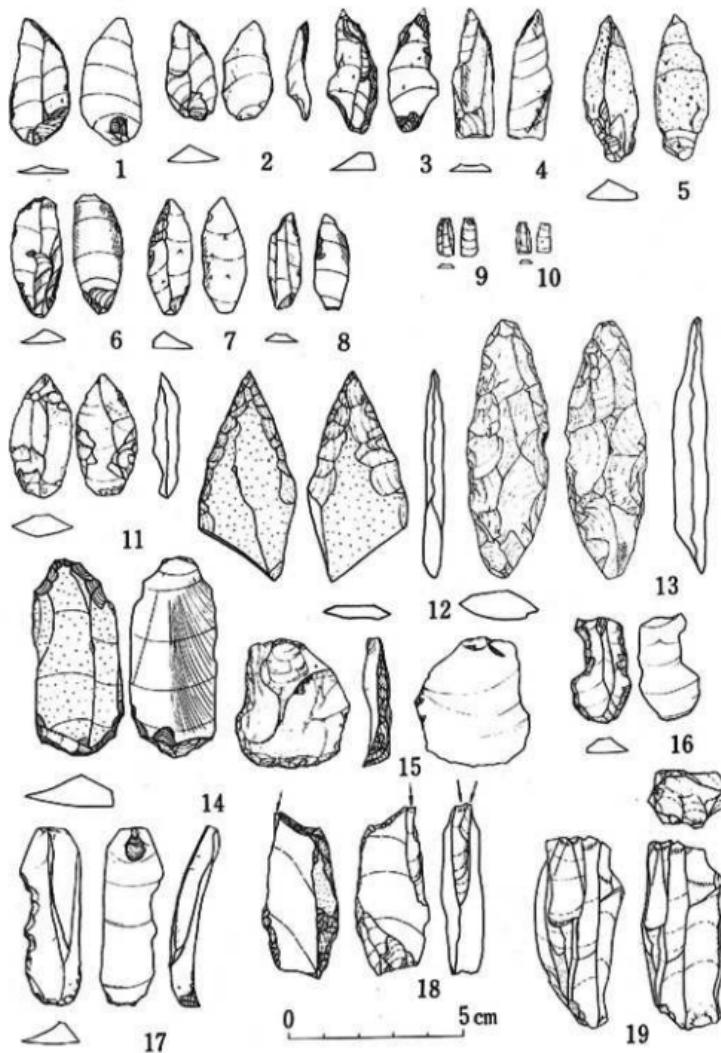
第37図 駿豆地方の旧石器実測図（5）

1~8—トビノス遺跡、9~22—馬場遺跡（1~3・9~18—ナイフ形石器、
4~8・19~22—尖頭器）



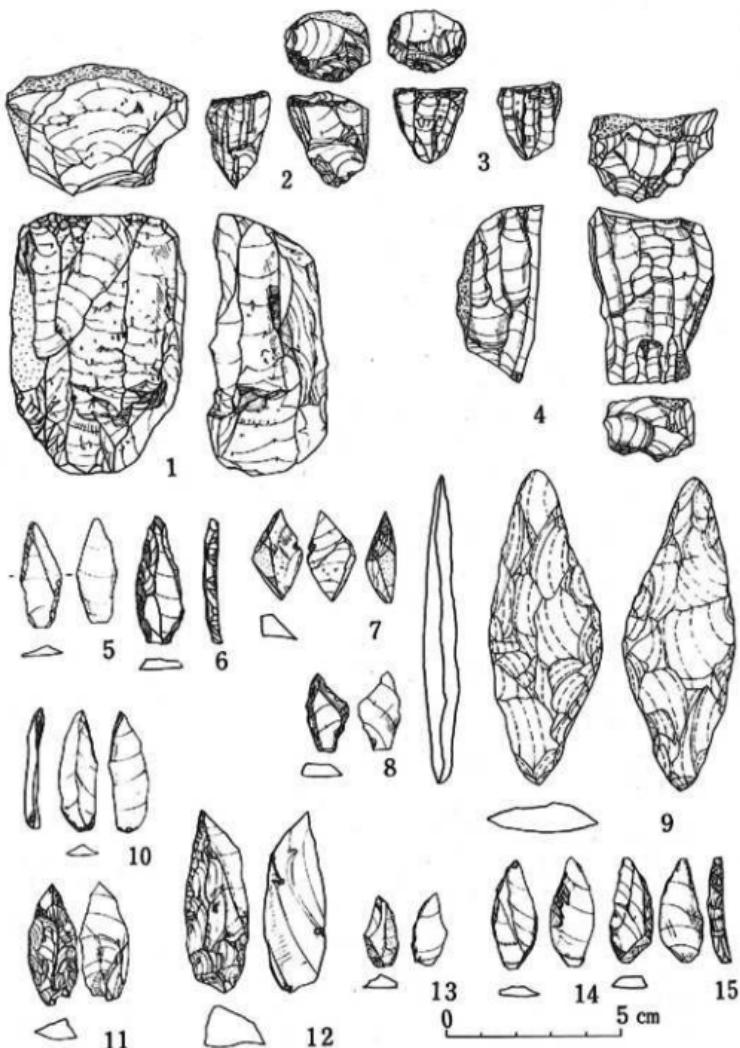
第38図 駿豆地方の旧石器実測図（6）

1—馬場遺跡、2~26—庚申松遺跡（1—尖頭器、2~26—ナイフ形石器）



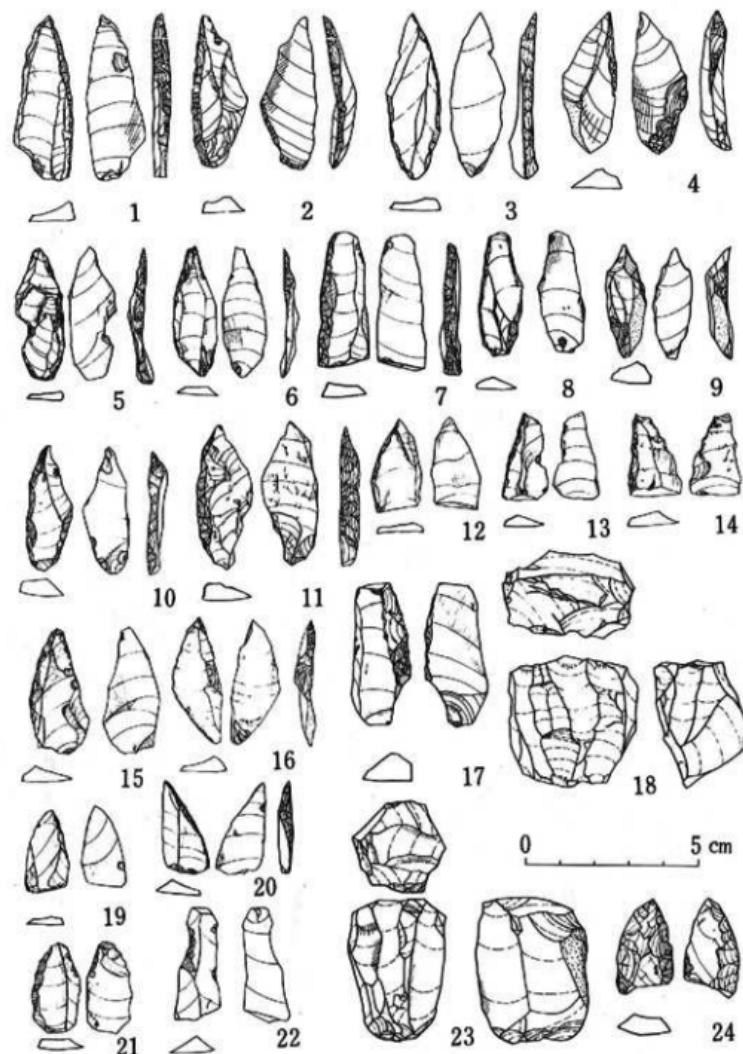
第39図 駿豆地方の旧石器実測図（7）

1~19—庚申松遺跡（1~18—ナイフ形石器、9・10—細石刀、11~13—尖頭器、14~17—核器、18—刃器、19—石核）



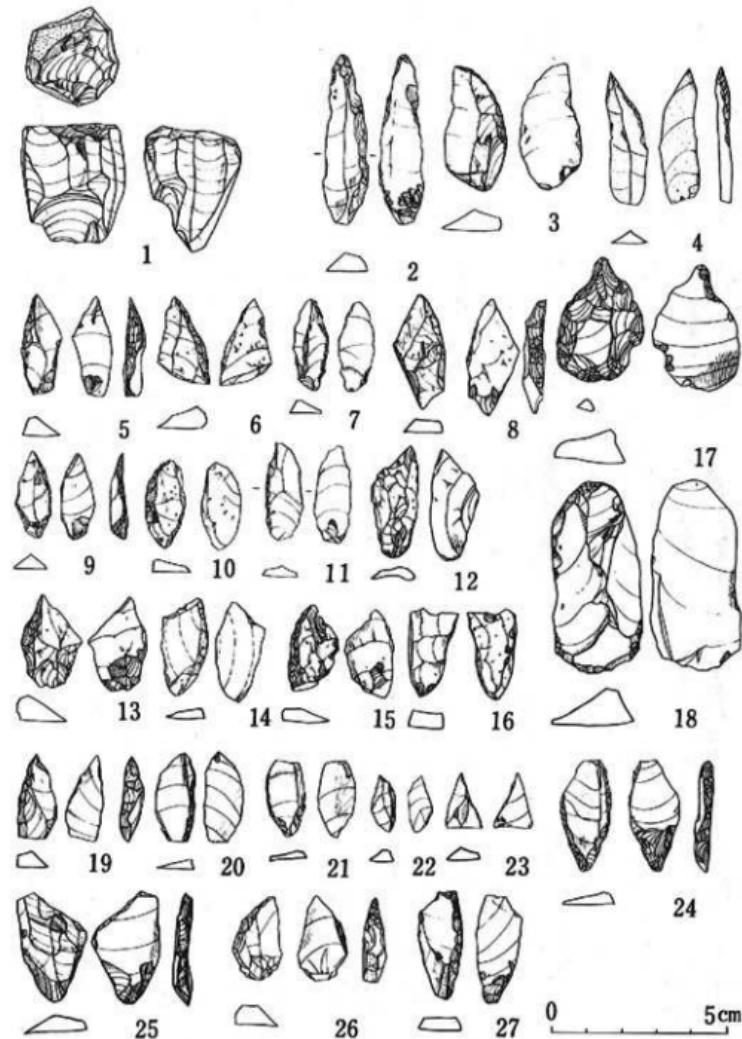
第40図 駿豆地方の旧石器実測図(8)

1-4-庚甲松遺跡、5-6-古崎A遺跡、7-古崎C遺跡、8-9-赤松遺跡、
10-11-カシラガシ遺跡、12-15-奥山遺跡(5-8-10-15-ナイフ形
石器、9-尖頭器、1-4-石核、2-3-細石核)



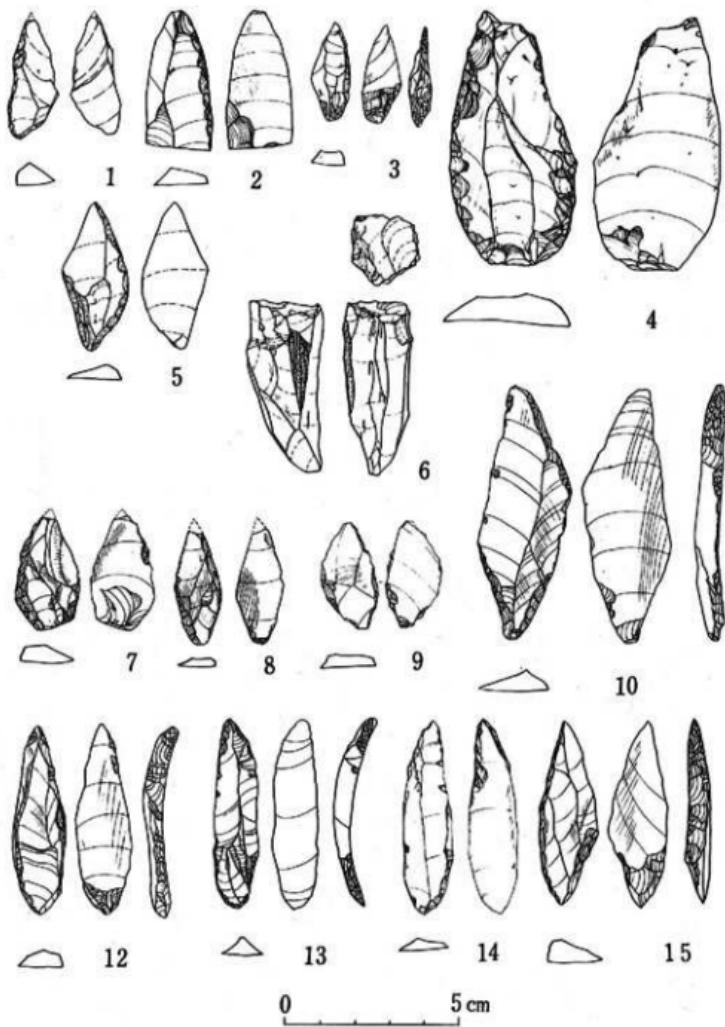
第41図 駿豆地方の旧石器実測図（9）

1～24—北原遺跡（1～17・19～21—ナイフ形石器、24—尖頭器、22—抜入り
削器、18・23—石核）



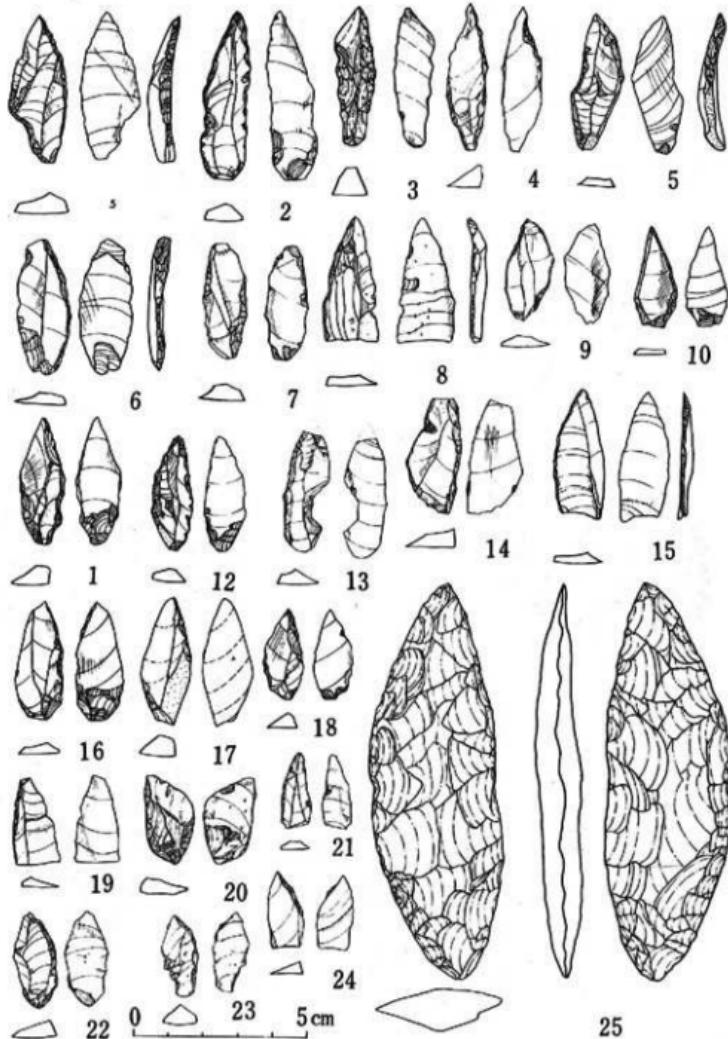
第42図 駿豆地方の旧石器実測図 (10)

1—北原遺跡、2—18・28—初音ヶ原A遺跡、19—27—初音ヶ原B遺跡
(2—16・19—28—ナイフ形石器、17・18—擡器、1—石核)



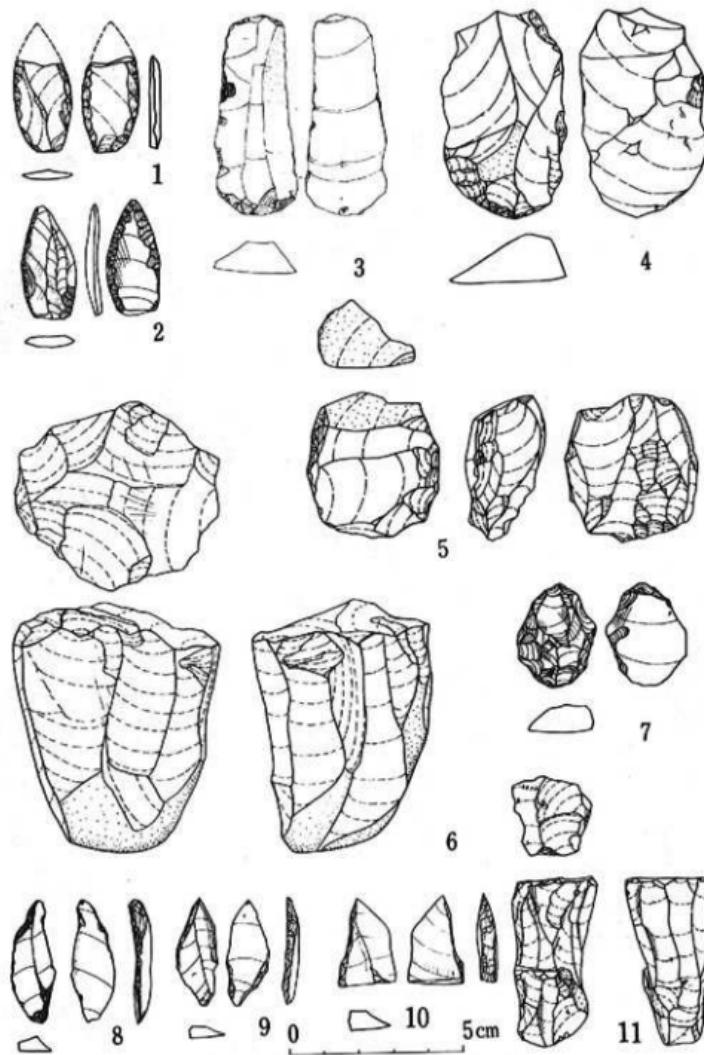
第43図 駿豆地方の旧石器実測図（11）

1~6—初音ヶ原B遺跡、7~8—初音遺跡（仮称）、9—三本松遺跡、10~15—上原遺跡（1~3・5・7~15—ナイフ形石器、4—削器、6—石核）



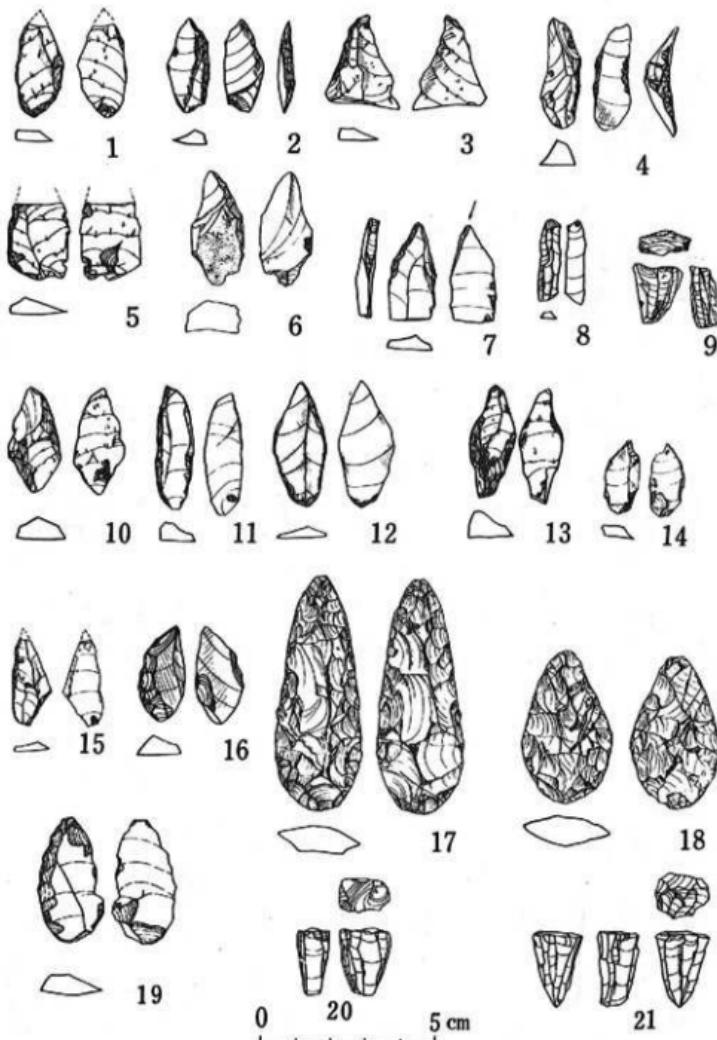
第44図 駿豆地方の旧石器実測図 (12)

1~25—上原遺跡 (1~24—ナイフ形石器, 25—尖頭器)



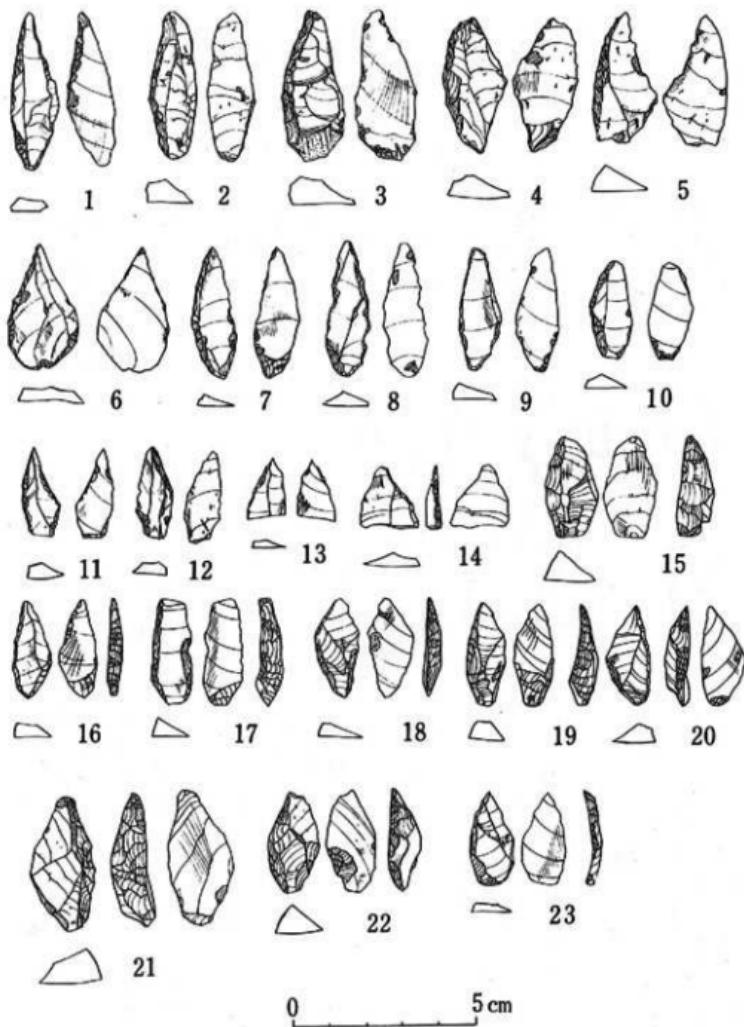
第45図 駿豆地方の旧石器実測図 (13)

1~7—上原遺跡, 8~11—下原遺跡 (1・2—尖頭器, 8~10—ナイフ形石器, 3・4・7—掻器, 5・6・11—石核)



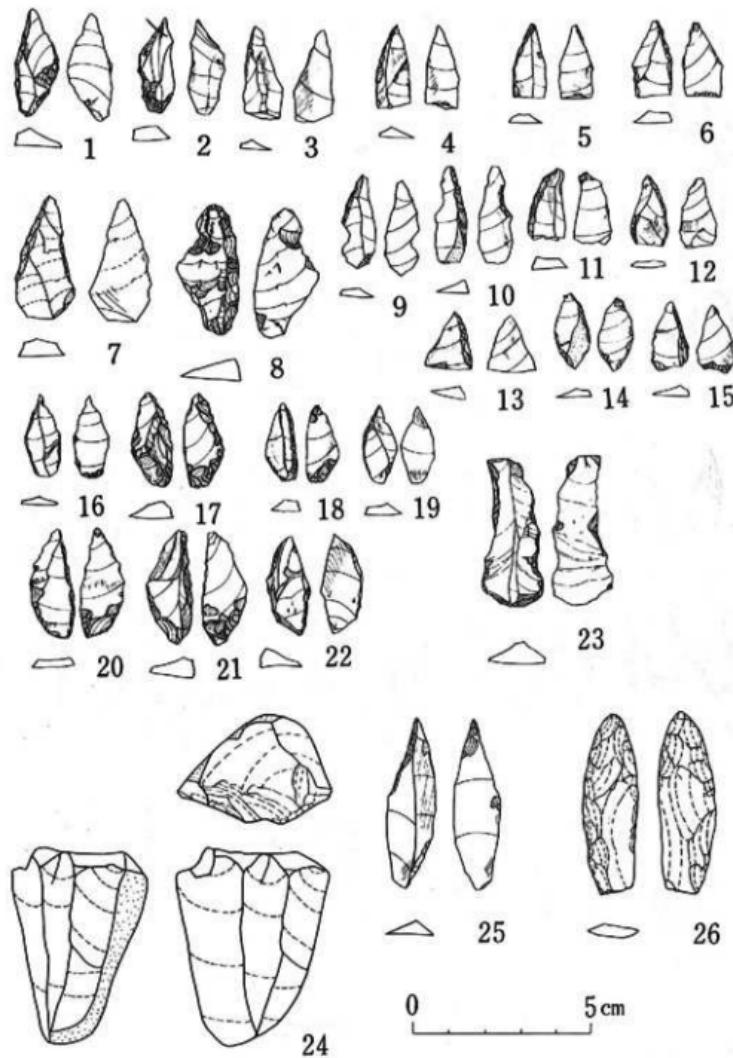
第46図 駿豆地方の旧石器実測図 (14)

1~9一下人原遺跡、10~12一北甚助遺跡、13・14一高天ヶ原遺跡、15一台遺
跡、16一日向山遺跡、17・18一大越遺跡、19一猫山遺跡、20・21一尾尻遺跡、
(1~6・10~16・19—ナイフ形石器、17・18—尖頭器、7—彫器、8—細石
刃、9・20・21—細石核)



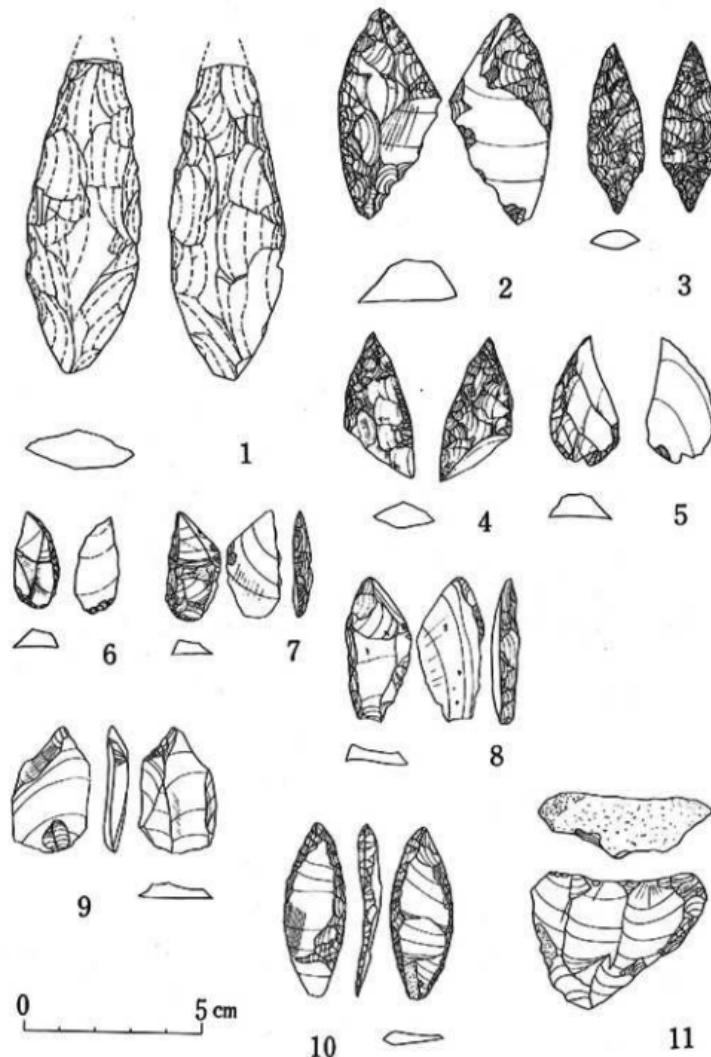
第47図 駿豆地方の旧石器実測図（その15）

1~23—大堀遺跡（1~23—ナイフ形石器）



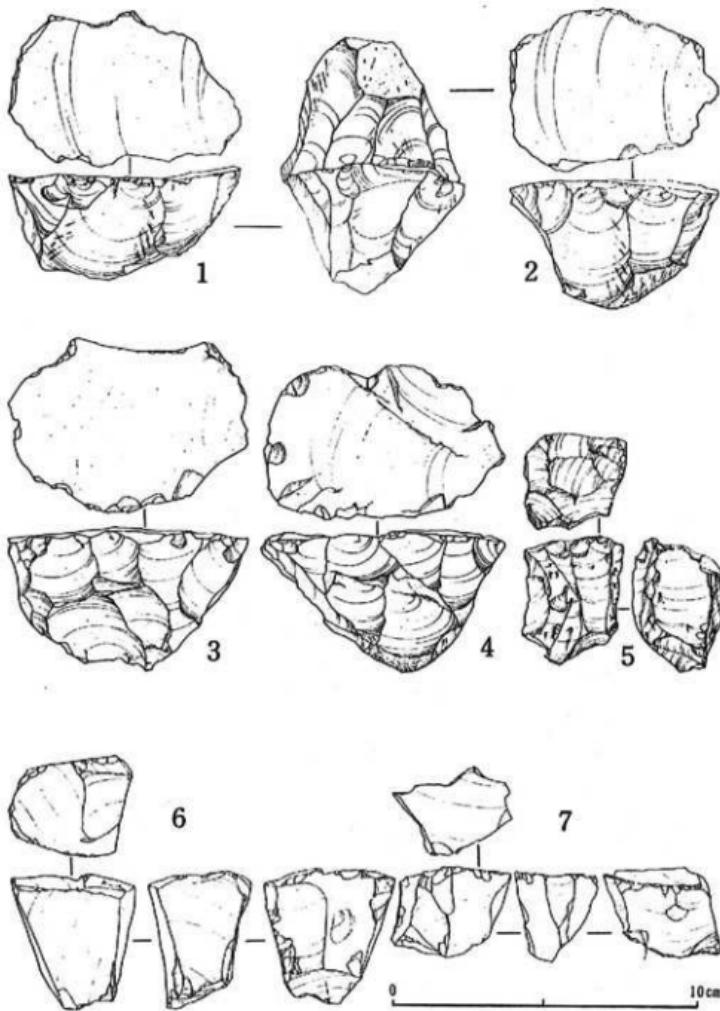
第48図 駿豆地方の旧石器実測図（その16）

1-24—伊食宇根遺跡、25-26—久保上遺跡、(1-22・25—ナイフ形石器、23—搔器、24—石核、26—尖頭器)

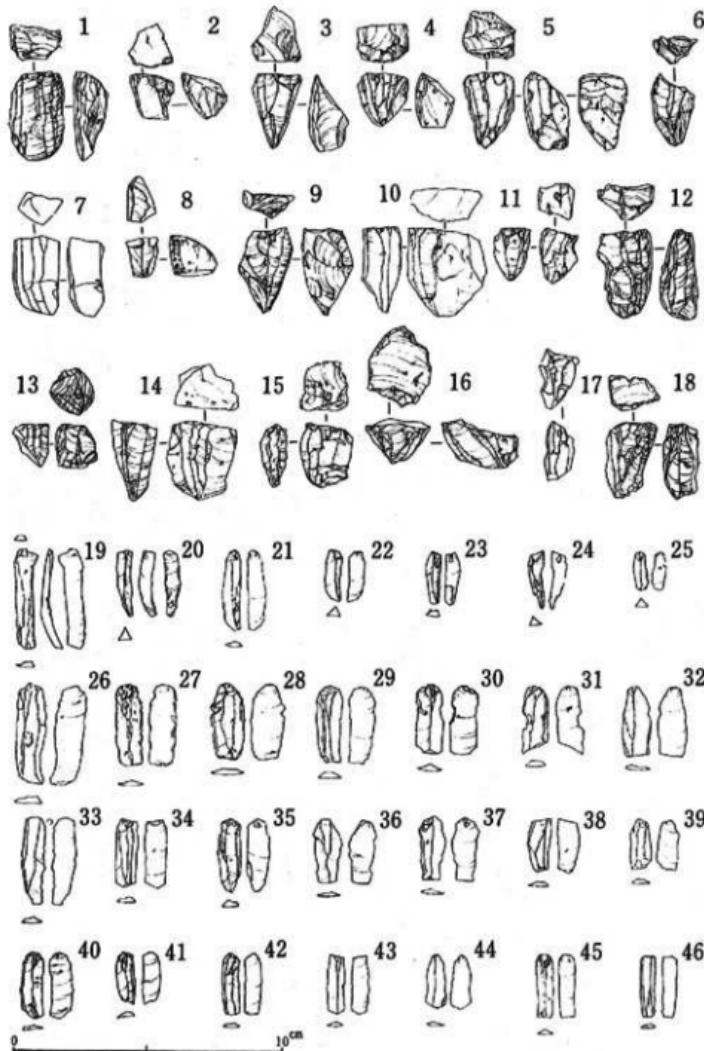


第49図 駿豆地方の旧石器実測図 (17)

1—天神原遺跡、2～5—小森遺跡、6—千居遺跡、7～11—クズ原沢遺跡、
(1・4・10—尖頭器、2～8—ナイフ形石器、2—尖頭様石器、9—彫器?)、
11—石核、3—有舌尖頭器)

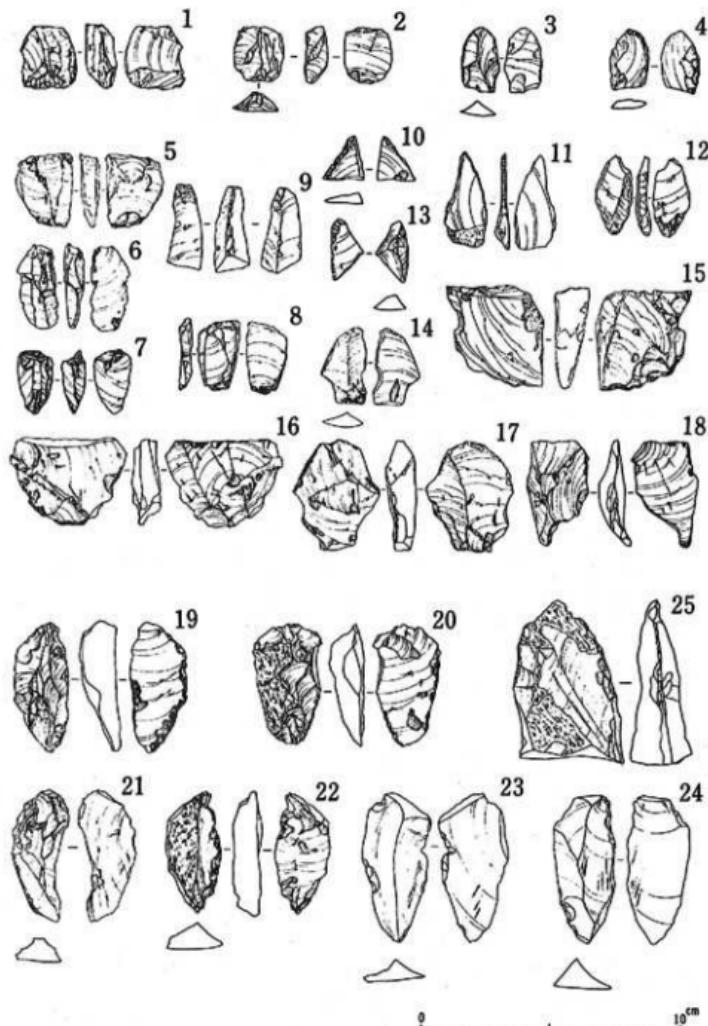


第50図 駿豆地方の旧石器実測図（18）
1～7—体場遺跡（1～7 石核）考古学集刊第3巻第2号より



第51図 駿豆地方の旧石器実測図(19)

1~46—体場遺跡(1~18—細石核, 19~46—細石刃)考古学集刊第3巻第2号より



第52図 駿豆地方の旧石器実測図(20)

1~25—体場遺跡 (1・2—錐器, 3・4—爪形石器, 5~8—形器, 11・12—ナイフ状石器, 15~18・25—大型剝片石器, 19~24—刀器状剝片, 9・10・13・14—その他) 考古
学叢刊第3巻第2号より

第八章 考察

第一節 静岡県の先土器文化

静岡県における先土器文化の研究史については、すでに第一章序説において、その概略を記述した。したがつてここでは静岡県における先土器時代遺跡の分布・立地・遺構・石器の内容・編年等について触れてみたいと思つ。まず静岡県内の先土器時代遺跡について、現在知見に上るものを見次に一覧してみよう。

第一表 静岡県における先土器時代遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	遺物	石材	文献
1	天神原	賀茂郡南伊豆町伊浜	丘陵上	尖頭器	黒・玄	21・22
2	下条	" " 渥	丘陵	尖頭器		21・22
3	荒巻	東伊豆町稻取	丘陵	尖頭器		21・22
4	柏久保	田方郡修善寺町柏久保	台地	搔器・剥片		21・22
5	向原	大仁町三福	台地	ナイフ形石器	黒・玄	21・22
6	沢	" " 三福	台地	搔器・尖頭器・小石刃	黒・貞	21・22
7				(小野寒見)		21・22

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24
北原	カシラガシ	笹原	鎌ヶ沢	鬼坂	海老ノ木平	山中D	山中C	順合寺	山中A	井戸尻	桃山	大越	上原	大田原	三本松	大田原	下人原
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
塚原新田	市ノ山新田	塚原新田	小沢	塚原新田					山中新田	三島市元山中	熱海市泉	伊豆山	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵
丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵
ナイフ形石器・尖頭器・削器・石核	ナイフ形石器	ナイフ形石器	尖頭器	尖頭器	ナイフ形石器・尖頭器・細石核	ナイフ形石器・尖頭器	ナイフ形石器・尖頭器	ナイフ形石器・細石核	ナイフ形石器・細石核	刃器・ナイフ形石器	ナイフ形石器	尖災器・有舌尖頭器	尖頭器	ナイフ形石器	ナイフ形石器・石核・尖頭器・搔器	ナイフ形石器・石核・細石核	石核・ナイフ形石器
黒・貞・安・チャート	黒	黒	安	黒・安	黒	黒	安	黒・安	黒	黒	黒	11	21・1・11	(小野実見)	黒	黒・貞・安	黒・安
6・21・26	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6

番号	遺跡名															所 在 地	地形	遺 物	石材	文 献
	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	初音ヶ原A	初音ヶ原B	
里平	觀音原	清水原	觀音洞	日向山	南山	奧山	赤松	台崎C	台崎A	庚申松	馬場	トビノス	御座松	三島市玉沢	三島市塙原新田					
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
沢地			笠原新田																	
丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	ナイフ形石器・搔器	ナイフ形石器・石核・削器	
尖頭器	ナイフ形石器	石核	ナイフ形石器		刀器	ナイフ形石器	ナイフ形石器・尖頭器	ナイフ形石器・石核・細石核												
安	黒	黒	安	黒	黒	安	黒	黒・安	頁	頁	黒・黒	黒・安	黒・安	黒・黒	黒・黒	黒・黒	黒・安	黒・安・頁		
20	6		6	6	1	1 3 6 21 31	6	6 21	6 31	6 21	6 21	6 31	6 21	6 31	6 21	6 31	6 21	6 21	6 21	

76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59
長 塚	清水 柳	上 松沢 平 川	中 峰	上 山 地	上 野 E	尾 尻	八 反 田	ナ ー ゴ 山	コ ス ケ B	コ ス ケ A	三 島 辻	雷 平 下	扇 平 C	扇 平 B	扇 平 A	反 烟	徳倉
"	"	沼津市岡宮 東沢田	梶野市金沢 岡一色	"	"	"	"	駿東郡長泉町下長窪 上長窪	佐野 萩ヶ窪	佐野	丘 陵	市ヶ沢	"	"	"	元山中	
丘 陵	丘 陵	丘 陵	丘 陵	台 地	台 地	台 地	台 地	台 地	台 地	台 地	丘 陵	丘 陵	丘 陵	丘 陵	丘 陵	丘 陵	ナイフ形石器
尖頭器	有舌尖頭器	敲打器 (握斧) 刃器	有舌尖頭器					細石刃・細石核	ナイフ形石器・石核・搔器	ナイフ形石器	ナイフ形石器	ナイフ形石器	ナイフ形石器	ナイフ形石器	ナイフ形石器	ナイフ形石器(?)	
玄 頁	玄 頁	玄 頁	頁 貢 ・ 黑	頁	頁	黑	黑	黑	安	安	黑	黑	安	頁	黑	黑	
8	29	小 野 藏	28	27	10	10	10	10	1 · 25	6	6	6	20	6	6	6 · 18	6

番号	遺跡名	所在地	地形	遺物	石材	文獻
93	春山	猫山	大山	舟山	鉢山	八郎山
92	山	山	山	山	神山	ヒロンバ
91	山	山	山	山	山	八丈岩
90	山	山	山	山	山	城野
89	山	山	山	山	山	赤堺
88	山	山	山	山	山	大原
87	山	山	山	山	山	芝原
86	山	山	山	山	山	大原
85	山	山	山	山	山	大原
84	山	山	山	山	山	大原
83	山	山	山	山	山	大原
82	山	山	山	山	山	鳥谷
81	山	山	山	山	山	東原
80	山	山	山	山	山	西椎路
79	山	山	山	山	山	目黒身
78	山	山	山	山	山	休場
77	葛原沢	葛原沢	沼津市足高	八兵衛屋敷	丘陵	丘陵
"	"	"	"	"	"	西沢田
"	荒久	平沼	石川	平沼	井出	根古屋
丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵
丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵	丘陵
尖頭器	ナイフ形石器	尖頭器	尖頭器	尖頭器	ナイフ形石器	ナイフ形石器・尖頭器・搔器
						細石核・細石刃・尖頭器・ナイフ形石器
						ナイフ形石器・尖頭器
黒	チャート	黒	黒	黒	黒・真	黒・安・貢
9	小野藏	静岡工業高校藏	9・26	9・21	9	2
26					2	2
					小野藏	沼津考研藏
					2・17・21	(昭和38年発掘) 2・4・13 39年発掘 21・17
					17	30
						17
						8・17

111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94
山田原Ⅲ	山田原Ⅱ	山田原Ⅰ	天ヶ谷	段	日本平	浅間林	千居	坂上	楠金	小塙	横道	中島	字東川	峰山	的場	陣ヶ押	メツコ
"	"	"	袋井市山田原	静岡市片山	清水市日本平	庵原郡富士川町北松野	富士宮市沼久保	上条	長貞	天間	"	"	鶴無ヶ淵	"	境	"	富士市船津
台地	台地	台地	丘陵	丘陵	山上	河岸段丘	台地	台地	河岸段丘	丘陵	台地	台地	台地	台地	台地	丘陵	丘陵
尖頭器・小石刃	石核	小石刃・刺片	ナイフ形石器	刃器	細石核・尖頭器	ナイフ形石器	尖頭器・刺片	ナイフ形石器	刺片	ナイフ形石器	小石刃	小石刃	搔器・小石刃	搔器・小石刃	ナイフ形石器	ナイフ形石器	ナイフ形石器・小石刃
頁	頁	頁				黒・チャート	玉髓			黒・頁						黒	黒
1	1	1	磯部家所藏	1	1·3	12	16	1	1	(昭和21年発掘)	1·13	1·13	13	2·13	2·13	9·13	

																	番号	遺跡名	所在地	地形	遺物	石材	文献
128	127	126	125	124	123	122	寺谷	上原	上原	上原	藤上原	藤上原	藤上原	藤上原	112	藤上原Ⅰ	磐田市藤上原池端前	台地	ナイフ形石器・尖頭器・石核・刃器・彫器・搔器				
勾坂中Ⅰ	勾坂上V	勾坂上IV	勾坂上III	勾坂上II	勾坂上I	寺谷Ⅱ	I	IV	III	II	V	IV	III	II	"	"	"	"	"	"	"		
"	"	"	"	"	"	"	寺谷原・出作	"	"	"	"	"	"	"	"	上原古坂上	中原	池端東	池端東	細石核・剥片			
勾坂中					勾坂上																		
台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	台地	小石刃・剥片			
小石刃	小石刃	小石刃	小石刃	小石刃・石核																			
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	(35年発掘) 1 3 5	

136	135	134	133	132	131	130	129
次郎大夫前	東平	梶池	吉野町	善光平	広野	竹之内	勾坂中Ⅱ
"	"	"	"	"	磐田郡豊田村広野	" 竹之内 (向陽中学校)	" "
吉野町	神ヶ谷町	宮口	浜松市吉野町	豊岡村社山			
丘陵	台地	台地	丘陵	台地	台地	台地	台地
有舌尖頭器	尖頭器・有舌尖頭器	細石核	ナイフ形石器・尖頭器	石核	細石核	剥片・刃器	小石刀
				硬砂・黒			
15	15	15	15	15	1	1	1

参考文献

2. 静岡県教育委員会「静岡県遠跡地名表補遺」(静岡県の古代文化)昭和三十八年。

3. 市原秀文「静岡県の無土器文化」(静岡県の古代文化)昭和三十八年。

4. 杉原莊介・小野真一「静岡県休場遺跡の粗石器文化」考古学集刊第三卷第一号、昭和四十年。

5. 麻生優・小田静夫「静岡県磐田市大森寺塔頭前遺跡」人類學雑誌第七十四卷第一号、昭和四十一年。

6. 秋本真澄「伊豆の後期旧石器文化図録」昭和四十三年。

7. 漆畠稔「大仁町の旧石器・縄文文化」大仁町教育委員会、昭和四十三年。

8. 沼津市「沼津市誌」下巻。(小野真一「文化財篇」)昭和三十三年。

9. 原町「静岡県原町誌」(小野真一「先史社会の形成」)昭和三十八年。

10. 長泉町「長泉郷土誌」(小野真一・篠津海祥「原始社会」)昭和四十年。

11. 热海市「热海市史」上巻。(長田実・小野真一「原始時代」)昭和四十二年。

12. 富士川町「富士川町史」。(福澤甲子男「原始時代」)昭和三十七年。

- 13・富士市「富士市史」上巻。（中野国雄「富士市のあけぼの」）昭和四十四年。
- 14・富士市「富士市史」。（植松章八「無土器文化の時代」）昭和四十六年。
- 15・浜松市「浜松市史」。（向坂鋼一「原始編」昭和四十三年。）
- 16・小野真一・尾形鶴正・秋本真澄「大石原千居遺跡」2。昭和四十七年。
- 17・沼津商業高等学校郷土研究部「沼津地方の旧石器文化」東静郷土研究第五号、昭和四十年。
- 18・沼津商業高等学校郷土研究部「箱根山地における五輪C遺跡」東静郷土研究第六号。昭和四十一年。五輪Cは扇平Aと同じ。
- 19・韭山高等学校郷土研究部「韭山における先土器遺跡の調査」東静郷土研究第七号。昭和四十二年。
- 20・韭山高校郷土研究部「ればうと」第一号。昭和三十九年。
- 21・小野真一「郷土の先史文化」沼津女子高校考古館第三回考古学講座講演要旨。昭和三十九年。
- 22・沼津女子高等学校郷土研究部「うぶすな」第九号（南伊豆町特集号）。昭和二十八年。
- 23・沼津女子高校郷土研究部「うぶすな」第七号（東伊豆町特集号）。昭和三十五年。
- 24・沼津商業高等学校郷土研究部「郷のあけぼの」昭和二十四年。
- 25・小野真一「静岡県東部古代文化総覧」昭和三十二年。
- 26・静岡県高等学校社会科研究協議会「日本史学習のための静岡県郷土資料集」昭和四十年。
- 27・長泉町教育委員会「上長篠遺跡群」佐藤民雄・福垣甲子男・小野真一・他。昭和四十六年。
- 28・篠津海祥・小野真一・佐藤民雄「駿東郡裾野町上長篠遺跡発掘調査概報」東名高速道路関係（静岡県内工事）埋蔵文化財調査報告書。昭和四十五年。
- 29・篠津海祥・白石竹雄「沼津市清水柳遺跡発掘調査概報」前同。昭和四十五年。
- 30・小野真一「目黒身」沼津市教育委員会・沼津考古学研究所。昭和四十五年。
- 31・三島市「三島市誌」（長田実「原始社会」）昭和三十六年。

以上の表で見ると、最も多く発見されている地域は富士川以東の、いわゆる東部で、これに大井川以西の西部（遠州地方）が次ぎ、中部は最も少ない。東部でも特に箱根山地が圧倒的で、これも三島の旧東海道の沿線に多く分布することが知られる。これは三島・箱根を結ぶ重要な幹線道路があるため、交通の便がよく、多数の研究者が盛んに踏査をしたためでもあ

る。しかし近年はその周辺一帯に足跡が及び、特に南部の函南町・莊山町・大仁町、さらには修善寺町にまで分布が知られるようになった。

一般に箱根山地は火山灰層が厚く堆積し、平坦な面では先土器時代の遺物を含む黄褐色ローム層の上に、暗褐色（栗色）土層や黒色土層が五〇~八〇センチ位堆積している。また斜面の地域では表層の耕土が長い間に風雨のためかなり流出し、ところによつてはロームまでの深さが三〇センチ位になつてゐるところもある。それでも陸稻・麦・甘藷及び普通の野菜の栽培程度では、とてもローム層まで鉢が及ばない。ところがこの地域は古くから「三島大根」と呼ばれる丈の長い、しかも良質の大根を産し、さらに同様の「牛蒡」・「人夢」の本場でもあつたため、深掘りが盛んに行われてゐるのである。しかも近年各所で地力恢復のため「マサ打ち」（天地返し）が行われ、下層のロームと表層の混合化が行なわれてゐる。したがつて黄褐色ロームと共に、旧石器が多く地表に顔を出しているわけである。

愛鷹山地でも「牛蒡」などの長物の栽培が一部で行われてゐるが、いづれも農家の自給用で、小規模であり、品質も落ちる。したがつて鉢先がロームに及ぶことは少なく、表面採集は困難であり、したがつて古い農道（山道）の両脇の崖面や、工事現場から偶然に発見される程度である。それでも今後の調査如何では箱根山地に劣らない濃密な分布が確認されるであろう。

中部の日本平など有度山地や、西部の磐田原台地は表土も比較的薄く、耕作により遺物の出土も容易である。ただ中・西部地方は茶園や密柑園、森林などが多く、今後の開発や線密な調査により、一層増加するものと思われる。

次に立地並びに層位であるが、立地としては箱根・愛鷹・富士山麓などの台地、日本平・磐田原などの隆起台地など、いずれも洪積台地がえらばれ、他に海岸段丘や河岸段丘などに位置する場合もある。地層は愛鷹山地に例をとると、一般に第一層の表土（又は耕土）の下に、スコリア含有黒色土層（第二層）、黒色土層（第三層）、栗色土層（第四層）、黄褐色ロ

ーム層（第五層）、スコリア質ラビリー含有赤褐色ローム層（第六層）、埋没黒土層（第七層）などの堆積がみられ、旧石器を出すのは第五層の黄褐色ローム層である。この層は愛鷹ローム層の中でも最上位のもので、関東の立川ローム層に対比され、発見される旧石器はいづれも後期旧石器で、刃器や尖頭器、細石器等を主体としている。沼津市の休場遺跡はこの愛鷹山地で発掘された著名な遺跡であるが、ここでは海拔二八〇メートルという高所にあり、黄褐色ローム層は表土から約二メートル下方に存在した。そしてこのローム層に無数の石器類や石屑が含まれていたのである。ここでは大小二つの炉址が発見され、その中から発見された木炭を資料にC14測定が行われた結果、一四三〇〇プラスマイナス七〇〇年前という年代数値を得られ、休場石器文化期として編年づけられている。その年代からみて細石器文化としては最古期のものと考えられる。このほか、明治大学考古学研究室で発掘した沼津市柳沢のイラウネ遺跡や、筆者らの調査した同じ柳沢の大廓遺跡があるが、いづれも休場より古いナイフ形石器を主体とし、やはり黄褐色ローム層より出土している。この黄褐色ローム層は古期富士降下火碎層とも呼ばれるもので、愛鷹山のみではなく、東は箱根山地、西は富士山地から芝川付近一帯を被覆しておる、箱根山地では三島市北原、台崎、富士山及びその西辺では千居や小塚など、いづれもこの層から旧石器を出土することが確認されている。そこで筆者らは早くよりこの層を休場層と呼び、加藤芳郎氏を中心とする愛鷹ローム研究会（地学グループ）もこの名称を用いている。

磐田原台地では藤上原I遺跡（池端前）に例をとると、第一層が黒色の表土層で、厚さが約二〇~三〇センチあり、その下に暗黃褐色土層が三〇~四〇センチ前後の厚さでみられ、その下は褐色土層（第三層）、淡黃褐色土層（第四層）、疊混り黄褐色粘土層（第五層）、砂利層（第六層）となる。旧石器の包含層は第二層で、第三層以下は皆無であった。他に発掘例を聞かないため、磐田原台地全体の様相を知りかねるが、大体同様な状態と推察される。

なお藤上原I遺跡では、第二層よりナイフ形石器・彫刻器・搔器・範状石器・両面加工の石器（尖頭器？）・石刀・石核

剝片・磨石などの石器群が発見されている。

さて先土器時代の遺構としては、県内で休場遺跡の大小二つの炉址が知られているのみである。この炉址については杉原莊介氏による住居址説があるが（注1）、筆者は①大小二つの炉址は同時に多數の人間の使用が可能である。②一〇メートル四方位の間に四〇〇点以上の鋭い剝片類（石器、石屑）が散乱している点、住居には不適当である。などの理由から、屋外における共同体の石器製造址を考えている（注2）。そしてその周間に掘つ立ての簡素な住居が幾つかあつたものと推定するのである。いづれにしても今後一層細かな調査が必要であろう。

静岡県内発足の旧石器の内容については、敲打器・刀器・攝器・彫刻器・尖頭器・細石器など各種のものが出土しているが、杉原氏のいう敲打器の段階の石器は、確実なものがまだ発見されていない。現在知られている礫器類は、箱根・愛鷹両山地及び磐田原台地にみられるが、ほとんど刃器文化の段階のものと考えられるからである。裾野市金沢字上川発見の石器などは擗斧（ハンドアックス）に似ているが、同じ遺跡で刃器がやはり出土している。刃器または剝片石器の類は静岡県下各地できわめて多く発見され、特にナイフ形石器は豊富である。一般に駿豆地方のものは黒曜石を材料としたものが多く、遠州地方では珪質頁岩が石材として多く用いられている。市原寿文氏がすでに指摘されておられる如く（注3）、いづれの場合にも背面はほとんど手つかずで第一剝離面を残し、大体において片面加工のようである。また石器背面からみて、縦長の剝片を素材としている点も共通している。全体的にみて形態は関東地方における茂呂型ナイフの系類に属するようで、他に杉久保型ナイフに似たものもあるが、数は少い。細石器も県内各地から発見され、普遍的に分布するようであるが、沼津市の休場を除いては発掘例がない。休場のものはナイフ形石器のやや新しい段階のものや尖頭器などを少量含み、年代もC14測定で約一四〇〇年前と出て、細石器文化では日本最古期のものと考えられる。これに対して三島市山中新田の海老ノ木平、駿東郡長泉町下長瀬の尾尻、袋井市の山田原等より発見された細石核をみると、長野県の矢出川出土のものに類似し、

休場よりはやや新しい時期のもと推定される。有舌尖頭器は前に掲げる表にもれたものも多く、県内に多く発見されているが、これも芹沢長介氏により四分類され（注4）、後半の二形式は土器を伴なう場合もあって、縄文時代のものと考えられている。当地方ではまだこの種の石器と土器との関係が究明されず、今後の課題といえよう。

なお編年に関しては、発掘例に乏しく、地方との対比により考究しなければならない状態であるが、これについてはなお検討の上後日発表したいと思う。ただ同じナイフ形石器についてみても田方郡函南町の上原や、三島市北原などにみる如く、尖頭器を殆んど含まず、多量のナイフ形石器を出す遺跡、芝川町小塚の如く、やや古式の尖頭器を伴出すする遺跡があり、またナイフ形石器や尖頭器をごく少量に、細石器を多量に出土する休場遺跡など、編年の一つの目安になりそうである。

最後に旧石器の石材について若干補説しておこう、すでに述べた如く、ナイフ形石器などの刃器において、駿豆地方では黒耀石、遠州地方では硅質頁岩が多く用いられているが、これはその他の石器についてもほぼ同様である。これは前者が新生代の火山地帯で火成岩を基盤とし、後者は古生代の堆積岩を基盤とする地域である点、当然の現象であろう。しかしその間にはやはり両者の交流も僅かながら見られるようである。なお箱根、愛鷹両山地では安山岩、富士山周辺では玄武岩が一部で用いられているのも、それぞれの山地で得やすい石材のためである。また同じ黒耀石でも、静岡県東部及び箱根山地に六ヶ所の産地が知られており、遺跡との関係が今後検討されるべきであろう。箱根・伊豆方面で使用されている黒耀石は、同地域で産出する軽石粒を含むやや粗悪なものが多く、愛鷹・富士両山地では透明度の高い良質のものが多い。愛鷹山地にその産地があるのか、あるいは信州方面からの搬入であるか、今後充分検討をするものである。

（小野真一）

(注)

1. 杉原莊介・小野真一「静岡県休場遺跡の細石器文化」考古学集刊第三卷第一号。昭和四十年。
2. 小野真一「沼津市休場遺跡とその周辺」沼津女子高校第四回考古学講座講演要旨。昭和四十年。
3. 市原寿文「静岡県の無土器文化」(静岡県の古代文化)昭和三十八年。
4. 芹沢長介「新潟県中村遺跡における有舌尖頭器の研究」日本文化研究所報告第二集。昭和四十一年。

第二節 旧石器についての考察

石器の組成についてみると、ナイフ形石器と尖頭器を主体とし、数量的には前者の方がやや多い。他に少数ながら搔器・刃器が伴っている。ナイフ形石器には茂呂型に類似するものと、剥片の先端部と基部とにわずかに細部加工を施したものとが混在し、茂呂型類似のナイフ形石器は比較的小形化している。尖頭器は両面加工のものと、片面加工のものがあり、両面加工のものは加工状態も粗く、形状も左右非対称的である。片面加工のものは剥片を素材とし、その周縁部に細部加工を施して製作されている。石核はほとんどが扁平で、しかも打面調整がされてなく、舟底状の石核が含まれている。搔器も小形で握持状のものである。以上の石器及び素材の出土層位をみても一時期の文化に分けられる可能性はなく、同一文化の所産と思われ、ナイフ形石器と尖頭器が共存することや、搔器やナイフ形石器にみられる小形化の傾向、舟底状の石核を伴出す点などを考えると、本遺跡はナイフ形石器を主体とする文化の終末期と思われる。しかし、当地方において先土器時代に関する調査例はまことに少なく、ナイフ形石器と尖頭器とが併出する遺跡の調査例もない。従つて、いわゆる尖頭器を主体とする文化の様相も何一つとして知られておらず、時代的位置づけなどについては今後新しい資料の増加を待つて検討される問題であろう。(秋本真澄)

第九章 結語

すでに述べたように静岡県下における先土器文化研究の歴史は古い。御殿場の鈴木恒治氏が刀器を細石器と間違えたといえ、旧石器として注目した昭和二十三年から、すでに足掛け二十四年の年月が経っている。そして昭和三十年代に、汗をかき鼻水をたらしながら箱根や愛鷹の山野をかけめぐつた秋本君や須磨君・漆畠君なども今では教育界・実業界で立派に活躍し、また熱心な研究を続けている。それは、戦前に同じ山野をかけめぐつた芹沢長介（現東北大学教授・日本考古学協会委員）・江藤千万樹（元加藤学園教諭・戦没）・佐藤民雄（現裾野高校教頭・駿豆考古学会副会長）・長田実（現新居高校長・駿豆考古学会々長）各氏ら、いわゆる考古ボーイといわれた人々や、戦後間もなく活動した筆者（小野）及び笠津・鈴木各氏らよりもっときびしいものがあつたに違いない。すなわち戦前の人達は繩文や弥生などの遺跡を求めて山野を歩いても、そこにはハーモニカを吹き、歌をうたう余裕があつた。そして筆者ら戦後間もなく育った研究者のグループも、豊富な土器や石器に酔いしながら、山を歩き夢を語り、野に休み馬鹿をいう余裕があつた。つまりあくせくしなかつたのである。しかし秋本君ら三十年代に育つた人達は、少なくなつた資料の中で、ひたすら先土器時代の遺物を求めて、血眼になつて駆けめぐつたのである。

ともかく彼等先土器マニアの努力を中心に、駿豆地方の先土器時代遺跡遺物はうなぎ上りに増加した。それと共に正式な学術調査の必要性も痛感され、イラウネ・休場などの遺跡が、明治大学考古学研究室のメンバーと地元研究者の協力により次々に発掘調査されていった。そしてイラウネは刃器文化の、また休場は細石器文化のいずれもすぐれた遺跡であることが解明された。しかしきわめて長期にわたり、百余の遺跡を残している駿豆地方の先土器文化が、僅か一二三の発掘例で究

明できるものではない。数多くの調査と、より多くの資料を通して、帰納的に究明するのが考古学である。しかし現実にはそう活発に、またうまく発掘できるものではない。そこでできるだけ良好な資料の得られる遺跡を、一つでも多く発掘することが望ましいわけである。

今回的小塚遺跡発掘は、こうした期待に充分報いてくれたものといえよう。当初はその発掘地域が遺跡の主体を外れており、旧石器はおろか縄文時代の遺跡すら、期待し得なかつた。しかしひとたび発掘してみると、縄文も出たが、旧石器の多いのに驚嘆し、また歓喜の声が遺跡にみなぎつたのである。老いも若きも、専門家も一般人も皆夢中で発掘した。細心の注意をはらつて……。こうしてローム（赤土）の中から石器・石材・石屑など三百余点を検出したのである。

この小塚に咲いた石器文化を、われわれは小塚石器文化と呼んでいる。その内容は刃器文化の比較的新しい段階にあり、これに古式の尖頭器が伴うのである。尖頭器文化の段階を独立して設定し得るか否か、なお疑問であるが、この種の石器からみれば少なくともその初象期といえよう。イラウネとは大した年代差もなく、そして休場よりは明らかに古い段階の文化であつた。

ともかくこの小塚遺跡の成果が加わつたことで、駿豆地方の先土器文化の研究は今後一段と進展するであろうが、まだまだこれだけで充分にものがいえるわけではない。小塚の第二次調査、あるいはその他の遺跡の調査など今後共たゆまざる努力を続け、解明への道を辿ることがわれわれの使命である。そのためにも研究者の精進はもとより、多くの方々の絶大な御協力を今後共お願いする次第である。

なお末筆ながら今回の調査に当つて、これを主催し、限りない御理解と御援助を賜わった芝川町教育委員会の野村教育長さんを始め事務局の方々、調査団長の齊藤氏、さらには調査に参加された多くの地元有志、学生・生徒諸君に深甚の謝意を表する次第である。

また今回の調査を通じ、芝川町における私の門人唐紙一修君と、佐野文孝君が、多大の尽力をされ、大きな功績を挙げられた事に深く敬意を表すると共に、高校時代から私が育成してきた秋本真澄君が、駿豆地方の旧石器を集大成された絶大な努力に対しても、厚くその労をねぎらう次第である。（小野真二）

著者紹介

日本考古学会員
加藤学園沼津考古学研究所長

小野真一

静岡県文化財調査員
駿豆考古学会委員

唐紙一修

静岡県考古学会委員
加藤学園沼津考古学研究所員

秋本真澄

駿豆立地野中学校教諭
佐川町立地野中学校教諭

佐野文孝

駿河小塚

—静岡県における先土器文化の研究—

昭和四十七年二月二十日 印刷

昭和四十七年二月二十五日 発行
昭和四十九年十月二十五日 再版

静岡県富士郡芝川町長貢一三二の一

芝川町立中央公民館内
発行所 芝川町教育委員会

電話(0544)51-0402

沼津市大岡自由ヶ丘一九七九

編者 加藤学園沼津考古学研究所
(小野真一・秋本真澄)

図

版



富士山と芝川流域平野に挟まれた台地（矢印が遺跡）



山里に囲まれた遺跡（東方丘陵上から）



平坦な台地面に立地する遺跡（西方より）



農免道路内の発掘風景



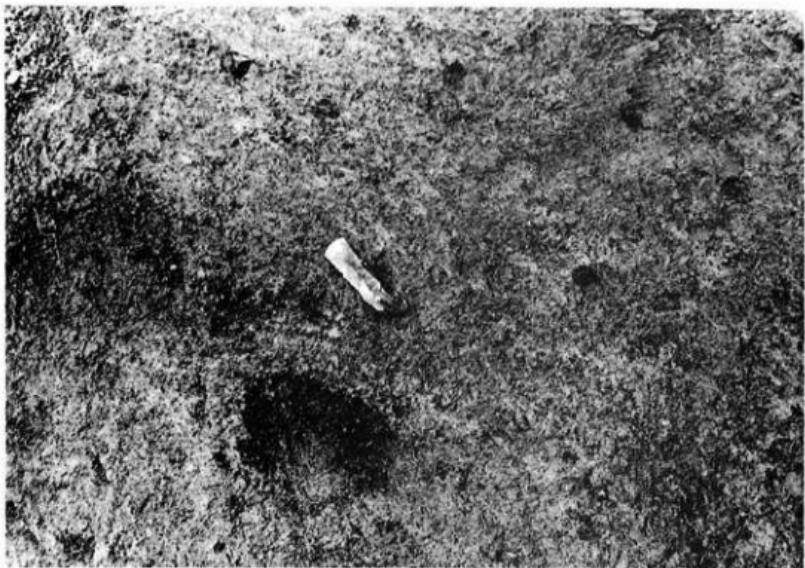
地層断面の様相



ナイフ形石器の出土状態



刃器の出土状態



手縫器の出土状態



尖頭器の出土状態



尖頭器の出土状態



同上



刃器の出土状態



剝片の出土状態



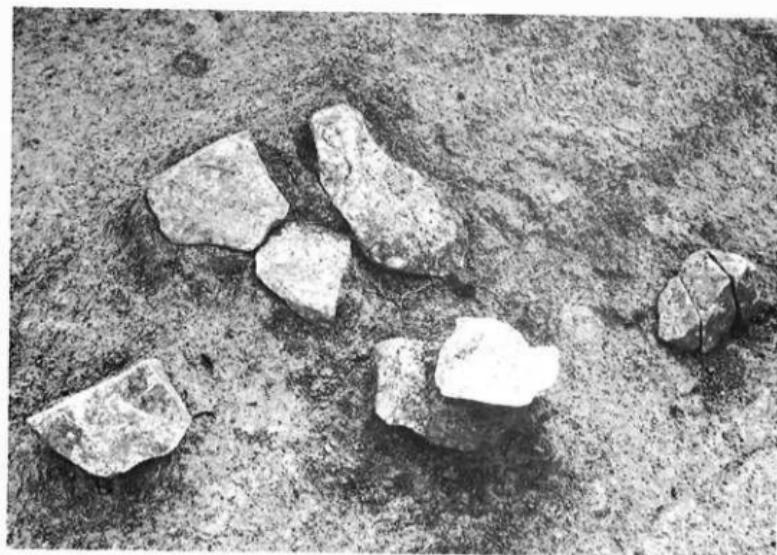
剝片の出土状態



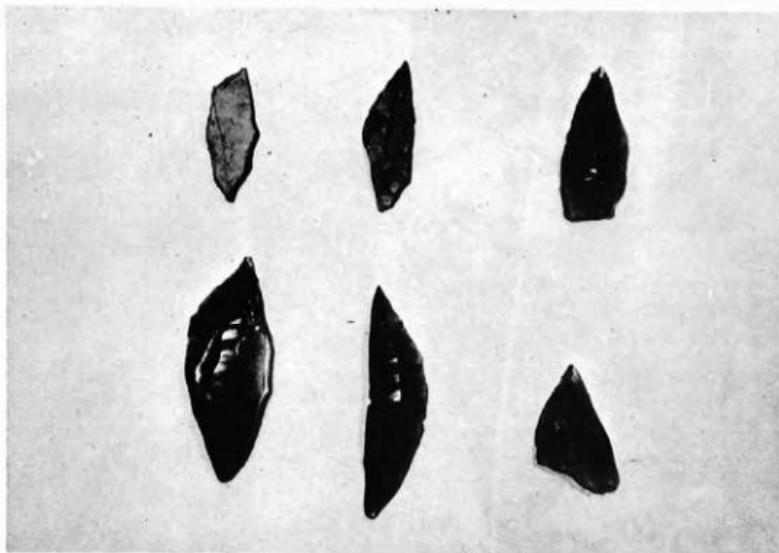
石核の出土状態



頁岩製石核の出土状態



同上



ナイフ形石器(表)



同上(裏)

圖版第一一
小塚出土石器



尖頭器(表)



同上(裏)



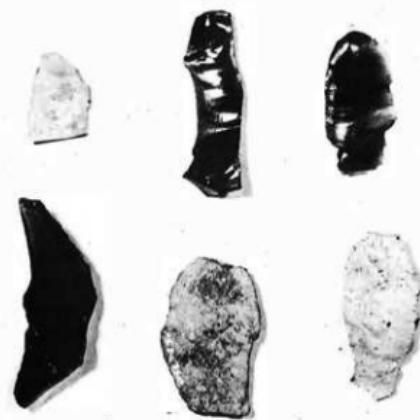
搔器・刃器・剝片(表)



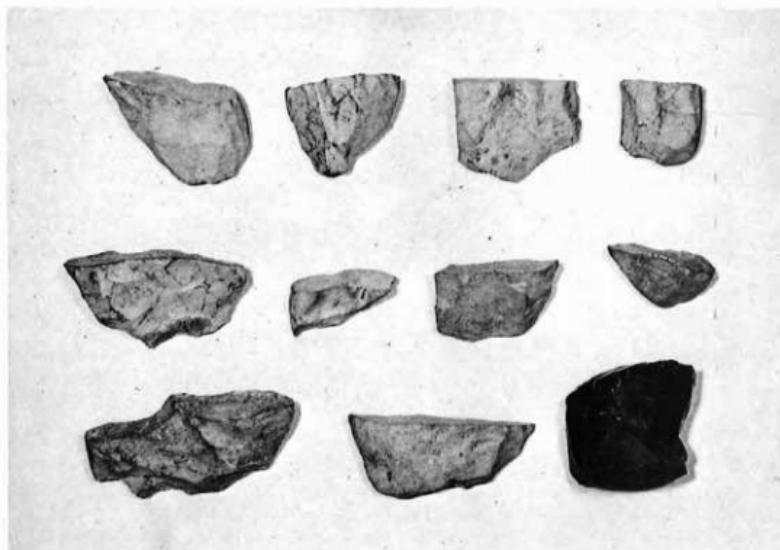
同上(裏)



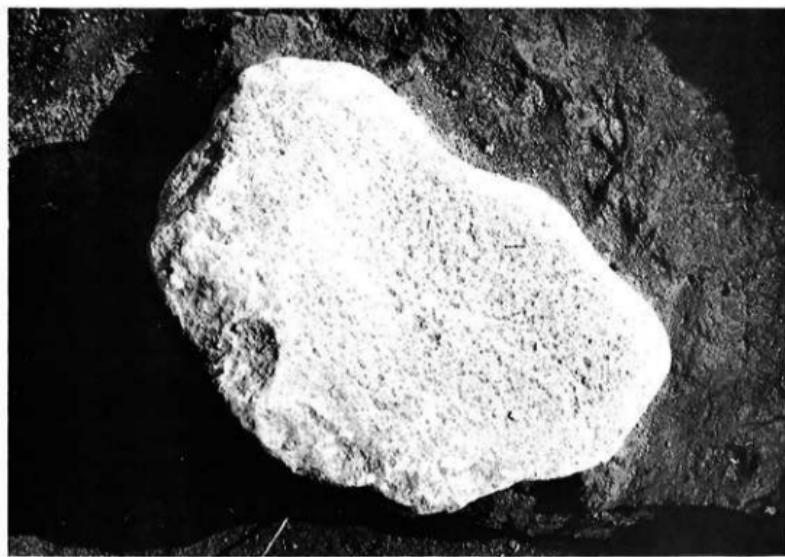
刺 片 (表)



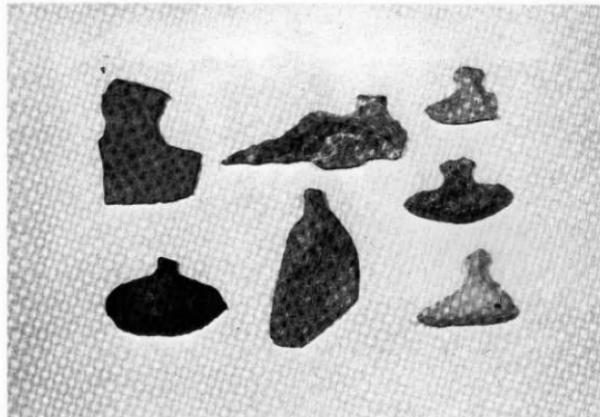
同 上 (裏)



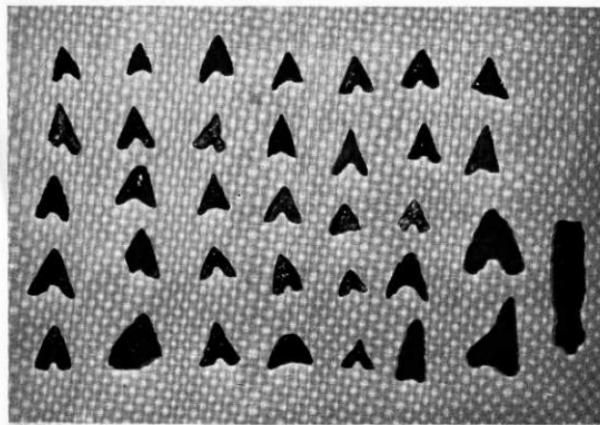
石 核



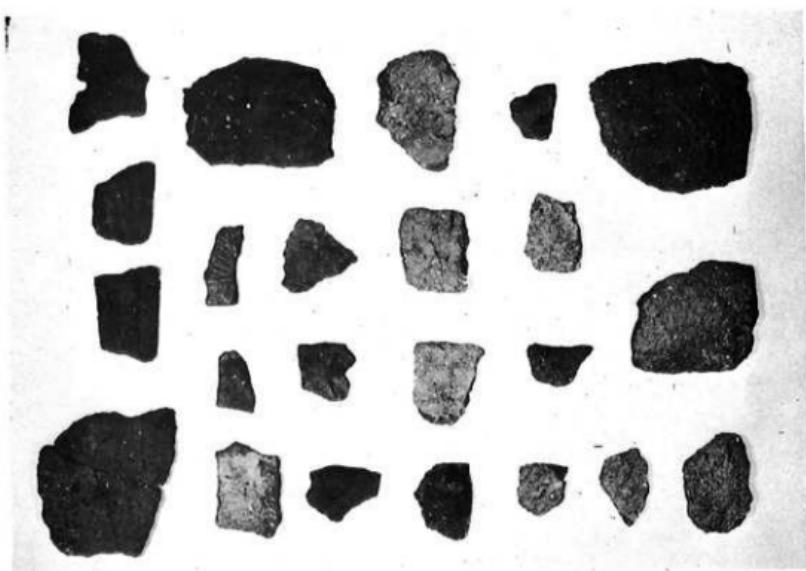
石 皿



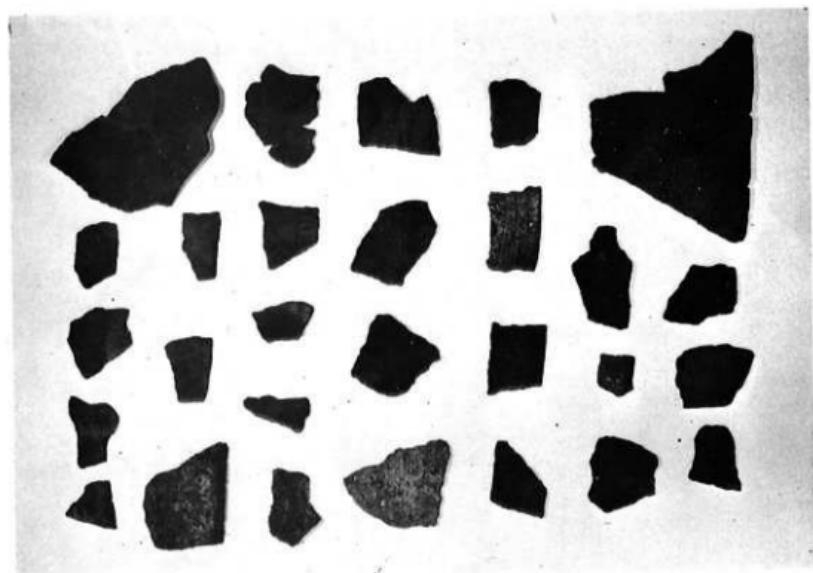
石匙



石簇と有舌尖頭器



早期の縄文土器片



前期の縄文土器片